

# マツバリ遺跡

—木曾谷の縄文中期拠点集落—

在来地区圃場整備事業に伴う発掘調査報告書

1995・3

長野県木曾郡日義村教育委員会

## はじめに

昭和61年～62年度に亘り、日義村原野の在家地区8ヘクタールに、小規模排水対策特別事業という圃場整備が行われることになった。国道より西側を61年度、東側を62年度事業として施工することになった。この地域内の通称マツバリ地籍は、古くから遺跡散布地として注目されていた所であった。

事業計画に先立ち長野県教育委員会文化課と保護協議の結果、松沢川右岸の国道19号線から東側の約10,000m<sup>2</sup>を調査範囲として緊急発掘調査をすることになった。更に62年度事業範囲の変更により2,800m<sup>2</sup>を追加し、広大な調査面積となつたのであった。

当初、田の稲刈終了を待って本格的な調査を開始したが、先ず国道寄りから比較的緩やかな段差のある6枚の田をA地区として表土剥ぎを進めると、次々に遺構や遺物が出現した。黙々と働く従事者も鮮やかな唐草文様土器を見発見するたびに喜々として、作業は意外に歩ったし作業員も増えていった。ついに縄文時代住居址28軒、平安住居址2軒と膨大な量の土器や石器を検出すると、地域の人たちも見学に訪れて驚嘆し、県の埋文センターをはじめ研究者の専門家も駆けつけて遺構実測に協力していただいた。

一段と高い山寄りのB地区では、夥しい川原石を除くと縄文時代の集石墓構が3地点で出現し、耳飾りやヒスイの首飾りなど珍しい遺物も検出し、人や動物の焼骨片、石棺の発見などの成果をあげることができた。

62年度調査の農道から北側のC地区では、更に5軒の縄文時代住居址と、特に注目されるのは、木曾地方では初めての弥生時代中期の住居址と土器の発見があった。

総じてこの遺跡は、縄文時代中期の集落として木曾地方最大のものであり、出土遺物の量と種類の豊富さなどからも大いに注目されるところである。焼土化した穀物の炭塊や獸骨、石鍬等から、私は往時の狩猟や漁獵などの食生活の一端を垣間見ることができるような気がしたし、恵まれた自然環境が存在していたことを察知することができた。また祭祀壇を設けた特殊な住居址もあり、古代人の信仰や自然への畏敬の念に想いを馳せてみた。

さて皆さんは、優れた作技の紋様や数々の土器から、どんなロマンを広げられますか？

本報告書の執筆は、調査を担当していただいた山下生六先生が遺跡、調査経過、住居址について書いてこられたが、上松町の公務が多忙となり、國版段階で一時中断を余儀なくされた。年度を経るにつれ気がかりで仕方なかったが、神村透先生が教職を退かれ、郡町村会と当委員会にお勧めいただいた本年度になり、改めて神村先生に要請して再作成し、全文を執筆していただいたものである。両先生に厚く感謝の意を表します。

平成7年3月

日義村教育委員会教育長 今井元秀

## 例　　言

1. 本報告書は昭和61年（1986）、62年に、日義村在家地区の圃場整備事業に伴い、日義村教育委員会が行った緊急発掘調査の報告書である。
2. 遺構実測図は調査員及び調査協力者が実測し、図面作図は神村がした。柱穴の深さは床面からの深さをcmで示している。
3. 土器の実測図は中央航業株式会社に委託した。一部は神村が実測している。
4. 石器は数量的に多いので、任意に選別して山下が実測・製図した。
5. 遺構写真は山下が撮影し、航空写真は中部電力松本送電所の協力で撮影した。
6. 土器写真は中央航業株式会社の撮影したものである。
7. 土器展開写真は小川忠博氏が撮影した。
8. 土器拓本は山下と清水いつ江が採拓したが、改めて神村が採拓したのも含めて、図版をつくりなおした。
9. 土器復元は清水いつ江が行った。
10. 人骨・動物骨については信州大学西沢寿見氏にお願いし、それについての原稿も執筆して下さった。
11. 本報告書の執筆は山下が遺跡、調査経過、住居址について書いていたが、それをうけて神村が全文（IV骨類について以外）を執筆した。
12. 本遺跡の遺物、実測図、写真は日義村教育委員会資料室に保管しており、遺物の一部はロビーに展示してある。
13. 13号住居址をモデルにして、山下の設計での復元住居（112図）を村内木曾駒高原にある森林公園に復元し、公園を訪れる人に自由参観してもらっている。

# 目 次

## は し が き

I. 遺 跡	1
II. 調 査 経 過	2
III. 遺 構 と 遺 物	3
IV. 骨 類 に つ い て	14
V. マツバリ遺跡から	17

# 挿 図 目 次

1図 マツバリ遺跡位置図	24	24図 7号住居址	47
2図 マツバリ遺跡地形図	25	25図 8号住居址	48
3図 A・B・C地区グリット図	26	26図 タ 土器 (1)	49
4図 A地区東西地層図 (1)	27	27図 タ タ (2)	50
5図 タ (2)	28	28図 タ 石器 (1)	51
6図 A・C地区遺構略位置図	29	29図 タ タ (2)	52
7図 1号住居址	30	30図 タ タ (3)	53
8図 タ 土器	31	31図 タ タ (4)	54
9図 タ 石器	32	32図 9号住居址	55
10図 2号住居址	33	33図 タ 土器	56
11図 タ 土器	34	34図 タ 石器	57
12図 3号住居址	35	35図 10号住居址	58
13図 タ 土器	36	36図 タ 土器 (1)	59
14図 4号住居址	37	37図 タ タ (2)	60
15図 タ 土器	38	38図 タ 石器	61
16図 タ 石器 (1)	39	39図 11号住居址	62
17図 タ タ (2)	40	40図 11・16・38号住居址土器	63
18図 5号住居址	41	41図 12号住居址	64
19図 タ 土器	42	42図 タ 土器	65
20図 タ 石器	43	43図 タ 石器	66
21図 6号住居址	44	44図 13号住居址	67
22図 タ 土器	45	45図 タ 土器	68
23図 タ 石器	46	46図 タ 石器	69

47図	14号住居址	70	80図	33号住居址	103
48図	・ 土器	71	81図	34号住居址	104
49図	・ 石器	72	82図	34・37号住居址土器	105
50図	15・19・30号住居址	73	83図	35号住居址	106
51図	15号住居址土器	74	84図	・ 石器	107
52図	16号住居址	75	85図	35・36号住居址石器	108
53図	17号住居址	76	86図	36号住居址	109
54図	・ 土器	77	87図	37号住居址	110
55図	・ 石器	78	88図	38号住居址	111
56図	18号住居址	79	89図	A地区土括群	112
57図	18・19号住居址土器	80	90図	土括群I・II・III	113
58図	18号住居址石器	81	91図	土偶・耳飾・玉	114
59図	20号住居址	82	92図	B地区集石墓括上部集石	115
60図	20・22号住居址土器	83	93図	B地区集石墓括下部墓括	116
61図	21号住居址	84	94図	B1・B2出土土器	117
62図	・ 土器	85	95図	B3出土土器	118
63図	21・25号住居址石器	86	96図	B1出土石器	119
64図	22号住居址	87	97図	B2出土石器	120
65図	23号住居址	88	98図	B3出土石器(1)	121
66図	23・24・25号住居址土器	89	99図	B3出土石器(2)	122
67図	24号住居址	90	100図	A地区出土土器(1)	123
68図	25・27号住居址	91	101図	・ (2)	124
69図	26・28号住居址	92	102図	・ (3)	125
70図	26・27号住居址土器	93	103図	・ 石器(1)	126
71図	26号住居址石器	94	104図	・ ・ (2)	127
72図	27号住居址石器	95	105図	B地区出土土器	128
73図	28・29・35・36号住居址土器	96	106図	・ 石器(1)	129
74図	29号住居址・焼土群	97	107図	・ ・ (2)	130
75図	30号住居址	98	108図	石柱石壇遺構	131
76図	31号住居址	99	109図	石壇遺構・炉縁石棒樹立	132
77図	32号住居址	100	110図	埋甕平面・断面図	133
78図	・ 土器	101	111図	集落の移り変り	134
79図	・ 石器	102	112図	復元住居設計図	135

## 写真図版目次

第一図版	遺跡遠景（段丘部を北より、西よりマツバリ遺跡を）	137
第二図版	遺跡全景（東上空より遺跡を、A地区全景）	138
第三図版	遺構(1) (1・2・3号住居址)	139
第四図版	〃 (2) (4・5号住居址、石柱石壇)	140
第五図版	〃 (3) (6・8号住居址)	141
第六図版	〃 (4) (9・10・11号住居址)	142
第七図版	〃 (5) (12・13号住居址、石柱石壇)	143
第八図版	〃 (6) (14・15・16号住居址)	144
第九図版	〃 (7) (17・18・19・20号住居址)	145
第十図版	〃 (8) (21・22・23号住居址)	146
第十一図版	〃 (9) (24・25・26号住居址)	147
第十二図版	〃 (10) (27・28・29号住居址)	148
第十三図版	〃 (11) (31・32号住居址)	149
第十四図版	〃 (12) (33・34・35号住居址)	150
第十五図版	〃 (13) (36・37・38号住居址)	151
第十六図版	〃 (14) (土括群Ⅱ、19号住居址附近土括群)	152
第十七図版	〃 (15) (B地区集石墓括上部集石)	153
第十八図版	〃 (16) (B地区集石墓括下部墓括)	154
第十九図版	〃 (17) (墓括19・20号、上部の石柱？、石棒・玉の出土)	155
第二十図版	遺物 (1) (3・32号住居址出土土器)	156
第二十一図版	〃 (2) (8・13号住居址出土土器)	157
第二十二図版	〃 (3) (6・5・9・18・21号住居址出土土器)	158
第二十三図版	〃 (4) (14・20号住居址出土土器)	159
第二十四図版	〃 (5) (11・13・25・35号住居址出土土器)	160
第二十五図版	〃 (6) (磨製石斧)	161
第二十六図版	〃 (7) (石ヒ、石錐、石核)	162
第二十七図版	〃 (8) (土偶、土製耳飾、ヒスイ玉)	163
第二十八図版	骨類 (1) (住居址出土)	164
第二十九図版	〃 (2) (住居内ピット出土)	165
第三十図版	〃 (3) (墓構出土)	166
第三十一図版	〃 (4) (墓構出土)	167

第三十二回版 スナップ（調査関係者） ..... 168

# I 遺跡

マツバリ遺跡は長野県木曾郡日義村原野地区在家にある（1・2図）。

遺跡は長野県埋蔵文化財包蔵地番号4442（日義村遺跡番号16）で登録されており、表探遺物として縄文時代後期壺之内式土器、加曾利B式土器、打石斧、石錘、独鉛石があり、木曾教育会郷土館（木曾福島町）に保管されている。

木曾郡は長野県西南部に位置し、木曾川最上流部の南北約100kmと細長く、平坦地の少ない山峠の土地で木曾谷と呼ばれる。日義村は木曾郡の北部、水源地木祖村の南に接し、郡の中心地木曾福島町の北にある。1154年、父（源義賢）を討たれた2才の駒王丸（義仲）は逃れて木曾の中原兼地を頼ってきた。1180年、平氏追討の旗挙げをするまで育った地が日義村である。

日義村は北東の木曾川支流三川の山間地、村の中心である木曾川段丘部、そして観光開発が進んでいる南部の木曾駒ヶ岳西麓に広がる木曾駒高原部とからなっている。県史遺跡地名表での遺跡数55は郡内では多い方であり、遺跡は段丘部と高原部に集中している（1図）。村内の主要遺跡としては、弥生時代前期遠賀川式土器を出土した小沢原遺跡、抜歯人骨、ヒスイ玉、縄文晩期土器の芝垣外遺跡、縄文時代前期・中期・平安時代の住居を検出した上の原遺跡、縄文中期と木曾郡最大の平安時代集落であるお玉の森遺跡、中世豪農屋敷跡を検出した元原遺跡、縄文時代早期押型文土器を多く出土した稻荷沢・二本木遺跡、弥生時代後期住居を検出した巴松遺跡があげられる。

マツバリ遺跡は段丘部の南部、東側山地から流れ木曾川に合流する松沢川の山麓北岸にある（2図）。北西に傾斜する標高850～870mの土地で、開田のために階段状に地均しされている。松沢川が東に奥深いために東西に谷が延びていて、木曾谷としては日照時間の長い、日当たりのよい遺跡である。

発掘調査は国道19号より山寄り部の水田地帯で、農道南側7枚の水田をA地区、山寄りの一段高い水田をB地区、農道北側の水田をC地区とした。A・B地区には地形傾斜方向を主軸にして、3m方眼のグリッドを東からア～ハ、北から1～41に、C地区は同方向に西からA～R、北から0～18に設定した（3図）。

水田造成されて階段状の地形となっているので、包含層がなかったり、遺構の破壊が多いと思ったが、包含層（黒土層）の残っている部分が多くかった。A地区では松沢川よりも相当な崩落による崩れがあり、住居址が部分的にしか残っていなかった。C地区では水田造成でローム面までけずりとられていた所もあった。層位でみると水田耕土の下に床土がしっかりとくられ、その下部に黒土層があって包含層であった。黒土層の下はローム層になっているが、部分的に黄砂層があつて、洪水堆積を示している（4・5図）。

## II 調査経過

### 1. 調査に至るまでの経過

日義村では昭和61年（1986）・62年にわたり、在家地区マツバリ地籍に小規模排水対策特別事業を実施し、水田の圃場整備を行うことになった。この地区はマツバリ遺跡として知られており、昭和61年9月9日、長野県教育委員会文化課の立ち合いで現地協議し、その指導助言により、国道南側を発掘調査（文化財保護法98条2項による）をし記録保存することとなった。

### 2. 発掘調査

発掘主体者 日義村教育委員会 教育長 今井元秀 事務局 水崎直美、川上清人

発掘調査団 調査担当 山下生六（長野県考古学会員、上松町教育委員長）

調査員 伊深智 田中博 新谷和孝 青木正洋

調査指導 神村透 太田喜幸

調査協力 青沼博之 寺内隆夫 市沢英利 唐木孝雄 野村一寿 百瀬忠幸

特別協力 航空写真→中部電力松本送電所

リモコン写真技術→岡谷市教育委員会

骨類分類→西沢寿見（信大第二解剖研究室）

土器写真・実測→中央航業株式会社

発掘作業 清水いつ江 上垣外民子 新屋常子 亀子けさ子 尾崎ゆき江

征矢野しお 倉本清一 野田義典 藤原たき子 磯尾なか

田中洋子 小野千里 神村みの 齋藤寿子 藤原やえ 越取今朝雄

大久保三雄 内海佳美 齋藤信男 巾米作 千村正賢 古畑静香

木村長吉 百嶋多 上垣外勝美 上垣外聰 丸山梅代 小池義一

小池八重子 丸山和美 一山保幸 一山みゆき 古瀬吉男

相馬飛雄 田中澄子 渡沢寿美 磯尾香織 磯尾めぐみ

木曾高校地歴部 福島中学校郷土班

発掘調査 第一次調査 昭和61年10月13日～11月28日（A・B地区）

第二次調査 昭和62年4月20日～5月7日（整備事業追加地区 C地区）

第三次調査 昭和62年7月9日～7月12日（整備事業工事中 B地区北部）

整理作業 昭和61年12月～62年3月、昭和62年7月～63年3月

報告書作成 山下と神村とが分担して取り組んできたが、山下の公務の仕事が忙しく図版段階でとまっていた。神村が引き継いで再作図して執筆した。

### III 遺構と遺物

遺構は住居址（縄文中期中葉、中期後葉、後期、弥生時代中期後半、平安時代）、土括（中期～後期）、集石墓括（後期）が検出されている。

遺物は縄文時代早期、中期、後期、晚期、弥生時代中期、平安時代、中世の土器、陶磁器、石器が多く出土している。

#### 1. 住居址

A 地区に集中し、C 地区にいくつもみられ、B 地区では平安時代住居址が一軒ある。

##### 1) 1号住居址（7～9図）

住居址は5.50×5.20mの円形の竪穴住居址で、古い住居址を拡大している。古い住居址は南部床面に周溝の一部を残し、方形の小形石圓炉が中央にある。五本主柱と思われる。新しい住居は炉を西にずらして大きい方形石圓炉で、奥の一つと入口側の石を抜いている。四本主柱で、入口側に埋甕代用と思われるピットがある。これを主柱穴とすれば五本主柱である。

遺物は土器・石器がある。土器（8図）は縄文時代中期中葉Ⅲ期（1～10）があって、古い住居址の時期を示す。新しい住居址のは後期Ⅰ期（11～23）で、一部Ⅱ期のものがある。石器（9図）は打石斧25、磨石斧5、異形石ヒ1、凹石1、磨石1などがある。

##### 2) 2号住居址（10・11図）

住居址は3.00×2.70mの小さい円形の竪穴住居址で、床中央に方形の石圓炉がある。炉内には底部を欠く甕を横倒しにおいていた。柱穴は壁際に小さいのが4こあり、五本主柱と思われるが北東のは土括によってない。北東と南にそれぞれ2この土括が切りこんでいる。南のそれは内部に石が入れられていた。

遺物は土器、石器がある。土器（11図）は中期後葉Ⅱ期のもので、1は炉に横倒しに置かれていたものである。一個体の土器をそのまま入れおり、廃絶時に埋置されたものと思われる。石器は打石斧17、剥片石器5などがある。

##### 3) 3号住居址（12・13図）

住居址は4.80×3.50mの南北に長い不整形円形で、西壁中央に周溝がみられる。それに接して大きな土括が外にあって、この住居には付設するようにも考えられる。六本主柱で、長軸上に棟持柱のと思われる柱穴が対になっている。炉はほぼ中央に深鉢胴部を埋めた埋甕炉（まいようろ）がある。

遺物は土器と石器がある。土器（13図）は、中期中葉Ⅰ期のもので、1は炉に埋められていたものである。5の有孔鉢付土器は筒状の口部に球形の胴部という器形である。石器は打石斧35、磨石斧1、凹石3、石錐、石錐1、石錐1、スクレーパー5などがある。

#### 4) 4号住居址 (14~17、91図)

住居址は23号住居址の上に重なり、5.10mの円形で、周溝が断続してめぐっている。四本主柱で、入口部の壁際に2この入口施設の柱穴がある。壁外にも柱穴がみられる。炉は床中央奥にあって、方形石圓炉の石は全部抜きとられている。入口部には埋甕が2こあって、内側のは上部をけずりとられている。このことは住居再築を示すが、炉、柱穴からは切り合いなどがみられない。

遺物は土器、石器がある。土器(15図)は中期後葉Ⅱ期で、11は埋甕である。1は内側の埋甕と思われる。9、10は同一個体で器厚も薄く丁寧につくられた小形壺で、肩部に鉤がつき、胴部には太沈線の文様がある。器面は黒色で磨研されており、内外両面に丹彩がみられる。石器(16、17図)は打石斧が105と多く、磨石斧3、石錘1、石錐4、石鎌6、スクレーパー27などある。土偶の右足が出ている(91図2)。沈線と列点文様がみられる。

#### 5) 5号住居址 (18~20、108図)

住居址は少し西へずらして古い住居の上に新しい住居がつくられている。古い住居址は直径4.50mの円形で周溝が一周している。四本主柱と思われるが北西の1本を明確にできない。炉は床中央部にあって、方形石圓炉の東側1こを残して他は抜きとられている。古い住居に貼り床そして、西へ1m余りずらして新しい住居をつくっている。大きさは南北4m、東西不明の円形である。四本主柱で、炉は中央より奥によってある方形石圓炉で、東側の1こを残して他ははずされている。炉奥壁際に石柱石壇(108図)がある。厚さ7cm、巾20~23cm、長さ70cmの細長い偏平石をおき、その両端に30cm大の細長い石をおいて「コ」の字形に石圓いをし、偏平石に接して、その中央内側に直径10cm、長さ30cmの円柱状の石を直立させている。基部は古い住居址の周溝部に15cm埋めている。偏平石上部は火熱にあって変色し、石柱の前面も変色がみられる。淨火の供儀が行われたことを示している。

遺物は土器と石器がある。土器(19図)は中期後葉Ⅰ期(1、2)とⅡ期があって、古い住居址がⅠ期、新しい住居址がⅡ期であることを示している。3は小形壺である。4は吊手土器で新しい住居址に伴うものと考えられる。石器(20図)は打石斧38、磨石斧2、凹石3、砥石2、剥片石器10などがある。日本鹿、猪の骨片も出土している。

#### 6) 6号住居址 (21~23図)

住居址は古い住居址と新しい住居址が重なる。古い住居から約1m西へずれて規模を小さくして新しい住居がつくられている。古い住居は、5.30mの円形で、主柱は壁にそっての5本と思われる。炉は地床炉のようである。新しい住居は4.90mの円形で周溝が一周する。四本主柱と思われるが、西側入口部と思われる所のピットを柱穴とすると五本主柱になる。炉は床中央部にあり、方形石圓炉と思われるが石は全部抜きとられている。

遺物は土器と石器がある。土器(22図)は古い住居のと思われる中期中葉Ⅲ期(1~9)と新しい住居の中期後葉Ⅰ期(10~14)のものがある。石器(23図)は打石斧27、磨石斧2、凹石3、

砥石3などがある。

#### 7) 7号住居址 (24図)

当初、6号住居址西側の土抜群にあてていたが、炉もなく、床面も確認できず整理段階でとり消した。12号住居址東側に石組もあり、埋甕も検出されたので、ここを7号住居址とした。石組は方形石圓炉と思われる。南側炉縁石一つを残している。炉の北約1mの所に鉢胴部を埋めた埋甕がある。埋甕は遺物整理段階で混在してしまい不明である。

#### 8) 8号住居址 (25~34、109図)

住居址は24号住居址を切っており、大きさは6.20×5.20mの東西にふくらむ円形で周溝が一周している。当跡では最大の住居で壁の掘りこみも一番深い。六本主柱で、入口部に対になる柱穴があり、その柱穴から周溝を結ぶ溝がある。入口部の壁近くに浅いピットがあり埋甕にかわるものと考えられる。炉は床奥よりにある方形石圓炉で、入口側と西側の炉縁石を残して他は取りはずされている。炉入口側南隅には頭部を欠く石棒の基部を埋めて樹立させている。石棒は床面近くでおれており、下部はその後も火熱変色していて、上部がおれた後も炉火にあっていたことがわかる。この石棒と対角線上の北隅には底部を欠く鉢を口縁が床面よりぐるぐるに埋めていた。奥の主柱穴に接して口径の大きい鉢の上半部と口縁部が、口縁を上にしておかれていた。その一つの内部に小形無文鉢が横におかれていた。入口部東側の柱穴に接して石柱状の細長い石が2個並ぶようにおかれていた。

遺物は土器、石器がある。土器(26、27図)は中期後業Ⅱ期が主体で、後業Ⅰ期(26図10~12)、後業Ⅲ期(27図9~11)も少量ある。26図1、3が炉奥の柱穴に接しておかれていた土器で、1は口径43cm、残高30cmと大きく、胴部の折損部を打調整して平らにしている。祭器としての再利用と思われる。8がこの内部に入っていた。9は炉隅に埋められていた土器で、下伊那から搬入されたものである。後業Ⅲ期の土器も下伊那からのものである。27図12、13は東海地方の呪煙式土器で、やはり搬入品である。26図5は頸部がしまる唐草文系土器の鉢で、しまる頸部内側に鉄状の突帯をもち煮沸時の蓋受けの役割をもつものとして珍しいものである。13は吊手部を欠く吊手土器で、27図2も吊手土器である。石器(28~31図)は打石斧が99と多い。磨石斧2、凹石3、磨石2、石皿1、石棒1、砥石2、石錐3、剥片石器15などがある。

#### 9) 9号住居址 (32~34、91図)

9号住居址は24、25号住居址と切り合っていた。24住が古く、25住は新しいと思われる。南北4.30mの隅丸方形に近い円形で、残存東半分に周溝がみられる。四本主柱で、炉は床奥にある方形石圓炉で、炉縁石は全部取りはずされている。床面に有孔鉄付土器の半分が直立してあり、その横に土偶頭部かおかれていた。

遺物は土器、石器がある。土器(33図)は中期後業Ⅱ期が主体で、1は有孔鉄付土器、2は繩文をつける鉢である。石器(34図)は打石斧10、凹石1、石錐5、剥片石器6などがある。土偶

(91図1)は頭部で、平らな顔面に突帯で鼻を表現し、目、口、鼻孔を沈刻で示している。頭部は丸くふくらんでいる。後頸部と耳部が剥落している。部分的に沈線文様がみられる。

#### 10) 10号住居址 (35~38図)

10号住居址は8・9・24・26・28号住居址に重なる。壁・周溝は不明で平地住居址と思われる。集石状に礫が多く、柱状の木炭が各所にみられた。集石や木炭の間からは骨片がみられ、床面には数多くの柱穴があり、焼土も何か所かあった。両側に石をおいた焼土部を炉としたが、確実に住居址の炉と断定はできない。

遺物は土器と石器がある。土器(36、37図)は縄文時代後期の土器で、堀之内式土器と加曾利B式土器がある。36図19は小型手捏土器である。石器(38図)は打石斧7、磨石斧2、凹石2、磨石2、石皿1、石錐1、石棒1、砥石1などがある。

#### 11) 11号住居址 (39、40図)

11号住居址は4.80×4.50mの方形の住居址で、北壁中央に石組カマドがある。柱穴は認められなかった。北隅から南、中央部に向かって柱状の木炭があり、火災廃絶が考えられる。住居内には廃絶後に投げこまれたと思われる多量の礫があった。16、38号住居址で同様であった。このことは上屋構造が石置き屋根とも考えられたが、余りにも多いことや他の類例を追ってみないとわからない。

遺物は土師器、灰釉陶器がある。40図1~3は土師器杯、4は灰釉陶器碗、5~11は土師器甕で、5~7はロクロ造りの小形甕、8~11は輪積み造りの長胴甕で、胴部の器面調整が、前者は横位であるのに、後者は縦位である。平安時代である。

#### 12) 12号住居址 (41~43図)

12号住居址は5.50×5.40mの三角形状の不整円形で周溝はない。柱穴は明確でないが五本主柱と考えられる。住居南半部には小さい柱穴列があり、住居に伴うものであれば間仕切りのものと考えられる。炉は床中央に方形石圓炉がある。

遺物は土器と石器がある。土器(42図)は縄文時代中期中葉Ⅲ期で、後葉Ⅰ期(16~20)も少量ある。7号住居址のものかもしれない。石器(43図)は打石斧8、磨石斧4、石錐1などがある。

#### 13) 13号住居址 (44~46、108図)

13号住居址は5.80×5.50mの隅丸方形で周溝が全周している。六本主柱で、柱穴の重なりあいから建直しがされている。炉は床奥よりにある方形石圓炉で、炉縁石は全て取り抜かれている。その一つと思われる石が西隅の柱穴に接しておかれている。炉奥床には偏平石を「コ」の字形に並べて石圓いをし、前面中央の細長い偏平石に接して石柱を樹立させている。いわゆる奥壁石柱石壇で5号住居址よりもきっちとしている。前面巾93cm、奥行90cm、奥巾125cmと少し開いている。前面は2個、左右は3個の石を並べ、石柱は基部が17cm、頂部5cmの頂部へと細くなっている。

く全長50cmの円柱状自然石で、基部を13cm床面下に埋めている。5号住居址のような火熱変色はみられない。入口部には埋甕があり、壁には柱穴がみられた。

遺物は土器・石器があり、土器(45図)は2が埋甕である。口縁と底部を欠き、欠損部が打調整されている。中期後葉Ⅱ～Ⅲ期である。石器(46図)は打石斧30、磨石斧1、石棒1、剥片石器10などがある。石棒は敲打製(6図)の欠損品で西柱穴に接して炉縁石と共にあった。

#### 14) 14号住居址(47～49図)

14号住居址は南北6.20mと大きな円形住居址であるが、道路にかかり東半分を調査できなかつた。北側に周溝がある。柱穴は四本主柱と思われる。炉は床奥よりにあって炉縁石は全て取り抜かれている。炉内より有頭石棒の頭部が出土した。炉縁に樹立していたとも考えられる。入口部には埋甕がある。

遺物は土器・石器がある。土器(48図)は中期後葉Ⅲ期で、沈線区画文土器(10・11)や結節縄文(12～14)があり、下伊那との結びつきが考えられる。1は埋甕で底部を欠いている。口径35cm、器高52cmと大きい深鉢である。石器(49図)は打石斧16、凹石4、石棒1、砥石1、石鎌2、剥片石器8などである。

#### 15) 15号住居址(50、51図)

15号住居址は5.20×5.00mの隅丸方形、東壁に周溝がある。19、29、30号住居址がこの住居に重なり、さらに土括もあって住居内は柱穴や土括で複雑である。六本主柱と思われる。炉は床奥よりにある方形石圓炉で、炉縁石は全て取り抜かれ、その一つが炉に接しておかれている。入口部には埋甕があるが土括によって半分切りとられている。

遺物は土器・石器がある。土器(51図)は中期後葉Ⅲ期で、1が埋甕である。17は台付土器の脚部である。石器は打石斧16、凹石1と少ない。

#### 16) 16号住居址(52、40図)

16号住居址は3.50×3.00mの南北に長い方形で、北東壁の中央より北に少しそよって石組カマドがある。四本主柱で、床中央には深さ20cmの浅い直径1mの穴がある。住居内には投げこみの石が多くあった。

遺物は土師器の長胴甕(40図12～14)がある。平安時代である。

#### 17) 17号住居址(53～55図)

17号住居址は5.70mの隅丸方形で、北側が明確でない。壁の状況からみると再建されているようにも思われる。住居内には大きくて深い土括が2ヶ掘りこまれている。六本主柱と思われる。炉は床奥よりの方形石圓炉で炉縁石は奥と入口側が取り抜かれている。

遺物は土器・石器がある。土器(54図)は中期後葉Ⅲ期で、4～8は東海地方の咲畠式土器である。13は無文の浅鉢、14、15は台付土器脚部である。石器(55図)は打石斧25、磨石斧1、凹石2、石棒1、石劍1、石鍬2、剥片石器5などがある。7は片面が凹石で、もう一面が石皿状

に凹んでいる。また獸骨の焼骨が出土している。日本鹿、猿で、29号住居址附近の大形土括にもあったので、住居内土括から出土したものと思われる。

#### 18) 18号住居址 (56~58図)

18号住居址は直径3.70mの円形で周溝が全周している。四本主柱で、周溝内にも小ピットが間をおいてあり、側壁のおさえ柱の存在が考えられる。炉は床奥よりにある方形石圓炉で、入口側と奥の炉縁石が残っていて、左右は取り抜かれている。入口部には石蓋のある埋壺があった。この埋壺内部から人骨片が検出されている。住居内には大きな土括がいくつか掘りこまれている。

遺物は土器、石器がある。土器 (57図) は中期後葉Ⅲ期で、1は埋壺で、縄文をつける関東の加曾利E式系土器である。10は台付土器脚部である。石器 (58図) は打石斧22、磨石斧2、凹石3、石鎌1、剥片石器5などがある。

#### 19) 19号住居址 (56、57図)

19号住居址は15号住居址東半にのっており、一部に貼り床があった。壁、柱穴は明確でないが石圓炉が2個検出された。一つは4個の石を使った方形石圓炉で、炉縁石は火熱でもろくなっていた。もう一つは15号住居址内にあって、西へ80cmはなれている。方形石圓炉で南北西側の石が残り、炉内には土器底部が埋められていた。この二つの炉が同時期か違うのかは明確にできなかった。

遺物は土器、石器がある。土器 (57図) は中期後葉Ⅲ~Ⅳ期で、26は炉内にあった土器である。石器は打石斧11、凹石3、剥片石器6などがある。

#### 20) 20号住居址 (59、60図)

20号住居址は水田造成時に北半分がけずりとられている。4.70mの円形で周溝が断続している。炉は2個 (A・B) あって、建直しをしている。対応するように埋壺が2個あって90度主軸をずらし再建している。炉はどちらも方形石圓炉で炉縁石は全て抜き取られている。炉Bに対する埋壺は上半をけずられていて、整理の段階で混在してしまった。

遺物は土器、石器がある。土器 (60図) は中期後葉Ⅱ期で、1が炉Aに対する埋壺である。口端を欠き、欠損部を打調整している。石器は打石斧1、剥片石器2と少ない。

#### 21) 21号住居址 (61~63図)

21号住居址は水田造成時に西半分がけずりとられている。5.00mの円形で周溝が部分的にある。四本主柱と思われる。炉は床奥よりある方形石圓炉で奥炉縁石を残し、他は取り抜かれている。入口部には石蓋を持つ埋壺があり、近くに対になる柱穴がある。南床面に長方形の掘りこみがあり、土括と思われる。

遺物は土器、石器がある。土器 (62図) は中期後葉Ⅱ~Ⅲ期で、I期 (13) も混在している。1は埋壺である。12は台付土器脚部である。石器 (63図) は打石斧がある。

## 22) 22号住居址 (64、60図)

22号住居址は $5.10 \times 4.60$ mの不整円形で、土塗や柱穴が複雑にあって主柱が明確でないが四本主柱と思われる。床中央に焼土があり地床炉と思われる。

遺物は土器、石器がある。土器(60図)は中期中葉Ⅲ期である。石器は打石斧10、凹石2などがある。

## 23) 23号住居址 (65、66図)

23号住居址は東側で4号住居址と重なり、西側は擾乱されている。 $5.20$ mの円形で東半に周溝がある。炉は床中央に長方形の石囲炉で炉縁石が全部残っている。六本主柱である。南壁近くに柱穴より大きい穴がある。北主柱穴に接して石柱状の細長い石がおかれている。

遺物は土器、石器がある。土器(66図)は中期後葉Ⅰ期である。鉢付土器や台付土器片もある。石器は打石斧15、凹石1、石錐1、石錐2、剥片石器4などがある。

## 24) 24号住居址 (67、66図)

24号住居址は8、9号住居址にきられて、西半分が残っている。 $5.00$ mの円形で周溝がある。四本主柱と思われる。炉は床奥よりにある方形石囲炉で炉縁石は全部抜き取られている。

遺物は土器(66図)は中期後葉Ⅱ期である。13、14は結節縄文のつく土器で後葉Ⅲ期の下伊那の土器である。台付土器脚部片もある。

## 25) 25号住居址 (68、66、63図)

25号住居址は9、27号住居址と重なる。 $4.10 \times 3.70$ mの円形で周溝が全周している。四本主柱である。炉は床奥よりにある方形石囲炉で炉縁石は全部抜き取られている。入口部に埋甕があり、土器にかかるように偏平石と棒状の石がおかれている。

遺物は土器、石器がある。土器(66図)は中期後葉Ⅲ期である。15が埋甕である。24は小形壺で内外面に丹彩されている。台付土器もある。石器(63図)は打石斧6、凹石1、敲打器1、剥片石器2がある。

## 26) 26号住居址 (69~71図)

26号住居址は台地縁で調査不充分である。 $3.00$ mの不整円形で、柱穴はあるが不規則である。炉は明確でない。

遺物は土器、石器がある。土器(70図)は中期中葉Ⅲ期である。石器(71図)は打石斧14、凹石2、剥片石器3がある。

## 27) 27号住居址 (68、70、72図)

27号住居址は台地縁にあって、大半が崩れて住居の一部が残っているのみである。

遺物は土器、石器がある。土器(70図)は中期後葉Ⅱ期である。石器(72図)は打石斧10、石皿1、石ヒ1、剥片石器4がある。

28) 28号住居址 (69、73図)

28号住居址は台地縁にあってほとんどが崩れてわずかに残っている。炉は方形石圓炉の北半分が残っていた。

遺物は土器 (73図) があり、中期後葉Ⅲ期である。

29) 29号住居址 (74、73図)

29号住居址は15号住居址に重なり、東側は土手のため調査できなかった。柱穴群や大形土括がいくつもあり、土括横や土括内部に焼土がみられた。土括内や焼土から多くの焼骨がみられ、調理場か祭祀場かと思われる。

遺物は土器、石器がある。土器 (73図) はいずれも小破片で、中期後葉Ⅲ期である。石器は打石斧4、砥石2がある。

30) 30号住居址 (75図)

30号住居址は13、15号住居址に重なり、石圓炉が検出されて住居址としたが、大きさや柱穴は明確ではない。

31) 31号住居址 (76図)

31号住居址は2.80×2.40mの長円形で掘りこみが70cmと深い、柱穴や炉がなく、住居址というより大形土括 (小豎穴) と思われる。

遺物は縄文時代中期から後期の土器片があり、時期は確定できない。

32) 32号住居址 (77~79図)

32号住居址は直径6.00mの円形で周溝はない。北半に後世の溝がある。主柱は7~8本と思われる。炉は床中央部に方形石圓炉で炉縁石は残っている。

遺物は土器、石器がある。土器 (78図) は器形のわかる土器があり、1、3は完形品である。中期中葉Ⅳ期である。5、6は平出第Ⅲ類A、9~12は下伊那型梯形文土器である。石器 (79図) は打石斧37と多い。凹石4、石ヒ1、石鐵7、剥片石器10などがある。

33) 33号住居址 (80図)

33号住居址は石圓炉が検出されて住居址とした。柱穴はあるが住居の大きさはわからない。

縄文時代と思われるが時期は明確ではない。

34) 34号住居址 (81、82図)

34号住居址は床を円形に掘りこんだ炉が検出されて確認できた。炉の中央に円形のピットがあつて埋甕炉の埋甕が取りはずされたものと思われる。炉から約2mはなれて柱穴がいくつか確認されているが、壁は水田造成時にけずりとられて検出できなかった。

遺物は土器 (82図) のみで、弥生時代中期後半の壺 (1~11) と甕 (12~15) である。

35) 35号住居址 (83~85、73、109図)

35号住居址は4.90×4.60mの円形で周溝が全周している。柱穴は西側の2個しかつかめていな

い。炉は床奥よりの方形石囲炉で炉縁石は全部取り抜かれている。炉奥には直径50cm、深さ32cmのビットがあつて、ビットと炉の間に2こずつ間をおいてある。(109図)。炉奥石壇と思われる。

遺物は土器と石器がある。土器(73図)は中期後葉Ⅲ期である。石器(84、85図)打石斧15、磨石斧2、石皿1、石劍1、石鎌3と人面のような刻みのある石(85図)などがある。

### 36) 36号住居址(86、85、73図)

36号住居址は南壁3.20mの南半だけに壁の残る方形で、炉、柱穴は検出できなかった。水田造成時にけずられたものである。

遺物は土器と石器がある。土器(73図)は縄文時代後期前半の掘之内式土器である。石器(85図)は打石斧4、石錐3、石錐1、石鎌11、剥片石器24などがある。

### 37) 37号住居址(87、82図)

37号住居址は5.90mの円形と思われるが北半の壁が確認できていない。六本主柱と思われる。炉は床中央に円形に掘りこみ、その中央に壺胴部を埋めた埋壺炉である。

遺物は土器(82図)のみで、壺(19~26)と甕(16~18、27~49)がある。18の甕が炉に埋められていた。49は底部の布庄痕である。弥生時代中期後半である。

### 38) 38号住居址(88図)

38号住居址はA・C地区より一段高い山よりのB地区で検出された。3.30×3.10mの方形で主柱穴は壁外にそって検出された。北壁の東よりに石組カマドがあり、カマドの前の東壁際に長方形の掘りこみがみられる。この住居は廃絶時に多量の礫が投げこまれていた。

遺物は灰釉陶器碗と皿(40図)がでている。平安時代である。

### 39) A地区土括群(89、90図)

土置場の関係もあって全面を完全に調査できなかった。大小の土括・ビット群が集落内側(山より)に集中し、8号住居址周辺と29号住居址附近にある(89図)。それぞれの土括の時期については遺物のとりあげが充分でないため確認できないが、縄文時代中期後半から後期のものである。

8号住居址周辺(90図)は南側の列状に並ぶ大きい土括群をI群とした。浅いのは13cm、深いのは1mというものがあり、方形柱穴群とするには北側が明確でない。この一つアとしたものには礫が内部に入っていて、その一つが石皿片であった。東側の大小の一群をII群とした。このうちイとしたビットは73cmと深く、その上部に蓋をするかのように礫がおかれていた。北側の土括群をIII群とした。列状に並ぶところもみられる。

29号住居址附近(74図)には1m近い深さの円形のもの(15・17住居内)と、不整形のものがあり、後者には焼土がみられ、土括内部からは動物の焼骨片が多くあった。猪、日本鹿、月の輪熊であるという。

これらの土括やビットは、貯蔵穴、墓括、祭祀括、そして住居址の柱穴かと考えられる。

#### 40) B地区集石墓塚 (92~107図)

A地区の南山よりの一段と高い (6~7m) 水田をB地区とした。その縁辺を試掘した所、川原石の集石群がみつかった。この石は松沢川にはない角のない砂岩で、西方500mの所に流れる木曾川の川原石である。集石の状況からB1~B3と三群にわけた。

##### B1群

南方の一群で、石積みの高さ約70cm、南北7m、東西3mの大きさで大小の川原石を積みあげていた。石棒片が上部に一個あり、石と石の間の黒土中から土器片や骨片が出土した。下部は浅い楕円形状の土塚があった。底部斜面にあった平板石に接するようにヒスイ製玉があった。

遺物は土器、石器がある。土器 (94図) は縄文時代後期中頃の加曾利B式土器と晩期初頭の土器がある。石器 (96図) は打石斧6、磨石斧1、凹石1、石錐1、石棒1、剥片石器6、ヒスイ玉1などがある。ヒスイ玉は2.2×1.4cm、厚さ8mmの大きさで、縁辺に刻みがある。

##### B2群

中央部山よりの一群で、5×3mの間に川原石があり、東端には南北に長く石を並べた配石墓 (11) があり、土製滑車形耳飾が2点 (91図) 出土した。東西に平行する土塚10、12があり、人骨片が多く出土した。

遺物は土器、石器がある。土器 (94図) は後期中頃から晩期初頭のものである。石器 (97図) は打石斧4、磨石斧1、石錐3、石棒1、砥石1、石錐1、剥片石器6などがあり、墓塚11から滑車形耳飾2点がある。91図3は縁辺に4つの環状突起をおき、そこからたがいを結ぶように細い刻目をつけた帯でつながり、間にスカシがある。全面に丹彩がみられ見事である。4は中央に環状突起をおき、そこから三方向に上部で聞く刻みが入り、その間を縁辺から刻みが入り、上部は三角形状のスカシとなっている。表面に丹彩されていたと思われるが磨滅してなくなり、中央の環状突起に一部残っている。

##### B3群

北方の一群で、8×6mの石積みで、石の量は最も多く、大きな石も使われていた。中央に長さ1.4mの角柱状の石柱が、基部を埋めて斜めに倒れていた。この下部から墓塚19が検出されている。墓標とも考えられる。この石積み下部から最もきっちりとした墓塚19、20があった。19は2.30×1.10mの長方形、深さ15cmの大きさで、両端に深さ14~18cmの長方形の掘りこみがあり、木棺墓であったと思われる。20は1.70×1.00mの長方形、深さ14cmの大きさで、四隅を石で囲んでいる。その縁石にかかるように有頭石棒がおかれていた。13、21は上部に集石があり、22は石囲い墓である。23は偏平石を列状に並べていた。

遺物は土器と石器がある。土器 (95図) は後期中頃から晩期初頭のもので、後者が多い。34は注口土器の蓋と思われる。51は土偶胴部かと思われるがはっきりしない。38は貝殻压痕がつき、宮池式土器である。石器 (98、99図) は打石斧19、磨石斧5、凹石3、石棒1、石錐2、剥片石

器16などがある。98図1は玄武岩剥片の横刃形石器である。

#### 41) A地区出土遺物 (100~104図)

##### 早期土器 (100図1~10)

押型文土器と撚糸文土器がある。1~7は市松文で、1と2は口縁部で2は刻目がある。7は尖底土器の砲弾状の底部である。8は格子目文、9は梢円文で口縁にも施文される。10は網目状撚糸文である。9の梢円文を除けば文様や胎土、器厚から立野式土器である。

##### 中期土器 (11~14)

中期中葉から後葉にかけての土器が多い。11は一片のみであったが中期初頭の土器である。12、13は中期後葉の結節網文のつく土器である。14は小形壺で、銅付土器の残段であり、丹彩がみられる。

##### 後期土器 (15~26)

いずれも後期堀之内式土器で、15、16は小形注口土器である。晩期前半の土器はない。

##### 晩期土器 (27・28)

27は6号住居址附近から単独に出土した小形完形壺で、渦巻文が特徴的である。28も小形壺で彫刻のように刻みこまれた工字文がある。晩期終末の大洞A式土器である。

##### 弥生中期条痕文土器 (29~35)

いずれも小破片である。29が壺で他は甕である。濃尾平野の中期最初の土器である朝日式土器に併行する条痕文土器（岩滑式土器）である。

##### 弥生中期後半土器 (101・102図)

17号住居址北側に集中して出土し、ここに住居址があったと思われる。高倉式土器と栗林式土器がある。高倉式土器は濃尾平野中期後半の土器で、櫛描文を残しながらも新しい文様である凹線文を用いている。1~24が壺、25~28が甕で、全て濃尾平野からの搬入品である。栗林式土器は善光寺平から松本平に分布する土器で、縄文、沈線文、櫛描文をつける壺（29~32）と、櫛文の籠状文を頸部つけ、羽状文や波状文を副部につける甕（102図1~23）、口縁が受口になる台付甕（24~35）がある。台付甕には波状文と沈線のコの字重ね文がある。36は一片のみであるが斜走短線文がついている。丹彩土器も多く、壺（39）、浅鉢（38、40）、高杯（41）がある。出土状況からみて高倉式土器と栗林式土器は共伴するものである。

##### 中世陶磁器 (100図36)

山茶碗、常滑甕、天目甕、青磁甕、白磁甕（36）などがある。

##### 石器 (J03・104図)

縄文時代の石器は非常に多い。その一部を図示した。弥生時代の石器としては太形始刃石斧（102図42・43）がある。

#### 42) B 地区出土遺物 (105~107図)

圃場整備工事中、B 地区墓塚の北側をあわただしく調査し、平安時代住居址38号を検出した。その北側に縄文時代晩期土器、石器が集中する所があり、住居址と思われたが炉、柱穴を確認できなかった。

遺物は土器、石器がある。土器 (105図) は晩期中頃のもので、集石墓塚もこの時期と思われる。1は小形注口土器、14は丹彩がある。43は三角形のスカシ孔のある台付土器台部である。石器 (106・107図) は打石斧28、横刃形石器3、磨製石斧5、石剣3、石錘2、尖頭器2、石鎌8、石錐2、凹石11、剥片石器8などがある。

## IV 骨類について

各住居址、墓塚から出土した骨類は人骨と動物骨とに分けられる。すべて火熱を被った焼骨で、いちじるしく崩壊がすみ、細片化されている。色調は一部に黒色の炭化痕をとどめるが、高温による完全燃焼の結果、骨の内壁まで一様に白色を呈する。骨質は焼骨特有の硬質の性状で、骨表面の細かな亀裂からの破碎とともに、湾曲・変形を生じている。この傾向は人骨・動物骨ともにほとんど相違はない。

これらの焼骨片は、すべての部位で原形は全く失われ、形状からみた同定は多くの細片で不可能な状態である。したがって埋葬様式をはじめ、人骨の形質からみた性別・年齢などとともに、動物の種類、頭数に現われる当時の狩猟相、捕獲解体の過程など多くの内容は不明である。

以下、各遺構の残存骨の概要について記載する。

- B-1 墓塚：人骨 — 残存する骨片は僅少である。頭骨の板状骨片、肋骨片、上腕骨（長さ6cm）とみられる骨体部分、他に長骨の細片少量である。
- B-2 墓塚：人骨 — 頭骨の細片が多い。前頭骨の前頭後、頭頂骨の鱗縁部、後頭骨外後頭隆起の部分などの小片であり、鋸歯状縫合の離開する部位もあり、骨壁は比較的薄い感を与える。肋骨片、上腕骨の骨体部分とみられるもの数片、指骨の一部、大腿骨骨体の骨稜を残す部分などが認められる。他はすべて極少の骨片であるが、上・下肢の骨体の破片が多いものと思われる。
- 動物骨 — シカの距骨（左）、小型で幼獣のものであろう。イヌの脛骨（左）、骨体中央部分、トリ（キリ、ヤマドリに類似）の大転骨などが検出されるが、骨片の中に他種の動物骨の混入の可能性もある。
- B-3 墓塚：人骨 — 各墓塚中もっとも多量に残存。頭部の各部断片が多い。頭頂骨・側頭骨などの脳室部分の板状骨は、弯曲・変形するが5×4cm程度の大きさのものも残る。側頭鱗・鋸歯状縫合などの離開する部位もある。頬骨（右）の眼窩縁を含む部分、上顎骨臼歯槽の一部、下顎骨骨体中央部下縁と臼歯槽の一部、脊椎骨の椎体・椎弓、肋骨片、指骨は手・足部が認め

られ、手根骨も残る。桡骨、大腿骨骨体の一部、膝蓋骨の破片なども残存する。長骨片には長さ5cm程のものもあるが、量的に多い細もことごとく微細なもので、部位は不明である。しかし、ほぼ全身に亘る骨の残存と量的な傾向から、1個体分のものと見なせよう。

動物骨 — シカの指の末節骨、トリ（キジ、ヤマドリに類似）上腕骨が認められる。B-2墓拡同様、細片中に動物骨の混入も充分に推察される。

・10号址・10号炉：人骨 — やや多量に残存する。頭骨では頭頂骨・側頭骨の細片が比較的多く、5×5cm程度の大きさの断片も残されている。眼窩縁の一部、下顎骨骨体中央部分で頸隆起がやや膨隆、右第1切歯、左第1・2切歯の歯槽が残存、オトガイ歯弱度、脊椎骨の一部、肋骨片などが認められるが、他はすべて不規則に破碎された細片である。

動物骨 — 10号炉址中にイノシシの足根骨とおぼしきもの、サルの頭頂骨の一部が各1点混在する。他の墓拡と同様に入骨と共に伴する傾向がうかがえる。

・5号住居址：動物骨 — わずかな骨片が残存する。シカの桡骨（右）の遠位端、イノシシの上顎骨（右）歯槽の一部などである。

・17号住居址：動物骨 — 大型獣の骨片がやや多量であるが、中・小型獣の細小な部分も多い。シカの中手骨の一部、サルの指骨（中節骨？）が認められる。

・29号住居址ピット内：動物骨 — 住居址床面下の円形状ピット内から一括出土した骨で、かなり多量である。しかし破碎の程度はいちじるしく、形状を残すものは少ない。ほとんどは動物骨とみなされるもので、種類の判明したものは、ニホンシカ、イノシシ、ツキノワグマ、イヌなどであるが、他種の共存も充分可能性がある。

シカ — 頭骨（後頭骨、底部などの一部、下顎骨歯槽の一部、関節突起など）、恥骨の一部、腕骨（骨頭部分）、尺骨（近位端）、脛骨（右2、左1、遠位端）、距骨（頭頂部、前端部）、中手骨・中足骨の一部、手・足根骨など。

脛骨は右2例、左1例（いずれも遠位端）であるが、同側の大きさに差異があり、2頭の存在が推定される。また、比較的の残存し易いツノの断片が皆無であることも特徴的である。

イノシシ — 頭骨（前頭骨、後頭骨、上顎骨切歯部、同左犬歯・第1小白歯部、下顎骨関節突起・左右）、肩甲骨、上腕骨、尺骨、桡骨それぞれの一部、寛骨（臼部、右4例、左1例）、脛骨（右、近・遠位端）、中手・中足骨の一部、手根骨などである。

寛骨臼部の右側4例は、その最少頭数を示すものとみられる。

ツキノワグマ — 下顎骨（第3大臼歯の骨体歯槽部分）、寛骨（臼部右・左）。

イヌ — 上顎骨（切歯部、第1・2切歯、犬歯の歯槽と骨体部分）。

以上の各部位から推測される本ピット内の動物骨は、ニホンシカ2頭、イノシシ4頭、ツキノワグマ、イヌ各1頭となるが、その他、中・小型動物に帰属すると思われる細小な骨片も多い。また、骨端成長線から外れた幼獣の骨も多く見受けられる。

まとめ：各墓括から出土した人骨は断片的で、わずかに骨壁の厚さの性状などから、すべて成人骨と推測される程度で、形質的な特徴は一切不明である。B-1・2・3墓括では人骨が主体となるが、わずかながら動物骨の混入も明らかである。人骨は各墓括により出土量にかなりの多寡があり、最も多量なB-3墓括においても通常の1個体分の焼骨片としては決して多くない。殊に長大な部分の骨はやや大型片として残るものであるが、その傾向も明らかでない。同時にB-2墓括でシカ・イヌ・トリ、B-3墓括でシカ・トリなどの骨が検出され、部位不明ながら動物骨の混入も予想されることからも、茶毬に付された遺骸の再埋葬を目途とする移動の結果とみられないであろうか。同じく10号住居址内における動物骨とともに、人骨・頭頂各部・脊椎骨・肋骨片の共存する現象も、単なる埋葬、食料残滓の放棄と異なる何らかの意義を感じられるところである。

なお、29号住居址ピット内の動物骨の内容から、シカに対してイノシシの頭数の多いのも、狩猟対象となった棲息動物の傾向を示すものとすれば興味深いものがある。

動物骨をみる限り、解体による破碎痕、骨角器の作製痕、製品等はまったく不明である。

本稿の動物骨の鑑定は、愛知学院大学歯学部 宮尾徹雄教授の御教示を得た。記して感謝申し上げる。

信州大学医学部第二解剖学教室

西 沢 寿 晃

## V マツバリ遺跡から

報告書をまとめるにあたって、図面・写真・遺物を照合しながら、遺跡の姿を追ってみたが、調査にかかわっていないために体感として自分に来るものがない。報告書というものは調査担当者が書くのが当然と思う。もう一つ思ったのは日々の記録と個々の遺構についての記録が大事だなということでした。遺跡の情報は調査時に一番明確に読みとられるものである。

### 1. 出土土器から

#### (1) 押型文土器

当遺跡の最初の足跡は縄文時代早期の人々でした。住居址、集石炉は検出できなかったが、早期でも古い押型文土器、立野式土器が出土している。村内では稻荷沢遺跡、二本木遺跡で相当量の出土があり注目されている。お玉の森遺跡や木曾福島町出尻遺跡でもこの時期の土器が出土していく、木曾駒高原を中心に生活域があったことを思わせる。

#### (2) 中期中葉土器

勝坂式土器と呼ばれる一群の土器で、県内では八ヶ岳西南麓から松本平にその中心があり、中部高地を代表する土器文化で「井戸尻文化」とも呼ばれる。村内では上の原遺跡で住居址が調査されていた。マツバリ遺跡の調査でより多くの資料を得ることができて、木曾谷北部は鳥居峠によって松本平と強く結ばれる井戸尻文化圏に入っていたことを示している。上松町以南ではこの時期の土器がほとんどないのが注意される。

(3) 中期後葉土器 I期の土器は量的には少ない。松本平と同じ土器であり、この伝統の中でII期の唐草文系土器が発達する。唐草文系土器は土器胴部に唐草文（渦巻文）をつけるのを特徴として、松本平・諏訪湖盆地・上伊那がその中心であり、マツバリ遺跡の調査で木曾もその中に入っていたことを示している。木曾から飛騨・美濃へと広がっているので、今後、マツバリ遺跡の土器を基に木曾谷でのこの時期の特徴と変化をとらえることが課題となる。

この時期には他地域との交流も盛んで、土器にも、関東地方を中心をもつ縄文を主文様とする加曾利E式系土器、下伊那地方で発達した口縁突堤区画頸部横連繋文土器、沈線区画文土器、結節縄文土器、浅尾平野の口縁部湾曲渦巻文胴部連弧文の咲烟式系土器などがみられる。

個々の土器では8号住居址出土の大形壺、6号住居址出土の大型浅鉢、5号住居址出土の吊手土器が器形のわかる土器の中で注目される。破片の中では丹彩された小形壺（鉤付？）が注目される。

#### (4) 後期～晩期初頭の土器

後期になると県下は関東と全く同じ特徴を持つ土器となる。マツバリ遺跡でも同様であり、同

時期の大桑村大明神原遺跡、山口村川原田遺跡も同様である。堀之内式土器、加曾利B式土器がそれで、力不足で特徴的な文様以外の土器が、どれと伴出するかはつかめていない。

晩期になると東北地方に中心をおく亀ヶ岡系土器（大洞式土器）の進出がみられる。同時に西からの土器もあって、東西文化の交流が木曾川を通じてあったことを示す。

#### （5）晩期終末の土器

浮線渦巻文土器は小形完形土器で、特徴的な器形と胴部の渦巻文が特徴である。濃尾平野の弥生時代前期の遺跡や貝塚から発見され、弥生人と縄文人の交流を示す土器として学界で注目されていた。近年の調査で中部高地の松本平・諏訪湖盆地・伊那盆地でいくつもの出土が知られ、この地方でつくられた土器ということがわかった。その土器がマツバリ遺跡で発見されたのは松本平と濃尾平野を結ぶ通路を示している。弥生時代前期遠賀川式土器が村内小沢原遺跡や松本市針塚遺跡で出土しているのもその交換（交流）現象としてとらえられる。

#### （6）弥生時代中期条痕文土器

濃尾平野での低湿地帯に弥生時代前期の弥生人の集落が形成された頃、周囲の三河、美濃には縄文人の集落があり、条痕文を主文様とする土器を持っていた。対峙するなかで最初は緊張した関係であったが、やがて交流するようになり農耕技術を受け入れた。この人たちが木曾川をあがつてきている。1波（前期）、2波（中期初頭）とあって、マツバリ遺跡の条痕文土器は2波のもので、岩滑式（いわなめ）土器と呼ばれているものである。鳥居峠を越えて塩尻市平出遺跡、高出遺跡で発見されており、遠く信州新町や長野市でも発見されている。

#### （7）弥生時代中期後半土器

弥生時代中期土器の発見は木曾谷では初めてである。北信から中信にかけては太沈線や縄文を持つ壺と鶴描き羽状文の壺が特徴的な栗林式土器が分布している。マツバリ遺跡の土器は栗林式土器そのものであり、しかも古い様相をもっている。鳥居峠を越えての進出を示す。

もう一つ注目されるのは高倉式土器の発見である。中期前半の朝日式土器、貝田町式土器は下伊那地方で出土していて、濃尾平野との交流が知られていたが、中期後半の土器は知られていないかった。高倉式土器の発見は中部高地では最初の発見であり、今後、松本平・善光寺平での発見が期待される。壺・壺がセットで出土していることは、土器そのものだけでなく、土器を持った人たちの移動を思わせる。

## 2. 出土石器から

石器は打製石斧が特に多い。木曾川の転石としてある粘板岩を運んできて遺跡で製作しているため、未製品や調片も多い。時期的には中期後業Ⅱ期に多く、中葉から後葉への生活変化を示している。4号住居址105点、8号住居址99点は特に多く、下伊那郡増野新切遺跡、上伊那郡尾越遺跡でもみられたのと同様である。磨製石斧は36点出土し、その多くが中期のものである。殆ど

が定角式磨石斧で乳棒状磨石斧は少ないので注目される。この点下伊那地方と違っている。大形のもの、小形のものもあり、中には祭祀具と思われるような緑色の奇麗なものもある。数点と少ないが中形で敲打製刃部磨製の乳棒状磨石斧も晩期のものとして注意される。また、2点であるが弥生時代の太形蛤刃磨石斧がある。以前の表探でも1点採集されている。凹石も多い。磨石とを兼用したものが多い。石錐は13点と多くはないが、木曾谷の遺跡としては多い方であり、打ち欠き石錐と切目石錐とがある。石棒は8点あっていずれも折れている。頭部は有頭で大小ある。B-3の墓出土のものは有頭部が斜状になっていて非常にリアルである。8号住居址では炉縁角に樹立されており、14号住居址では炉内におちこんでおり、炉との関係が考えられる。石刀・石劍は後・晩期のものである。すべて破損品である。1点円筒状に丁寧に磨かれた身部がある。砥石が10余点あって、中に砂岩の大きなのがあり、何を磨いたのかと思う。石錐は少ない。剥片をみると黒曜石が2475点、チャートが485点、下呂石38点となって黒曜石が非常に多いのが特徴的である。数は少ないが玄武岩製の石器もあって、王滝川上流、御岳山麓からのものである。

### 3 住居址・墓出土から

#### (1) 住居址

中期中葉の住居址は26号住を除いて5~6mと大きい。円形が多いが不整円形もある。柱穴は不規則で、炉は床中央部にある。埋甕炉（3住）から小形の浅い方形石圓炉（1、12、32住）と変化している。中期後葉になると3~6mと大きさに変化があり、形は円形が多いが隅丸方形もある。後葉Ⅰ期の浅い長方形石圓炉（23住）から掘りこみの深い方形石圓炉となり、床中央より奥につくられるのがⅡ期の特徴である。四囲の炉縁石が残るものは一つもない。一部残すものもあるが多くは全部取り抜かれている。住居廃絶時の行為を示している。Ⅳ期になると一まわり小さい方形石圓炉（19住）となる。主柱は四本と六本がある。

弥生時代中期住居址は二軒検出するが、37号住で円形とわかる。炉は床中央に円形の掘りこみをつくり、その中央に甕を埋める埋甕炉で、この時期に多いものである。

平安時代住居址はいずれも方形で石組みカマドをもっている。廃絶時に住居内に多量の礫を投げこんでいるのが注意される。

#### (2) 住居内石壇と炉縁石棒樹立

住居内石壇は3軒でみられ、5、13号住は石柱石壇である。炉奥床に、奥壁に開く「コ」の字形に石圓いをして、正面中央に石柱状の自然石の基部を埋めて樹立していた。石柱石壇は塩尻と諏訪地方に知られるが、形が違っており「木曾型」といえる。5号住のは火熱変色があり、淨火祭祀のあったことを示している。35号住は炉と奥壁の間にピットを掘りこみ、炉側にピットを囲むように石をおいている。ピットに何が立てられていたかわからないが、石柱の掘りこみの大きさや深さに較べると大きく深い。木柱が考えられる。類例は下伊那郡増野新切遺跡、伴野原遺跡

にあって「下伊那型」と呼んだものと同じである。木曾の独自性と、土器に下伊那との交流がみられるので、下伊那の影響が考えられる。

炉縁石棒樹立は8号住居址にみられた。中期後業Ⅱ期の住居址14軒の中では最も大きく、掘りこみも深い住居址である。土器、石器の出土も多く、奥よりには胴下半を欠く大形壺が床に正位におかれており、祭祀行為が考えられる。炉は炉縁石の2個が取り抜かれていた。入口側の右(入口からみて)隅に石棒を樹立させていた。下伊那、諏訪、松本、上小、佐久で知られているが、集落で一軒というようなあり方で特別な家といえる。石柱石壇とは違って炉に直接かかわる宗教的行為で、女性神といわれる炉火の神に対して、男性のシンボル表現である石棒を供儀したものである。もう一つ注目されるのは石棒と対角線の左隅に土器を埋めていたことで、このような例は知られていない。石棒に対して女性を象徴するものと考えられる。下伊那郡瑞穂寺前遺跡では床に土器を埋め、その中に石棒を樹立させていた住居址があり、直接つながるものではないが女性と男性ということを考えさせる。炉奥右隅に小形の副炉がつくものが下伊那に多くみられるが、その副炉の意味との比較も考えなければいけないと思う。

### (3) 埋壺

埋壺は中期後業Ⅱ期に6軒、Ⅲ期に2軒で検出されている。Ⅱ期では14軒中の6軒、Ⅲ期は6軒中2軒で、Ⅱ期に多い。しかし4割強と住居数に占める割合は多いとはいえない。いずれも正位(口縁を上)(110図)に埋め、底部を欠くか、打ち抜いている。18・21号住では石蓋がみられた。土器はいずれも深鉢で、18号住以外は唐草文系土器である。18号住は縄文をつける加曾利E式系土器である。注目されるのはこの埋壺の中から骨片が検出され、それが人骨と鑑定されたことである。細片のため性別や年令はわからないが、埋壺の用途目的を示す貴重な証左である。埋壺は、住居の出入り口部に埋められ、出産胎児の胞衣、死産児、または生後まもなく亡くなった乳幼児を埋納したという説と、住居建設に伴う供儀のものという説がある。18号住の人骨検出は前者の用途を示している。

### (4) 土括群

土括群は8号住居址附近と、29号住居址附近に集中して検出された。あり方としては弧状的是集落の内部、山側に縄文時代中期後業の住居址と重なりあうようにみられる。このことはこれらの土括が中期後業末から後期前半にかけてのものと考えられる。直径の小さいのは柱穴と思われ、炉が検出された10号住居址がその一つで、他は調査時に炉の検出ができなかったものと思われる。やや大きいのは最近全国的に注目されている大形木柱の穴とも、幼児の墓括とも考えられる。どちらという決め手はないが、列状に並んでいるのもあって前者を考えたい。直径1mを越えて掘りこみも深いのは貯蔵穴と考えられるが、29号住居址附近的ピットからは動物の焼骨が出土していて、祭祀儀礼の土括とも考えられるが、今後の類例を待ちたい。この土括群には焼土が各所にみられた。10号住居址にも焼土が何か所かあり、動物の焼骨と共に人骨も検出されており、廃屋

墓、あるいは再葬墓的な場でもあった可能性がある。

#### (5) 集石墓

集石墓は集落のあるA地区より一段高く山よりにあって、その台地縁に構築されていた。集石の下部からは不整円形の墓括や、長方形の墓括、長方形に石を並べた石棺墓などが検出された。その上部を覆うように木曾川から運びあげた川原石を集石させている。墓括や集石内から人や動物の焼骨片が出土した。同様なあり方は大桑村大明神原遺跡でもみられた。詳細はわからないが村内の芝垣外遺跡でも人骨が出土しており、同様なあり方ではなかったかと思う。

骨を調査した西沢寿見氏は、骨のあり方から「造骸の再埋葬を目途とする移動の結果」と推察している。A地区の土括群のあり方とあわせて、縄文時代後期～晩期の埋葬の姿を示すものと思われる。

#### (6) 平安時代住居の廃絶

マツバリ遺跡では11・16・38号住居址と3軒の平安時代住居址が検出され、3軒とも住居内に多量の石が投げこまれていた。特に38号住居址は多かった(第15図版)。いずれも角礫で松沢川から持ちあげたものである。11号住居址は火災にあい、炭化した建築材がみられ、その上部に礫がみられた。いずれも住居内中央部に集中している。このことは、これらの礫が廃絶時(後)に住居内に投げこまれたと考えていたが、上屋構造の一つとして礫が使われていたことも考えられる。一般に古代の家の屋根はカヤ葺きと考えられているが、各種の屋根材があったものと思われる。三岳村の縄文時代復元住居は桧皮葺きである。木曾の居家といえば石置き板屋根である。調査にいくと鉄平石で屋根を葺いている。かんば葺きの屋根もあって、そのかんばおさえとしてびっしりと石を並べている。古絵図には土置き屋根もあってと変化にとんでいる。かんば葺きのように石をびっしりとおいた屋根が廃屋になって崩れた時、住居内には礫が集石状に残存するものと思われる。当遺跡のはどちらを示すものであろうか。

### 4. 集落の移り変り

生活の痕跡は縄文時代早期から認められるが、早期、中期初頭、晩期前半、晩期終末、弥生時代中期初頭の住居址は、今回の調査地域内からは検出できなかった。

中期中葉Ⅰ期、西縁近くの3号住居址1軒のみである。土器からみると、松本平から鳥居峠を越えてきた1家族がこの地を選んで居住した(111図)。

中期中葉Ⅲ期1・6・12・22・26・32号住居址の6軒で、縁辺に並ぶ26・1・32号住の3軒と、内部にかたまる6・12・22号住の二群が考えられ、3家族単位の2グループにと人口増がみられる。

中期後葉Ⅰ期 5・6・23号住の3軒となり、3家族1グループにと集團が小さくなる。

中期後葉Ⅱ期 1・2・4・5・8・9・13・14・17・20・21・24・25・27・28号住の15軒が

あり急増している。9号住附近の切り合いをみると、2~3時にわけられそうである。炉縁石棒樹立の8号住、石柱石壇の5・13号住の存在を考えると、それぞれを中心とする三群が考えられるが、どれがどのように結びつくかは検討しない。

中期後葉Ⅲ期 15・18・35号住の3軒が堅穴住居址と確認できたが、19・29号住は炉のみであり、19号住は15号住に重なっているので、一時期新しいものと思われる。前記3軒は内部に入ってきたまっている。35号住には下伊那型石壇がみられる。

後期 10・36号住の2軒と少なくなる。2軒とも確実に住居址と断言できない面もあるが、中期のような堅穴住居址でないためと思われる。集石墓拡の存在から考えると後期から晩期にかけての集落が、調査地域外か、松沢川を挟んで対岸、林昌寺附近にもあったと考えられる。同じ段丘地帯の尻平沢川では北岸に上の原遺跡、南岸にお玉の森遺跡とあって、川を挟んで一つの集落としてのまとまりがある。同様な方がマツバリ遺跡でも考えられる。2軒だけではあれだけの集石墓拡はつくることができないと思う。

弥生中期 中期の住居址は木曾谷では最初の検出である。34・37号住の2軒が北縁に並んである。2軒一群とも考えられるが、17号住北にも中期土器が集中して出土した地点があり、住居址であった可能性が考えられる。村内では原野地区巴松遺跡で後期住居址2軒が検出され、上松町金比羅遺跡では1軒の検出があり、木曾谷のような自然条件のきびしい所では2~3軒が一単位としての小規模集落であったと思われる。

平安時代 11・16・38号住の3軒が検出されている。内部にあって、38号住は一段上のB地区で検出された。3軒一単位の小集団の集落と思われる。お玉の森遺跡（現在までに36軒検出）の分村と思われる。

##### 5. 綱文時代中期後葉の拠点集落

マツバリ遺跡の住居は中期中葉から後葉、そして後期へと、時間においての居住も考えられるが、連続して集落がつくられていた。このことは集落立地としての条件がよかつたことを示している。特に中期後葉になってⅠ期3軒からⅡ期15軒へと拡大している。現在、同時期15軒という集落は知られていない。これをはさんで前後の中期住居址32軒というのも木曾谷最大である。住居数の多さからも拠点集落といえる。

8号住の炉縁石棒樹立と炉縁埋壺 5・13号住の石柱石壇、35号住の下伊那型石壇など、特別な住居内施設をもつ住居の存在が注目される。このような施設はどの遺跡にもみられるというものではない。同時期の遺跡の中では、特別な遺跡といえよう。

石棒がある。第二の道具とよばれ、生活活動には使われない精神活動の道具である石棒が中期のものとして住居址から4点出土している。また2点であるが、同じく第二の道具である土偶も出土している。数は少ないが、このような道具をもっているという点からも拠点集落といえる。

多量の打製石斧と未製品や剥片の存在は、この遺跡で石器製作が行われていたことを示し、その量の多さは当遺跡だけの需要のものではない。交易品としての生産ではないかと思われる。生活のための狩猟・採集以外にも、石器の生産活動がされていたということは、活力というか経済力があったものと考えられる。この点からも拠点集落といえる。

#### 6. 恵まれた集落立地

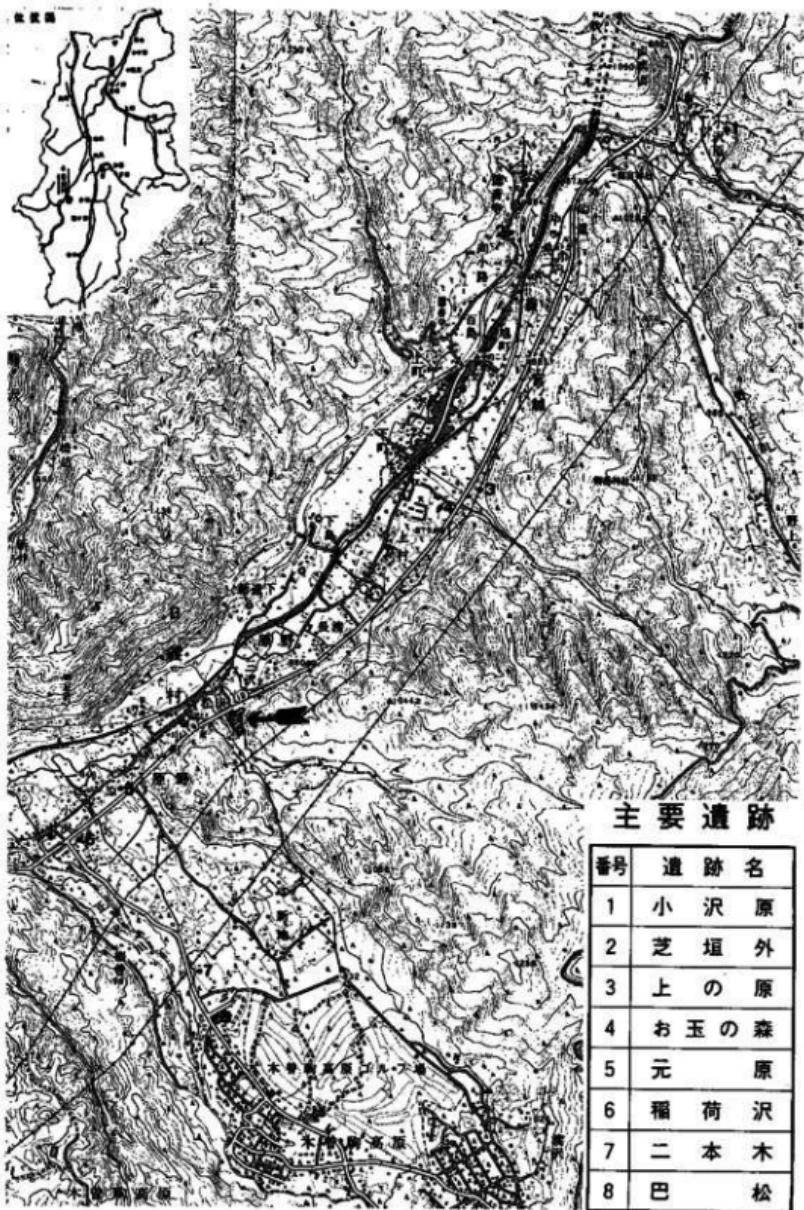
東から流れてくる松沢川は谷が深いこともあって、東の山地は比較的に遼い。このため段丘地帯の中では日照時間が長い場所である。松沢川の北岸にあって、北東に山を背負い、北西にゆるやかに傾斜していることもある。日だまり的な暖かさがある。10m近い崖をおりれば松沢川で、水便はよいといえる。

縄文時代は狩猟・漁獵・採集による食料獲得がされていた。中期後葉は採集に重点が行われ、山に入り山菜、根菜、堅果類が採取されていた。打石斧は根菜や堅果類貯蔵穴の土掘具といわれる。住居址の炉が大きく深くつくられるようになったのは木灰を得るためにという。ドングリやトチの実は灰汁を使ってアケを抜かない食べられない。遺跡の裏山には椿の木林となっていたものと思われる。尾根を越えて木曾駒高原へすると平地林がみられ、ゴルフ場になる前は椿の木の他に栗の木があちらこちらにあった。木曾川川岸には今もケルミの木が何本もある。

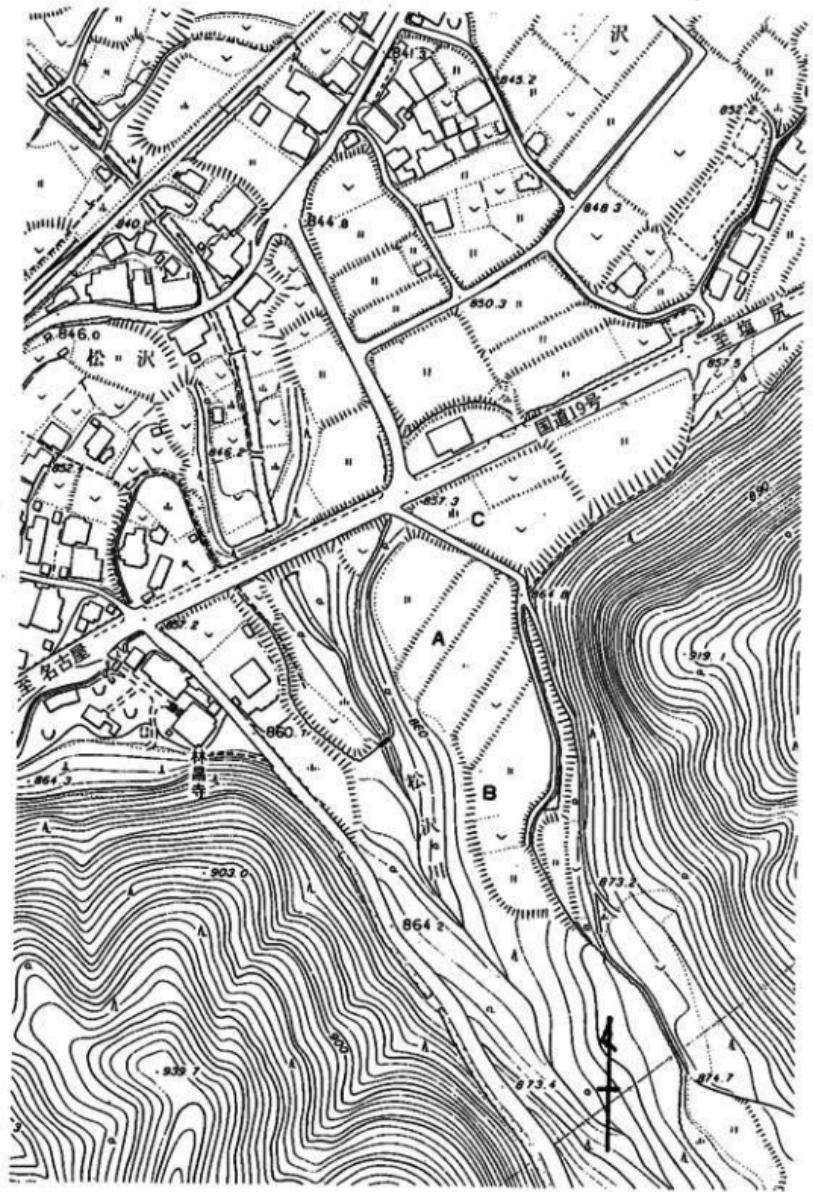
動物焼骨の中に犬もあって、当時集落には何匹か犬が飼われていたことを示す。狩猟に伴われていたものと思われる。日本鹿、猪、猿、熊、鳥などの焼骨が発見されており、松沢川をあがつて山地に入ったり、木曾駒高原へと出かけていたり狩りをしていたものと思われる。

石錐の存在は木曾川での網漁を示している。今でも川魚が多いが、気候が寒冷時の時は鮭や鱥の潮上もあったと思われる。

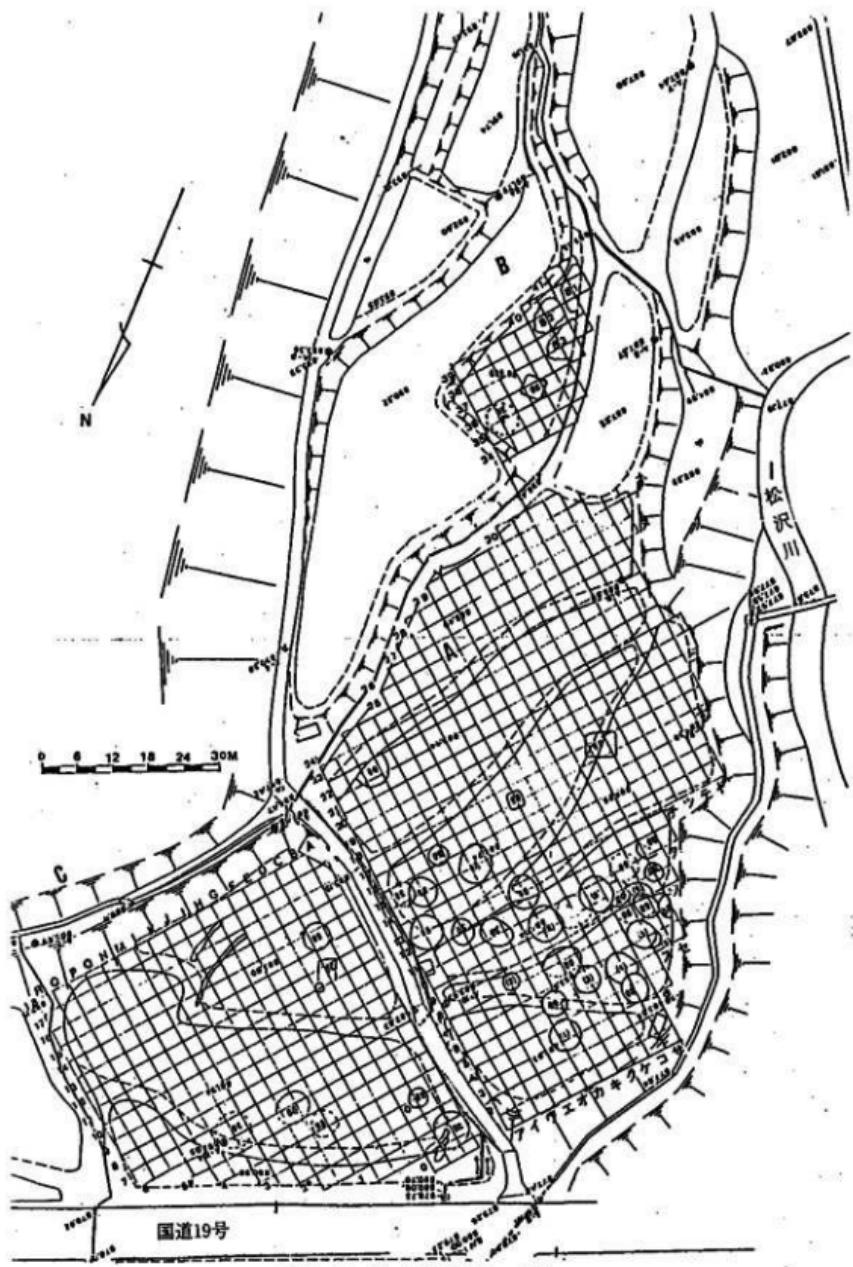
松本平や伊那谷に較べると集落の規模は大きくなかったが、食料に恵まれた豊かな生活があったものと思われる。



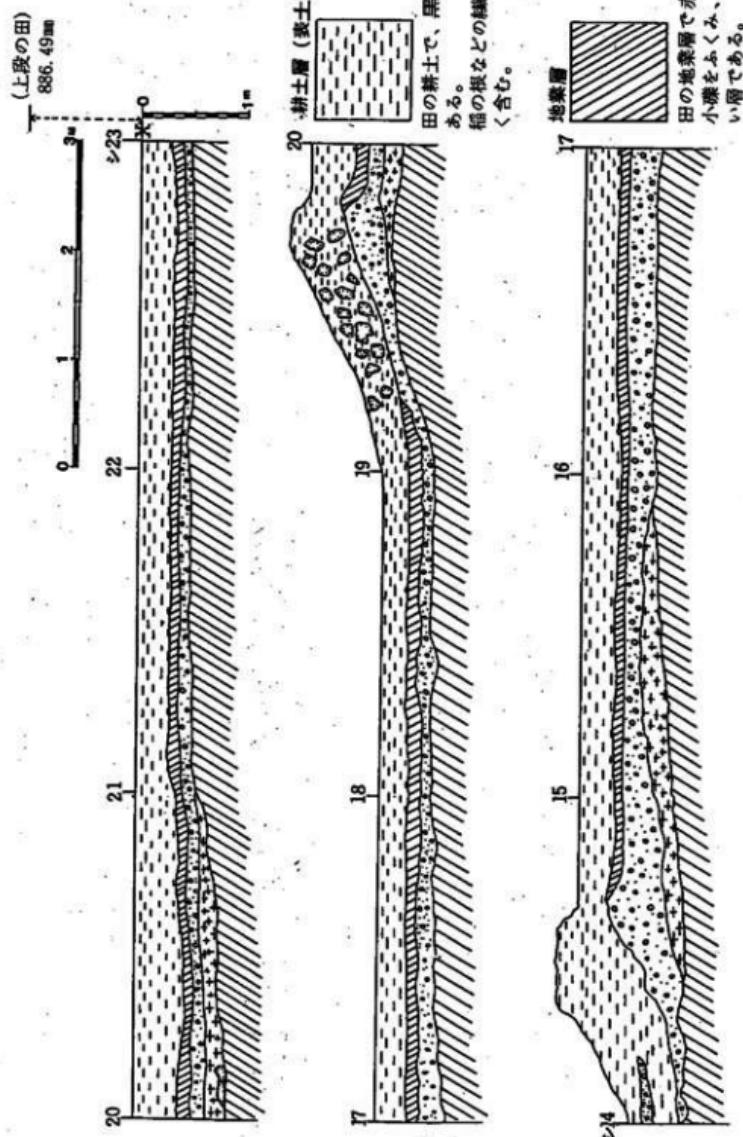
1図 マツバリ遺跡位置図（矢印遺跡）（1：50000）



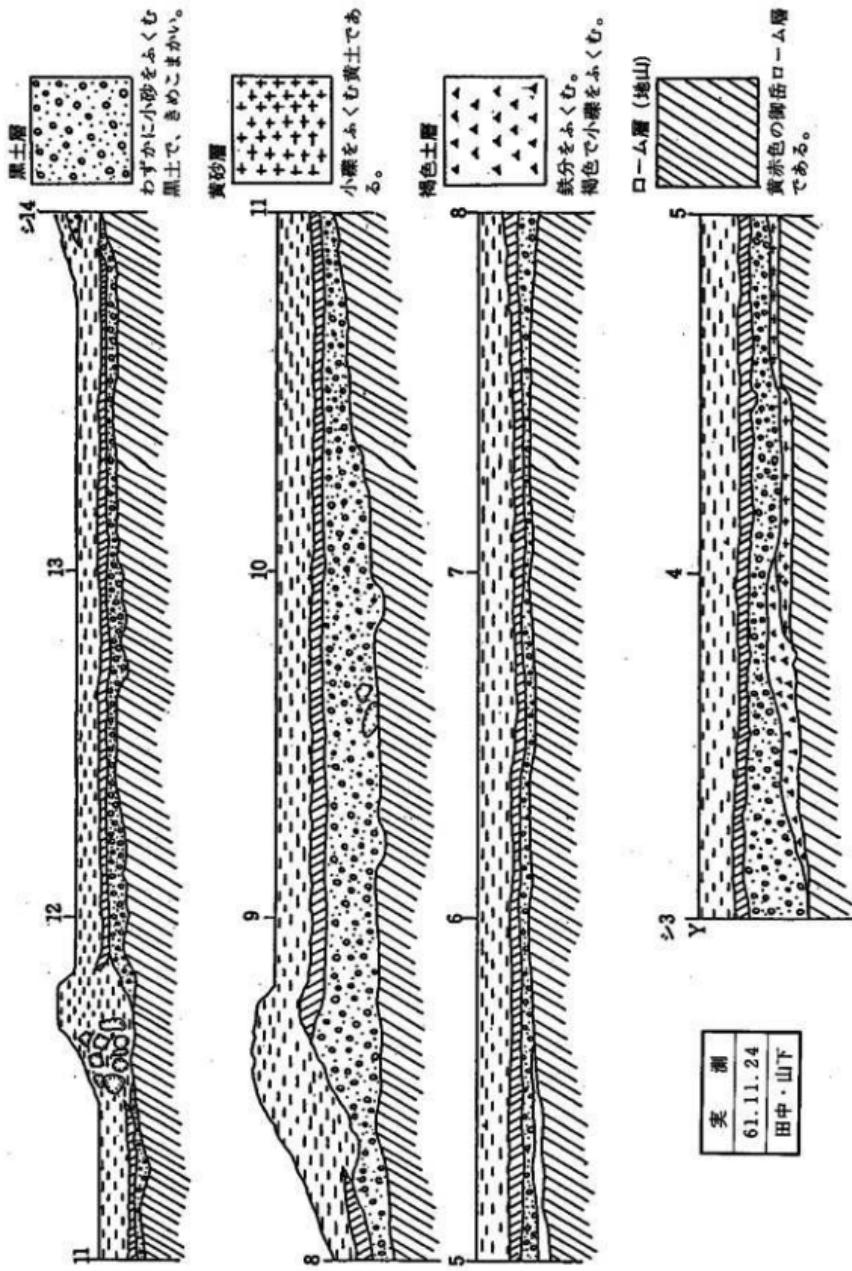
2図 マツバリ遺跡地形図 (1:2500)



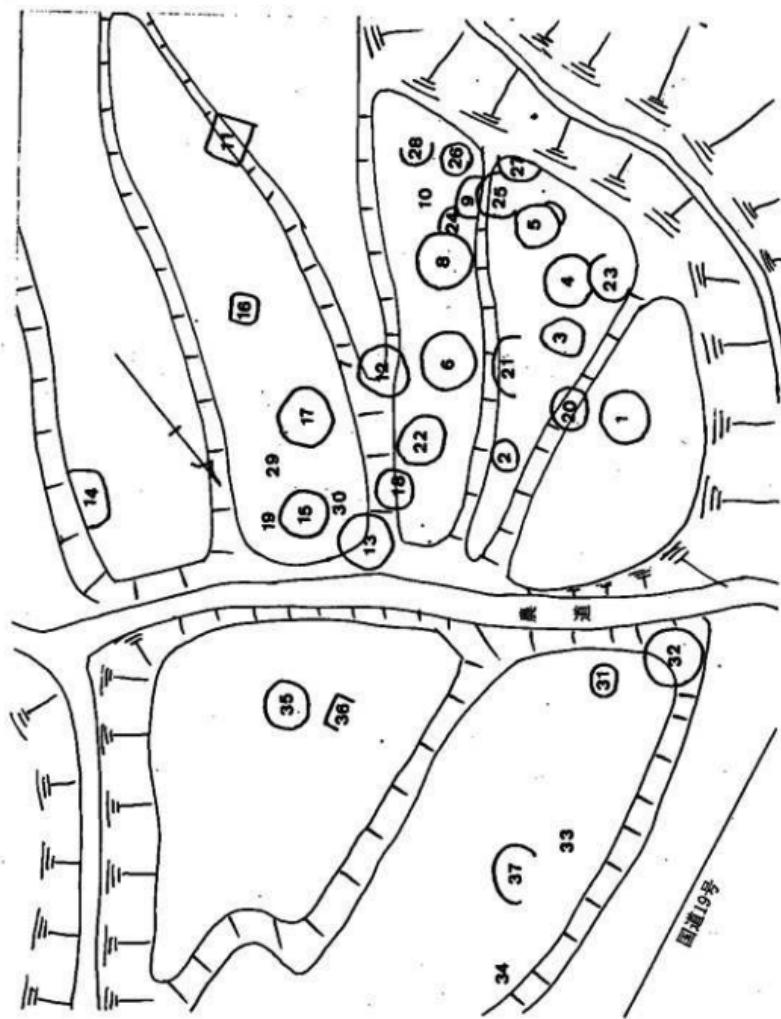
3図 A・B・C地区グリッド図



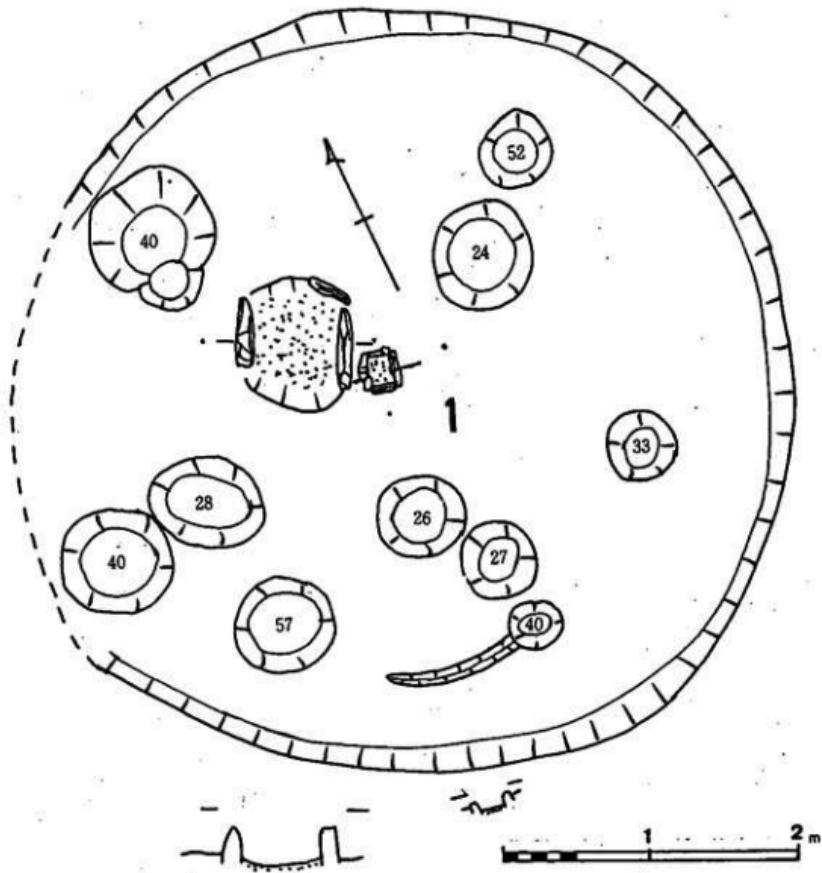
4図 A地区東西地層図 (1)



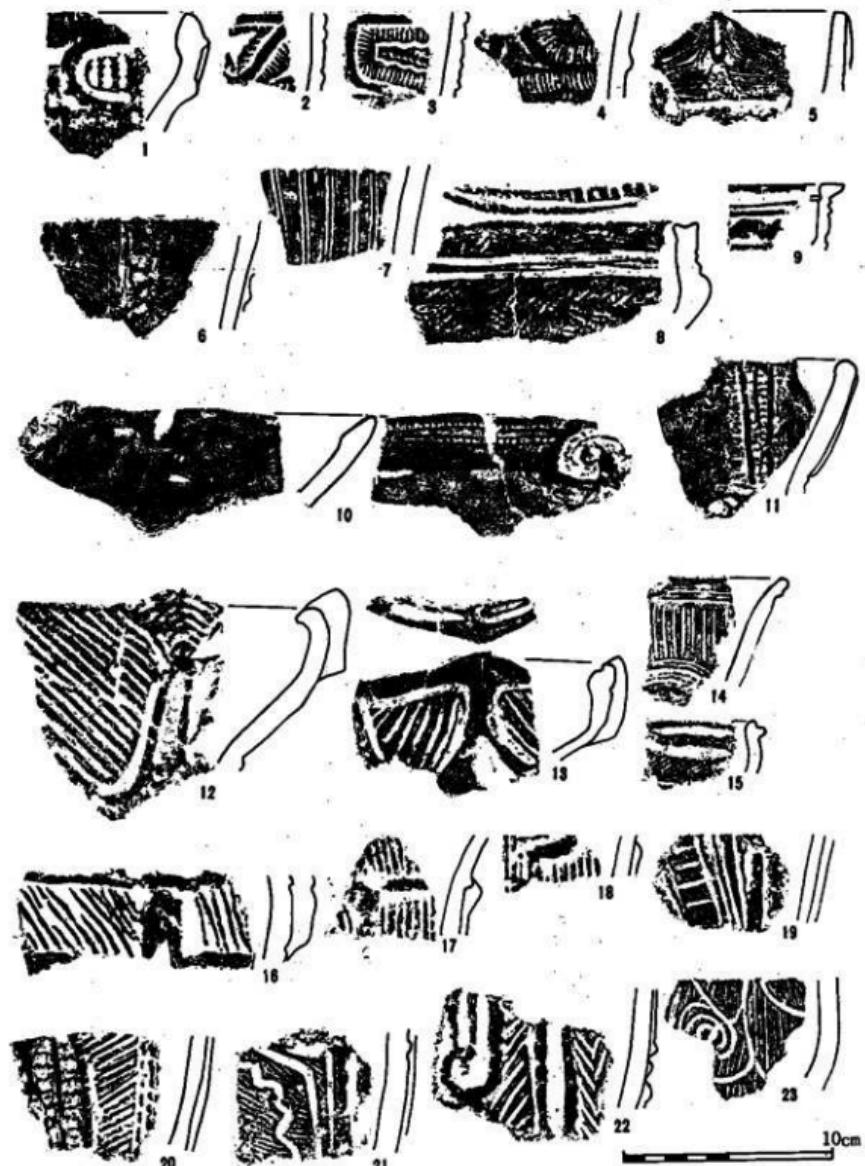
5図 A地区東西地層図 (2)



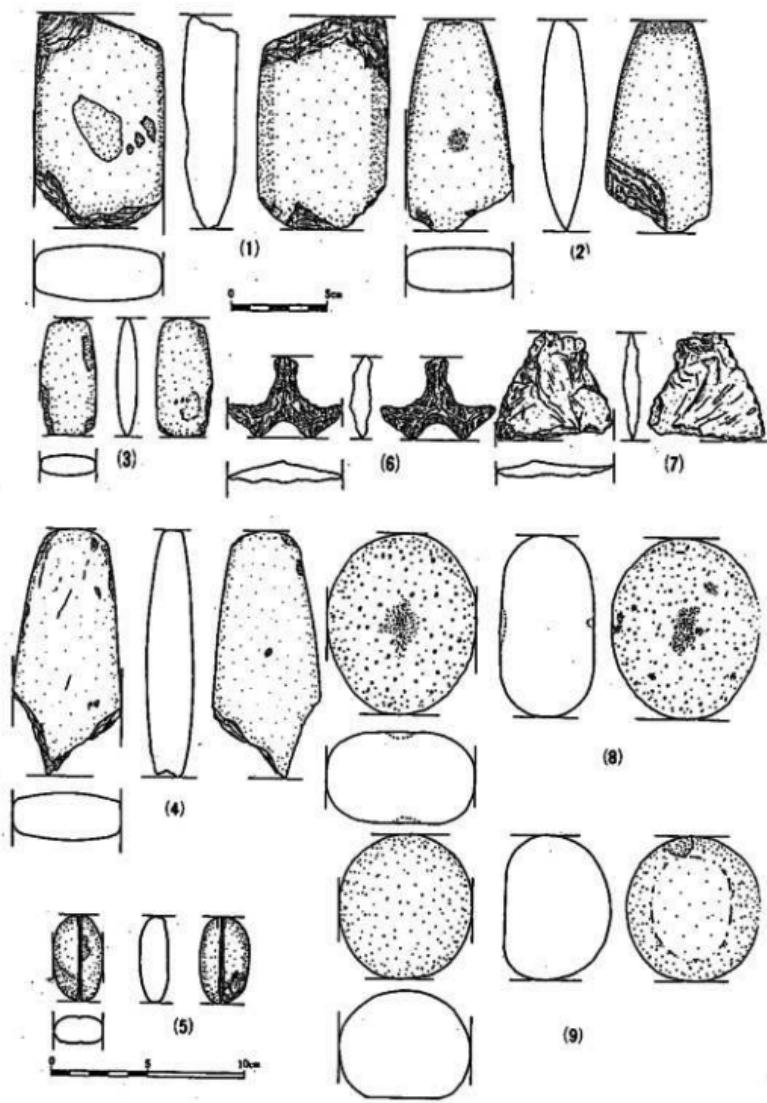
6図 A・C地区造構略位置図



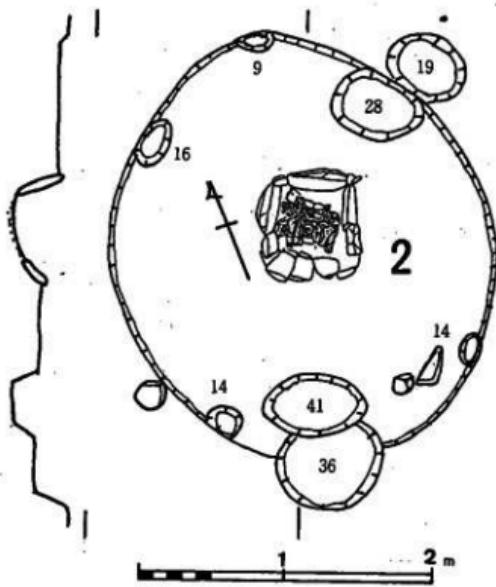
7図 1号住居址



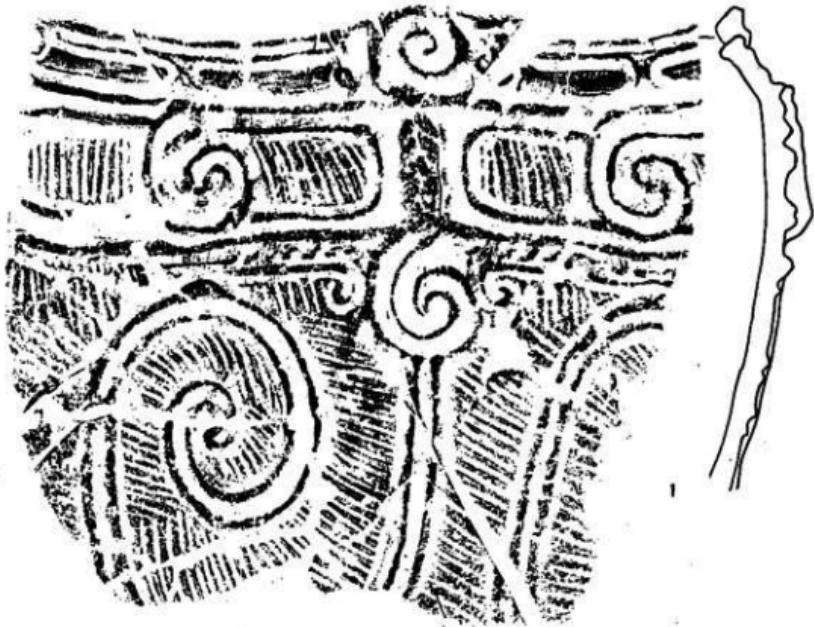
8図 1号住居址土器



9図 1号住居址石器

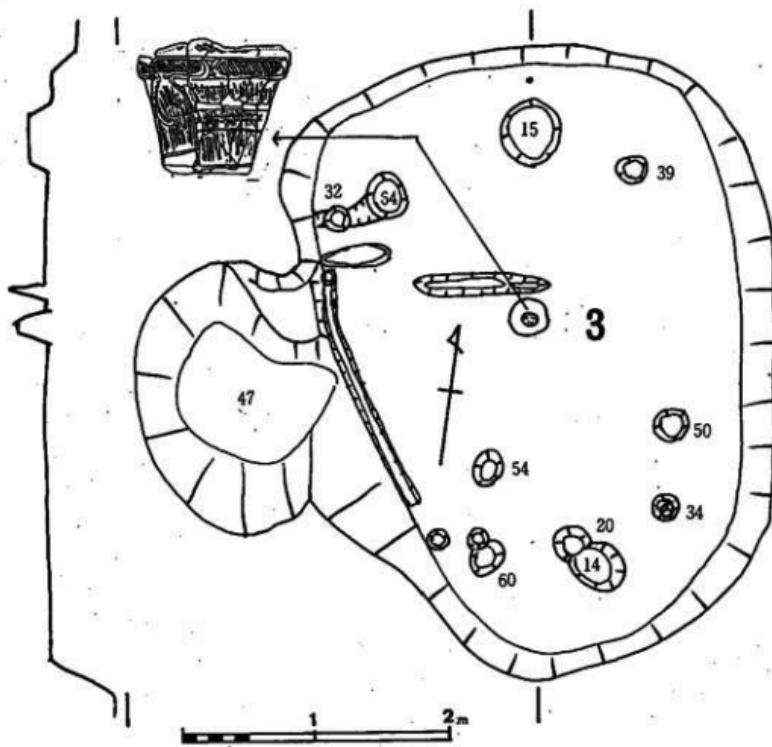


10図 2号住居址

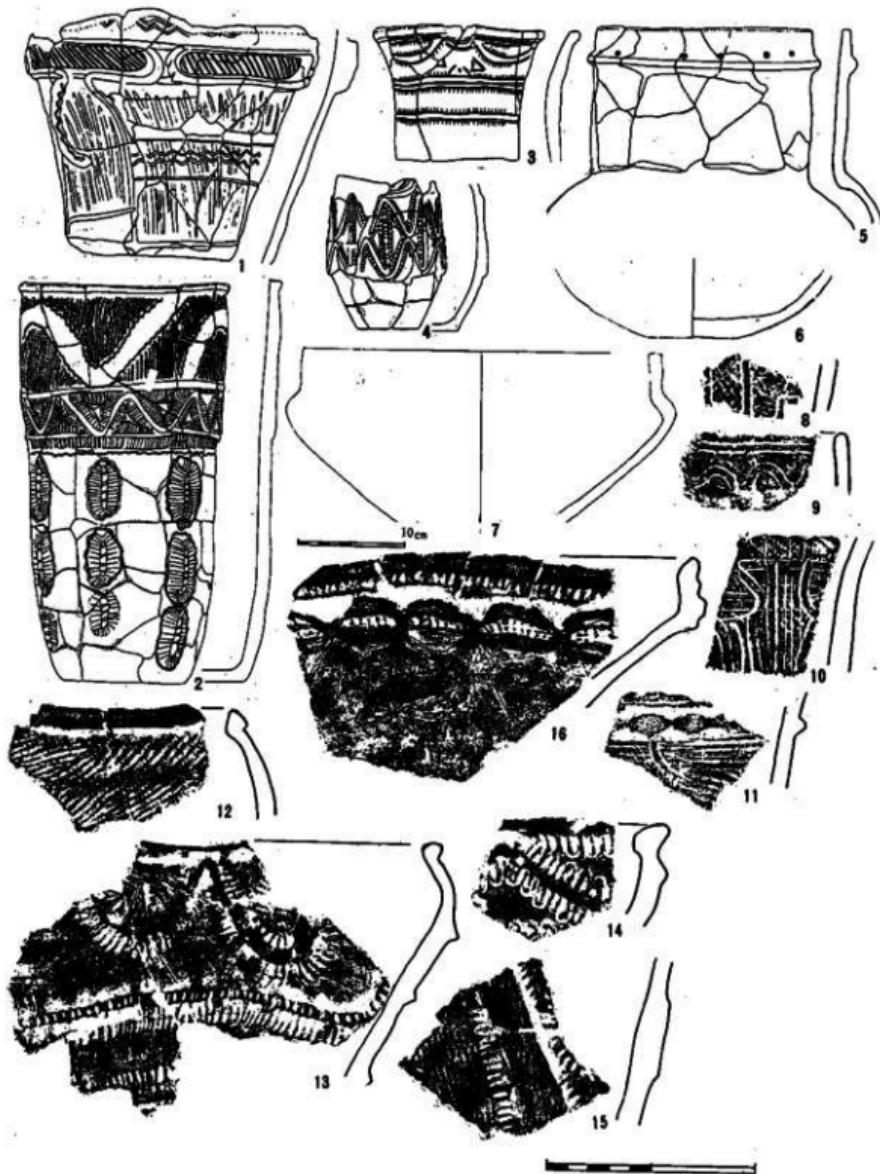


10cm

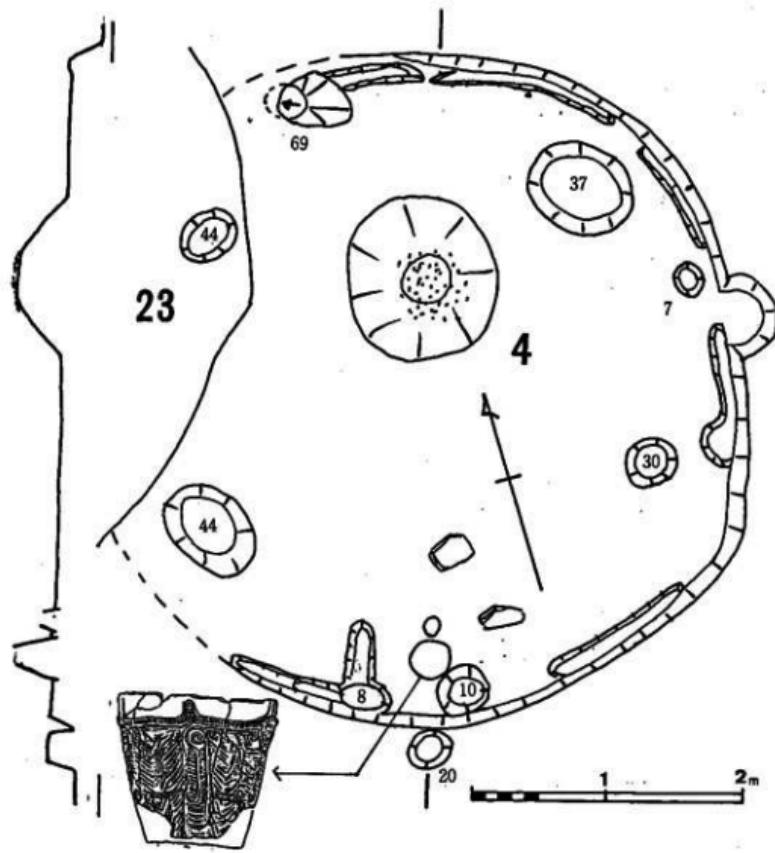
11図 2号住居址土器



12図 3号住居址



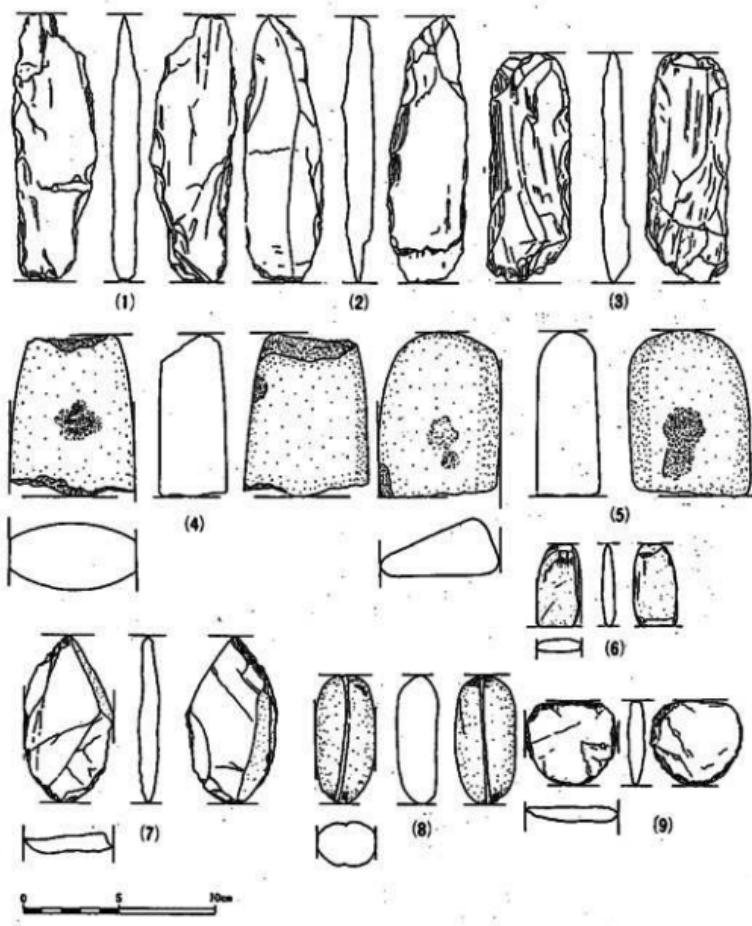
13図 3号住居址土器



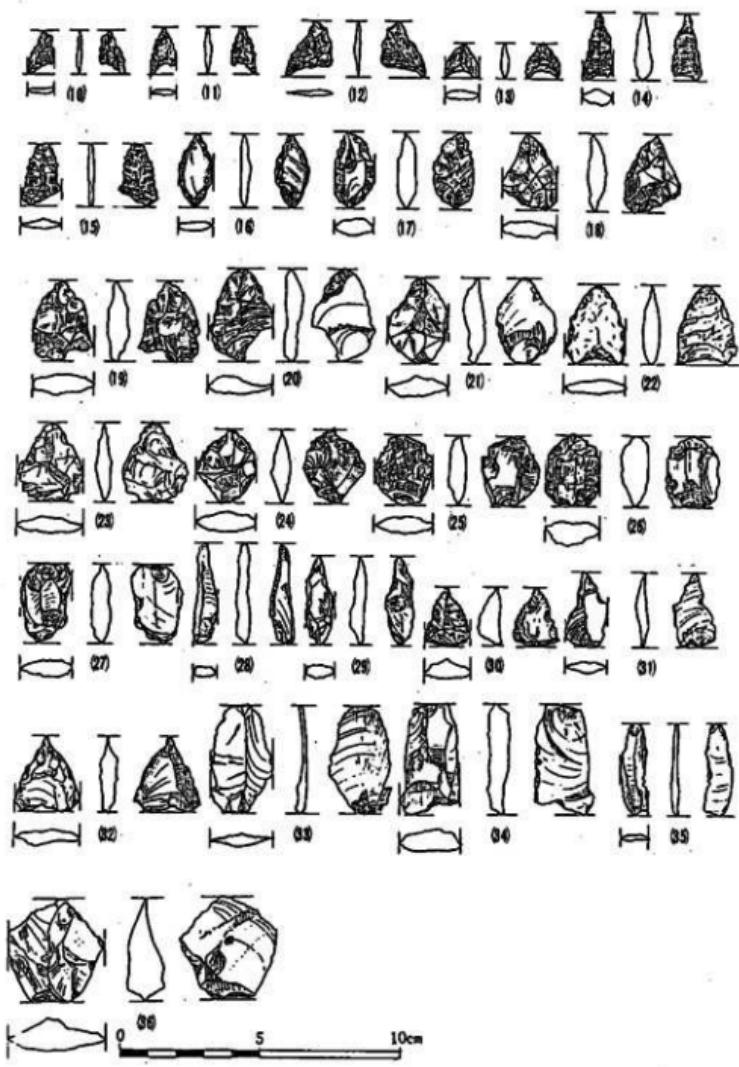
14図 4号住居址



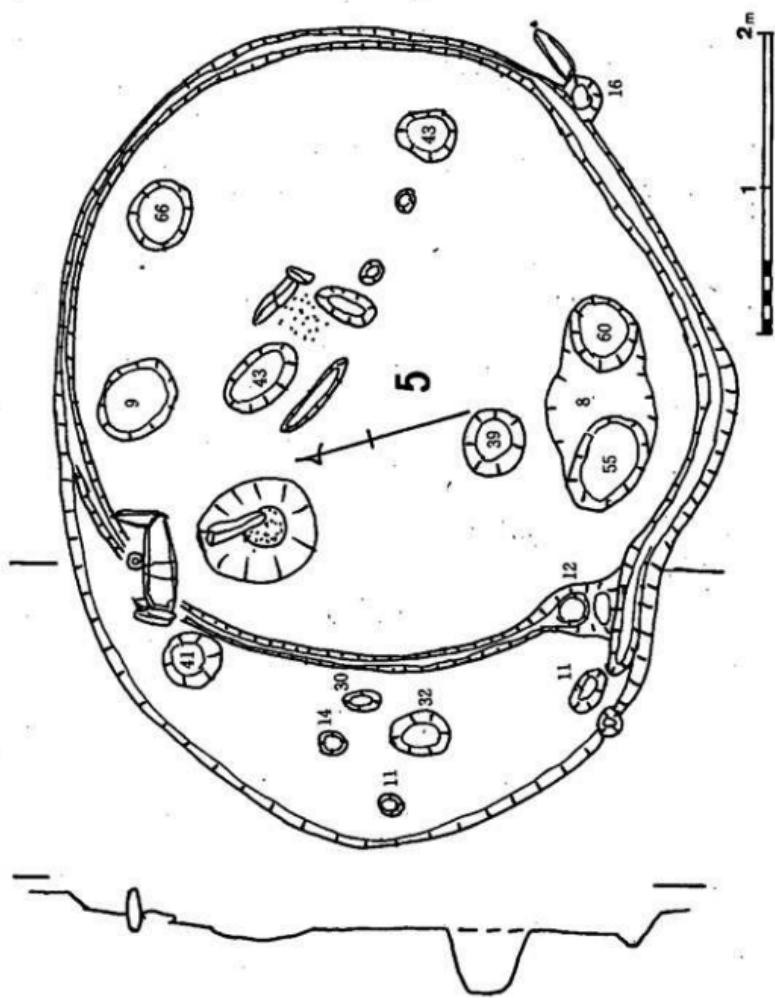
15図 4号住居址土器



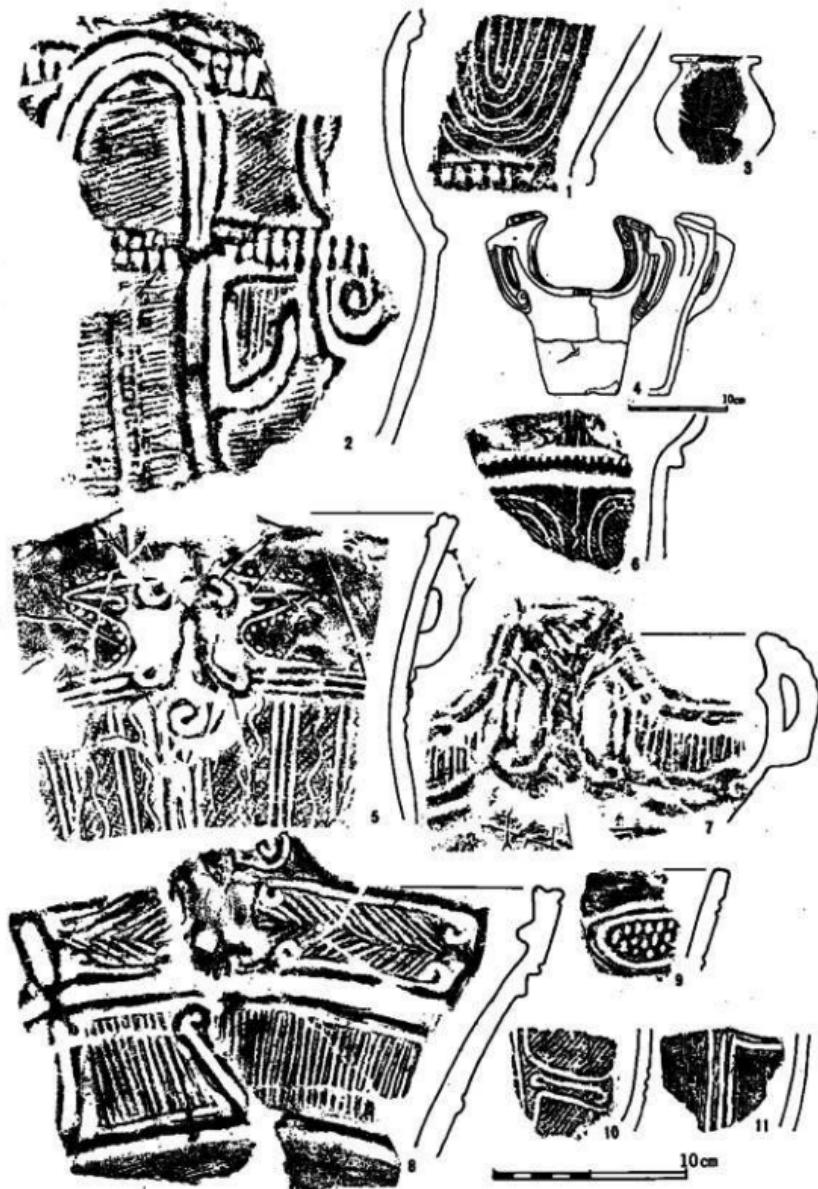
16図 4号住居址石器 (1)



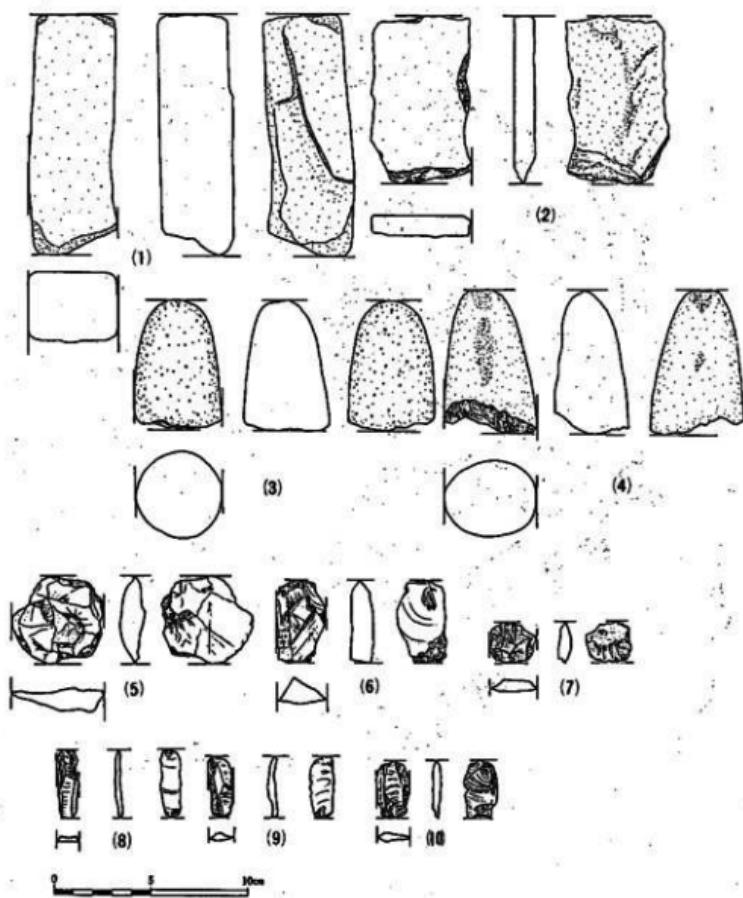
17図 4号住居址石器 (2)



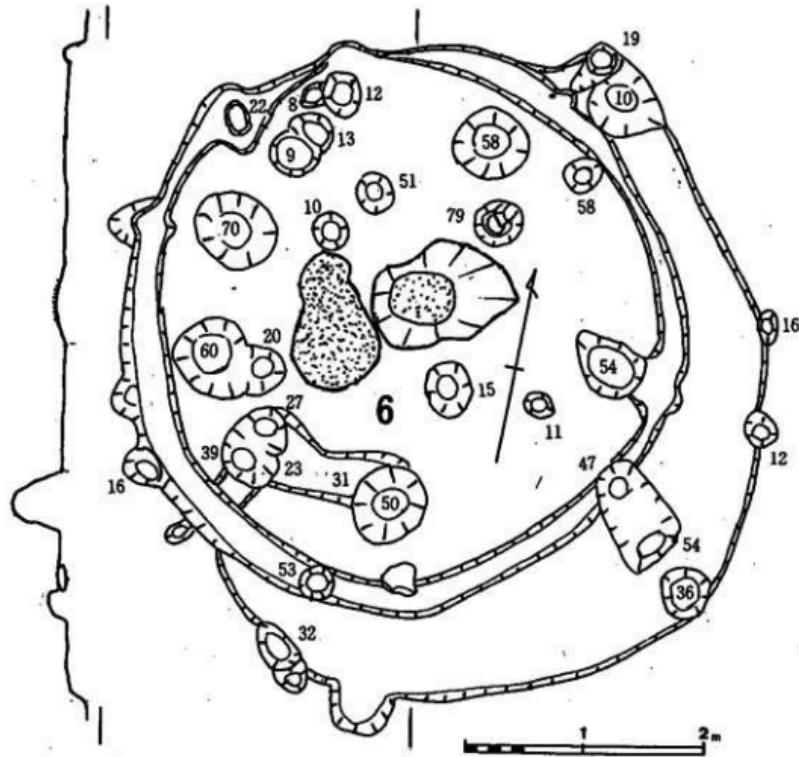
18図 5号住居址



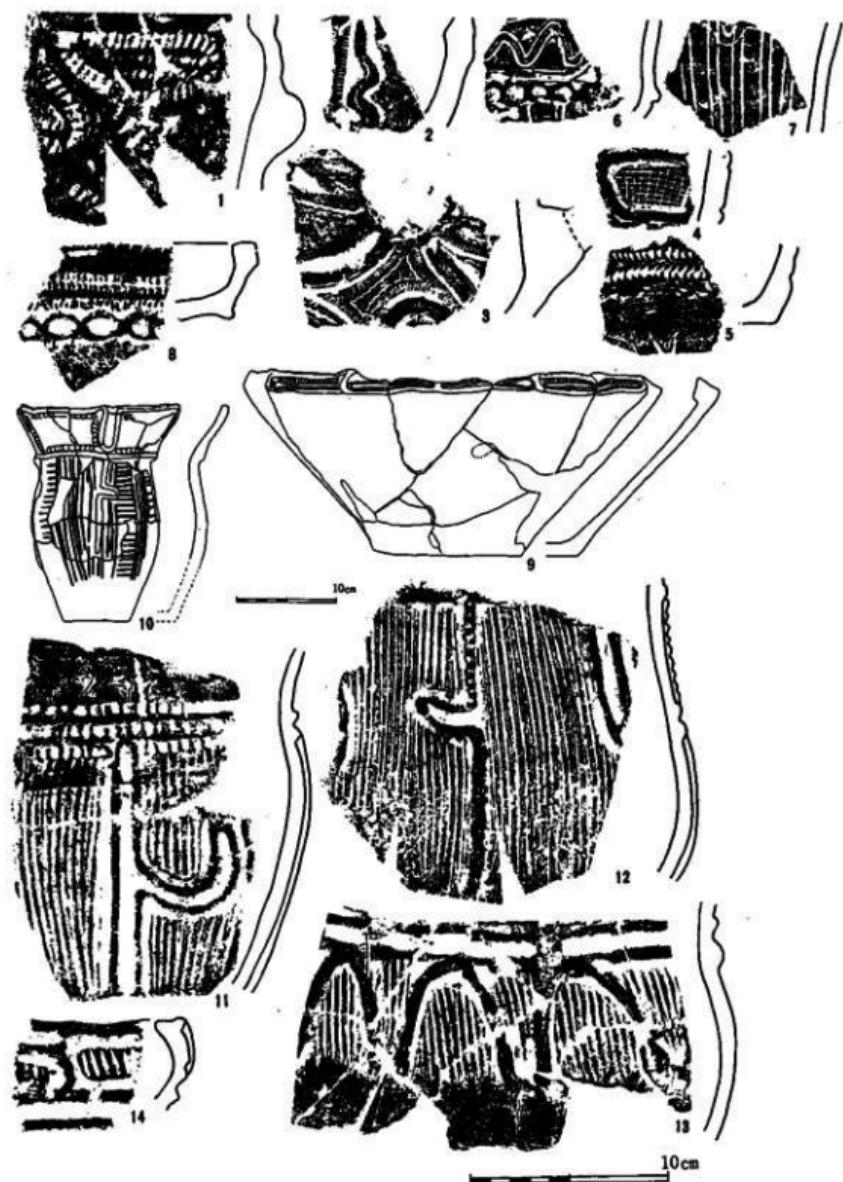
19図 5号住居址土器



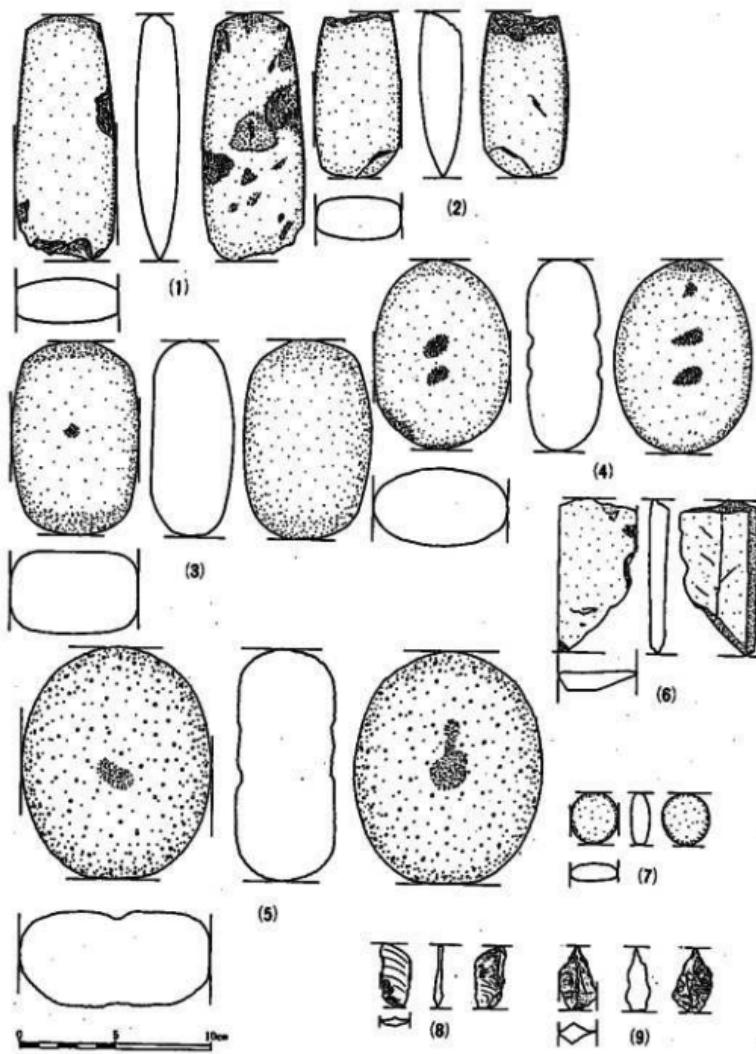
20图 5号住居址石器



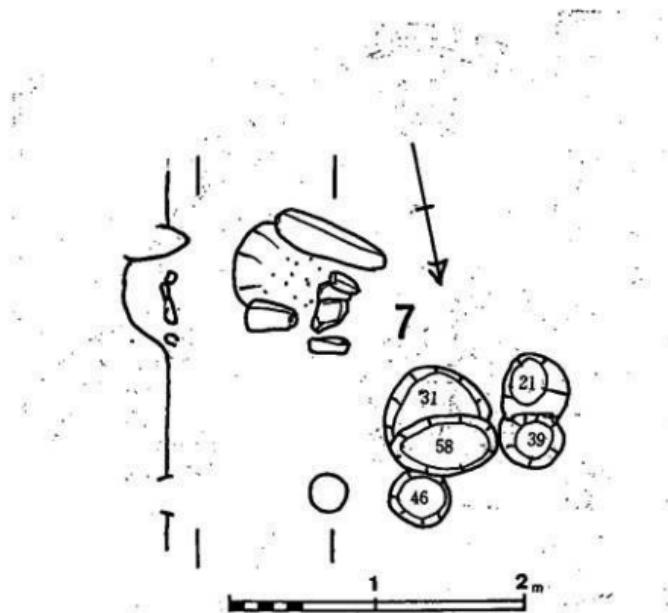
21図 6号住居址



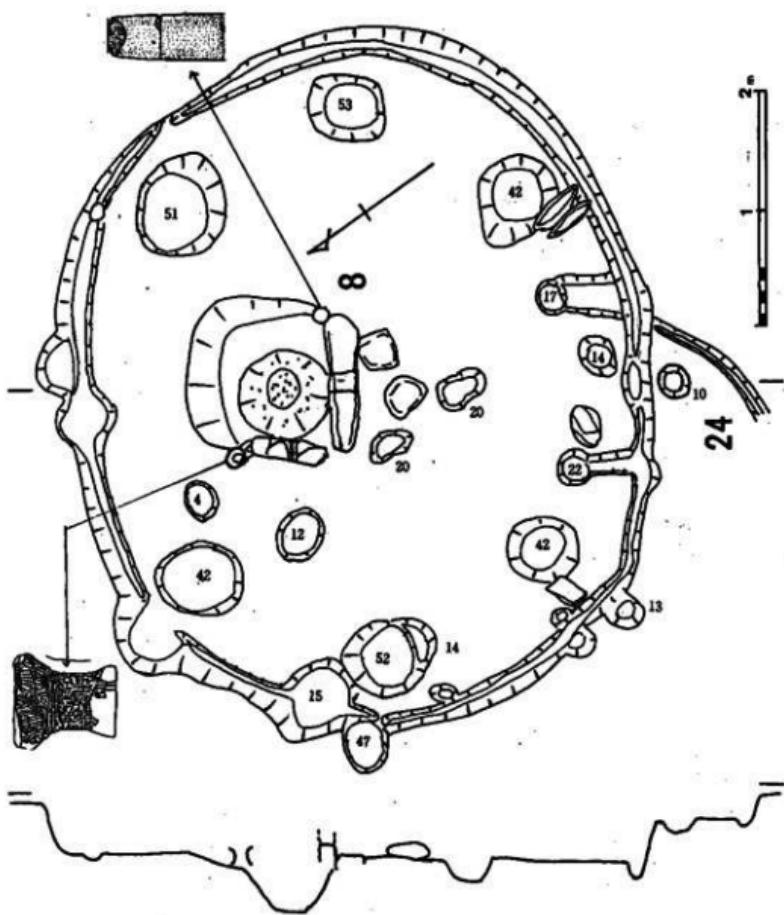
22図 6号住居址土器



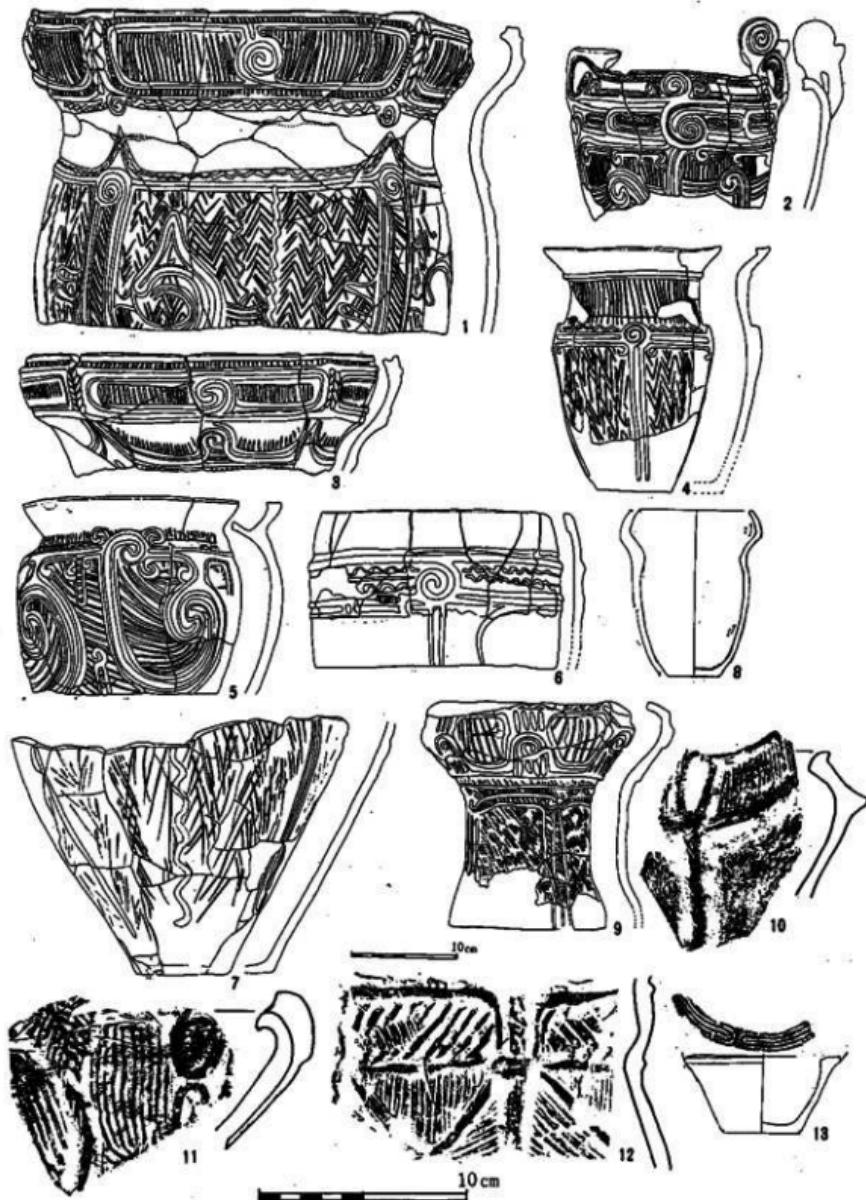
23図 6号住居址石器



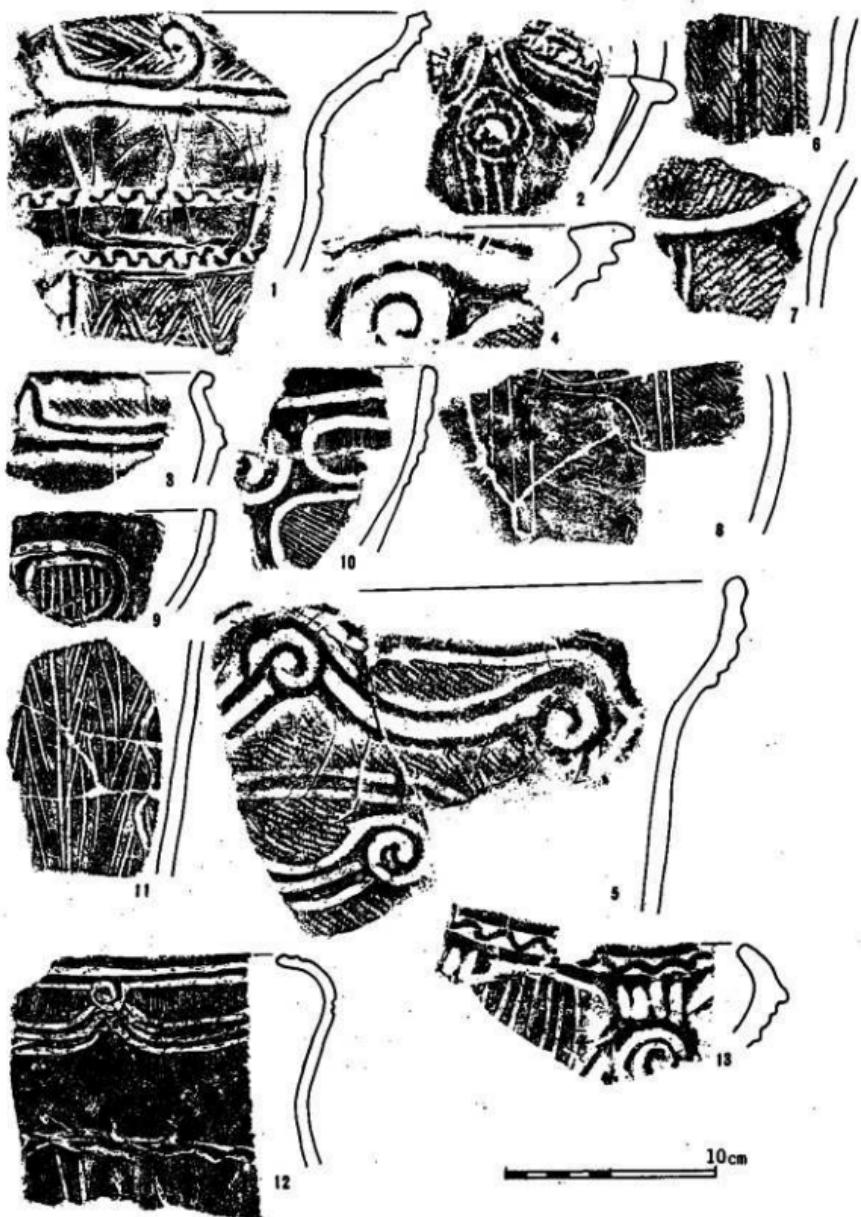
24図 7号住居址



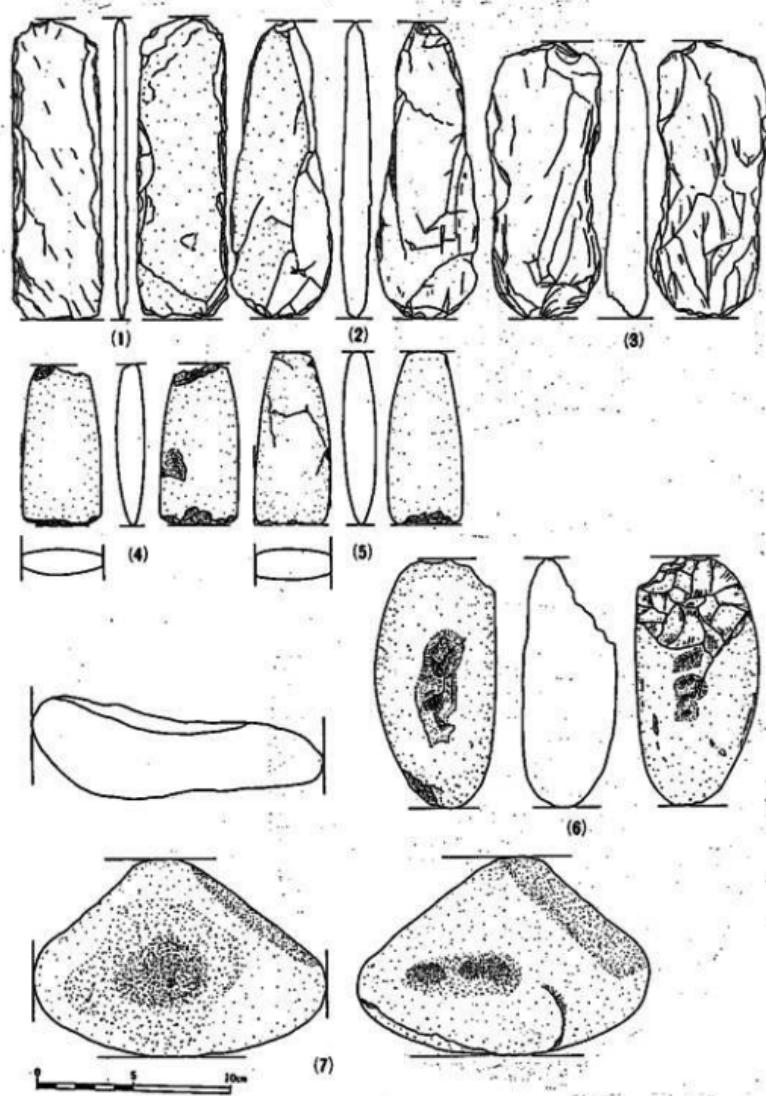
25図 8号住居址



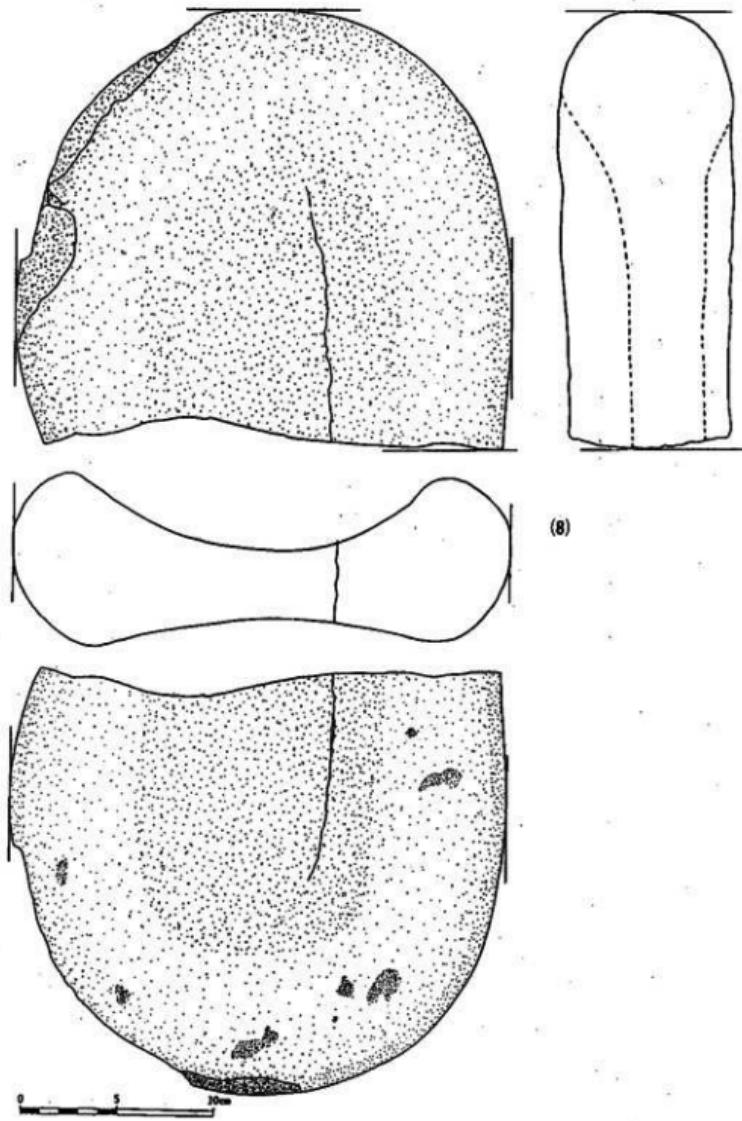
26图 8号住居址土器 (1)



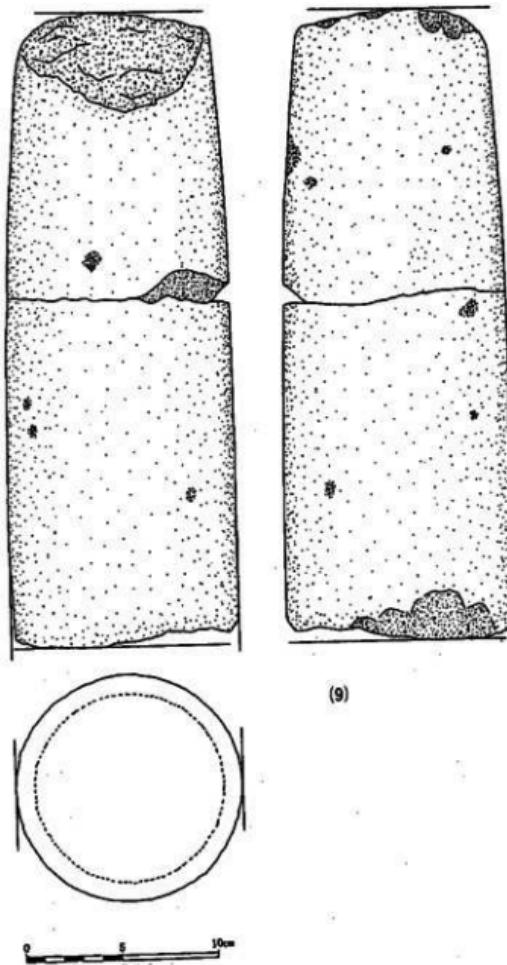
27图 8号住居址土器 (2)



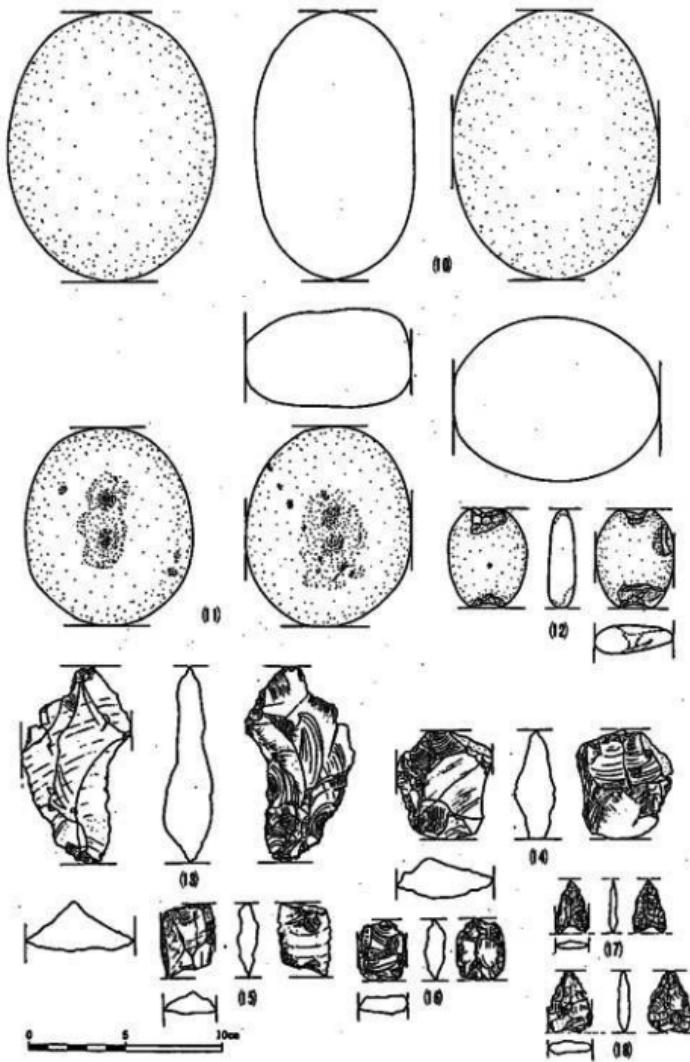
28图 8号住居址石器 (1)



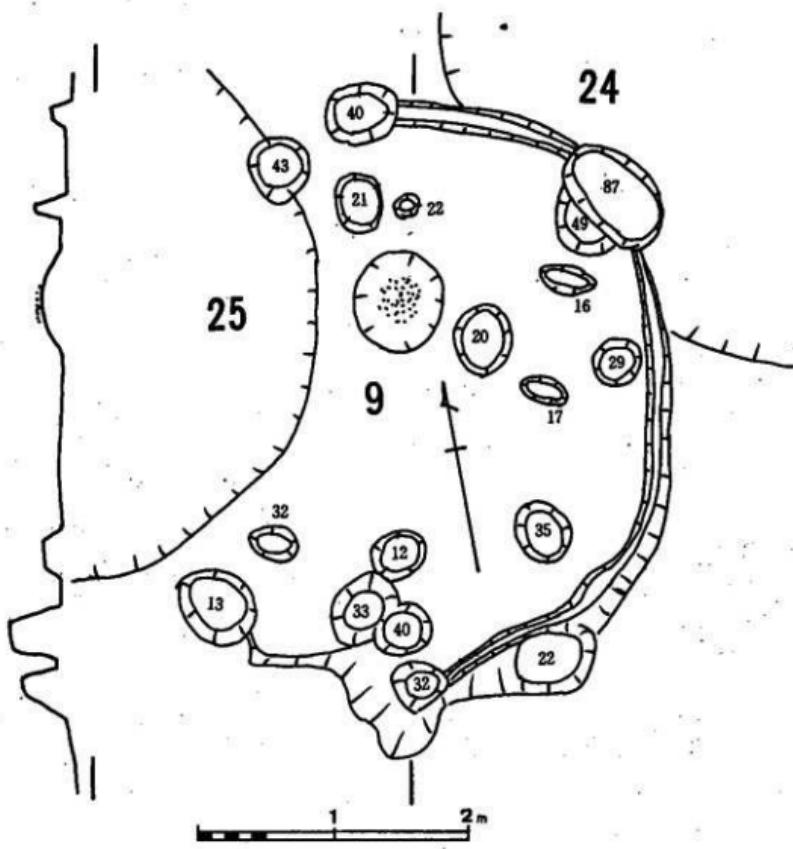
29図 8号住居址石器 (2)



30図 8号住居址石器 (3)



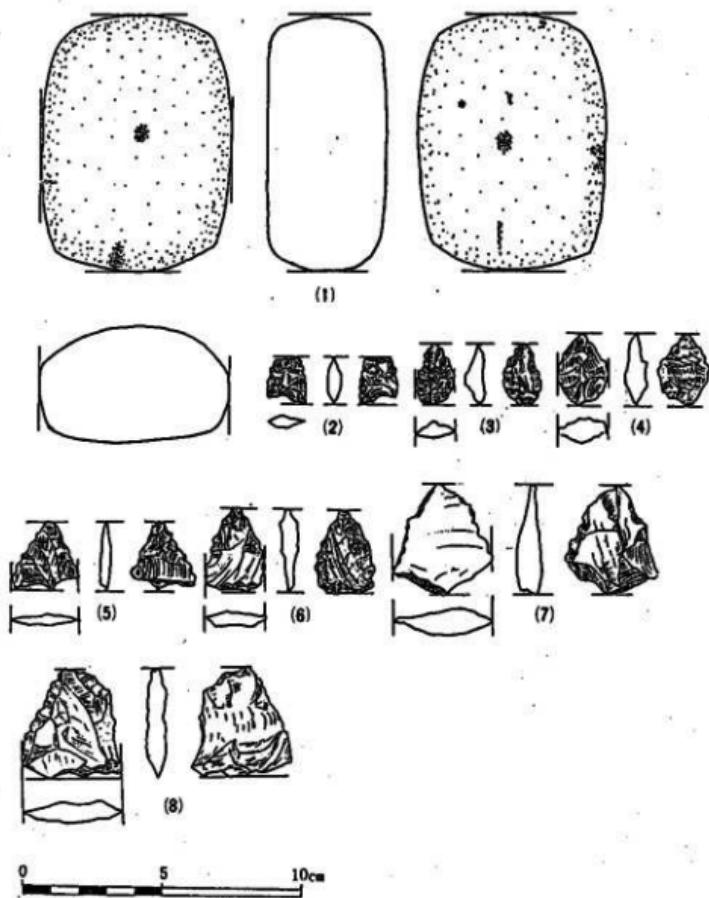
31図 8号住居址石器 (4)



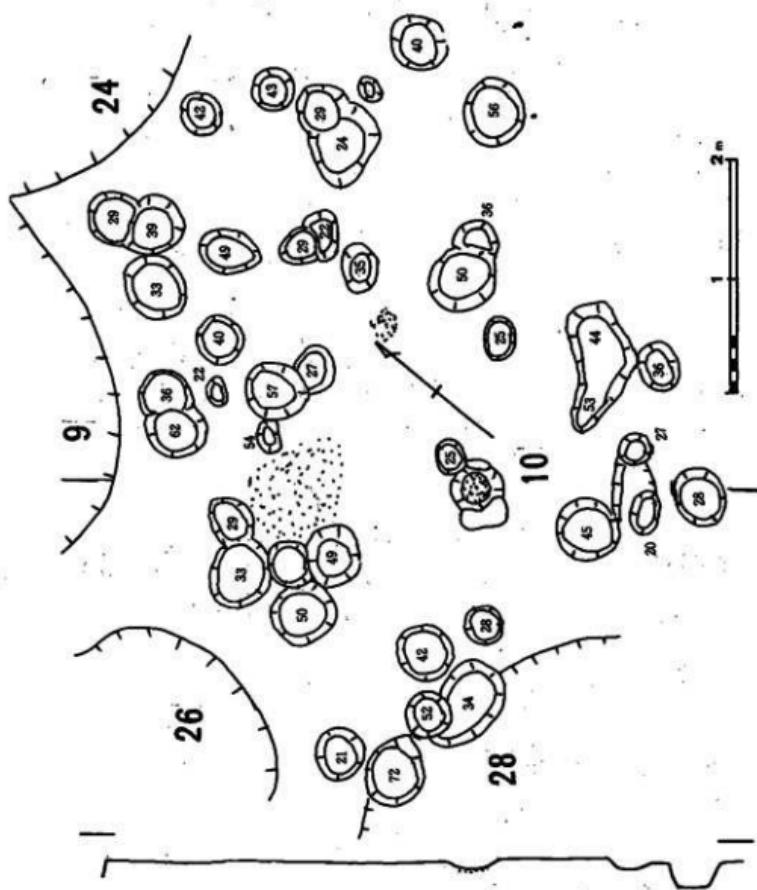
32図 9号住居址



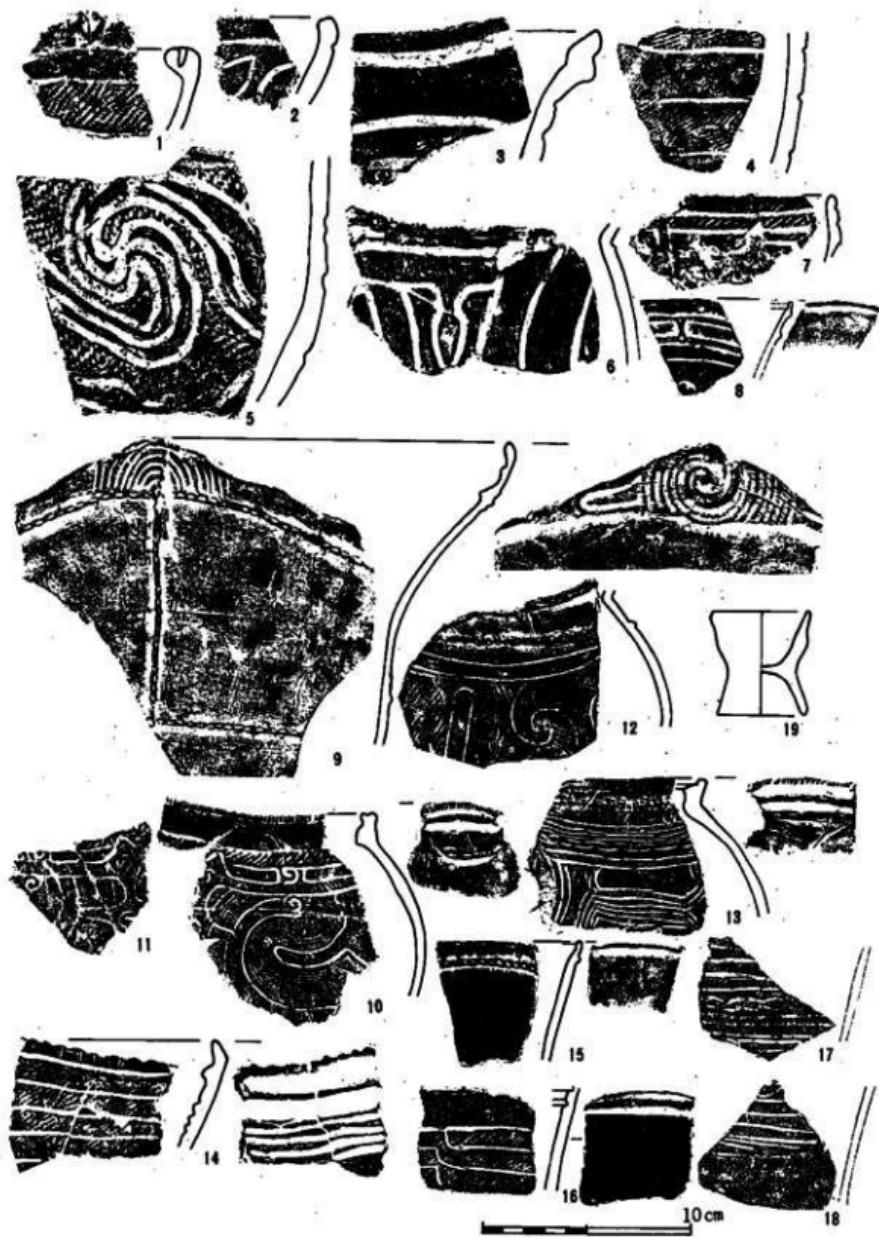
33図 9号住居址土器



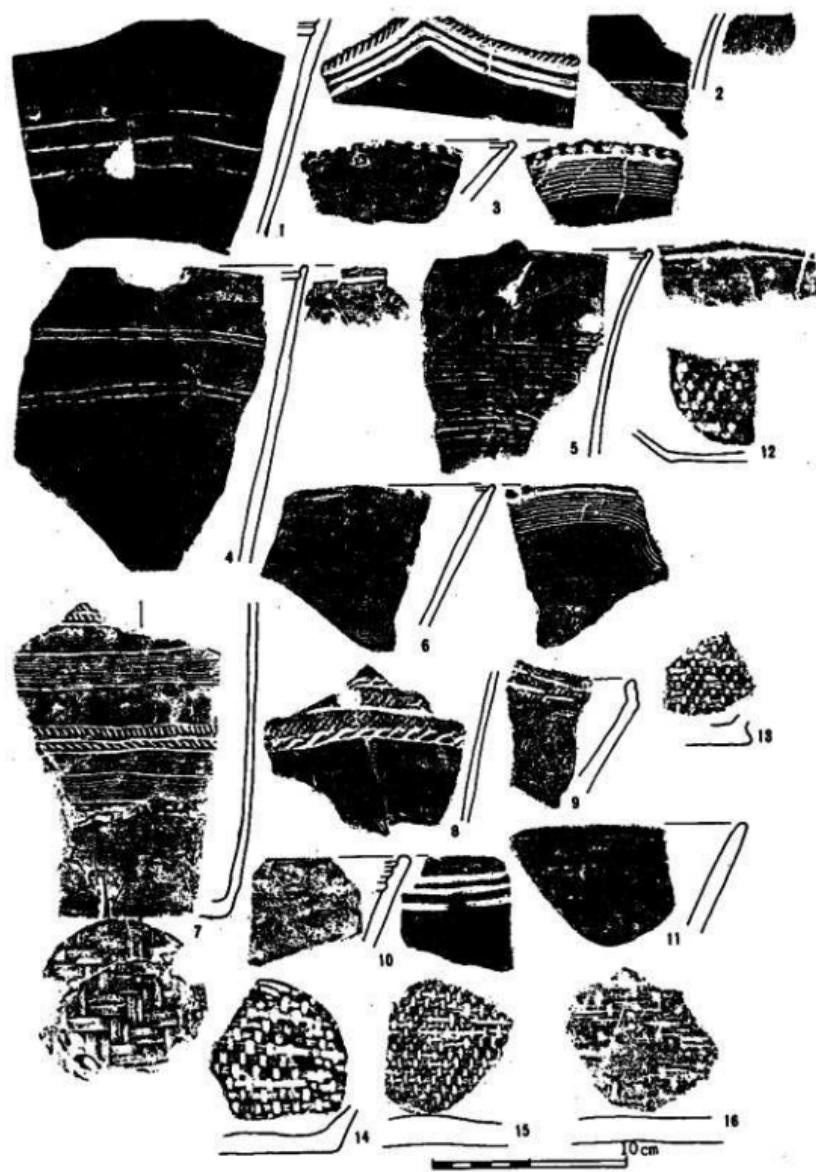
34図 9号住居址石器



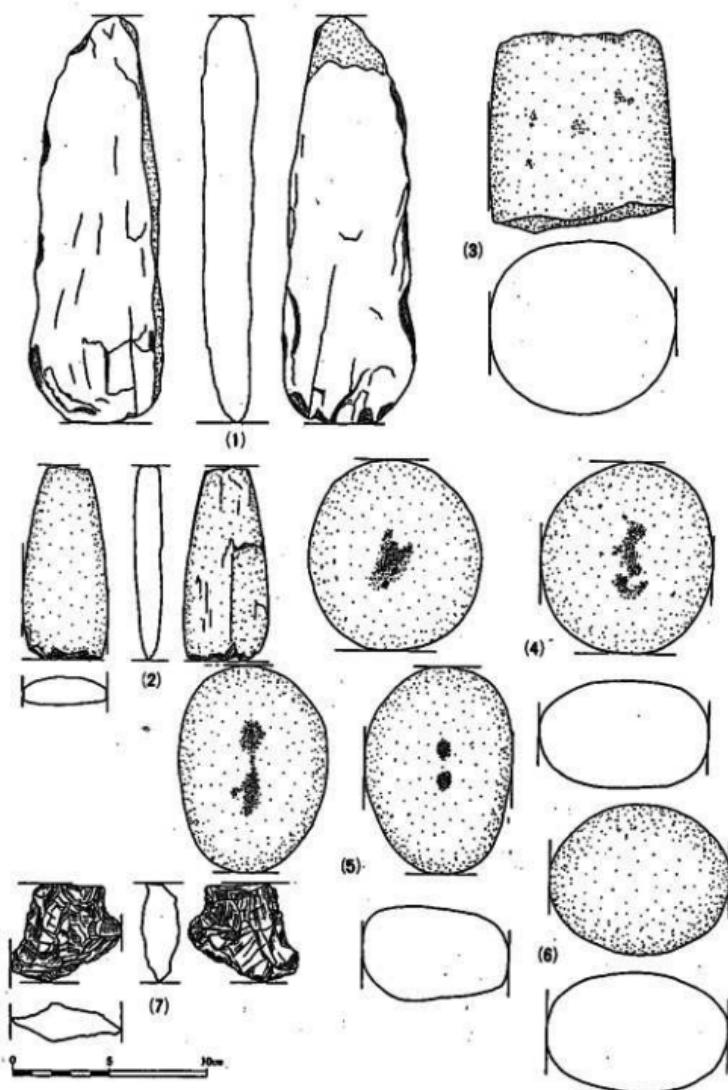
35図 10号住居址



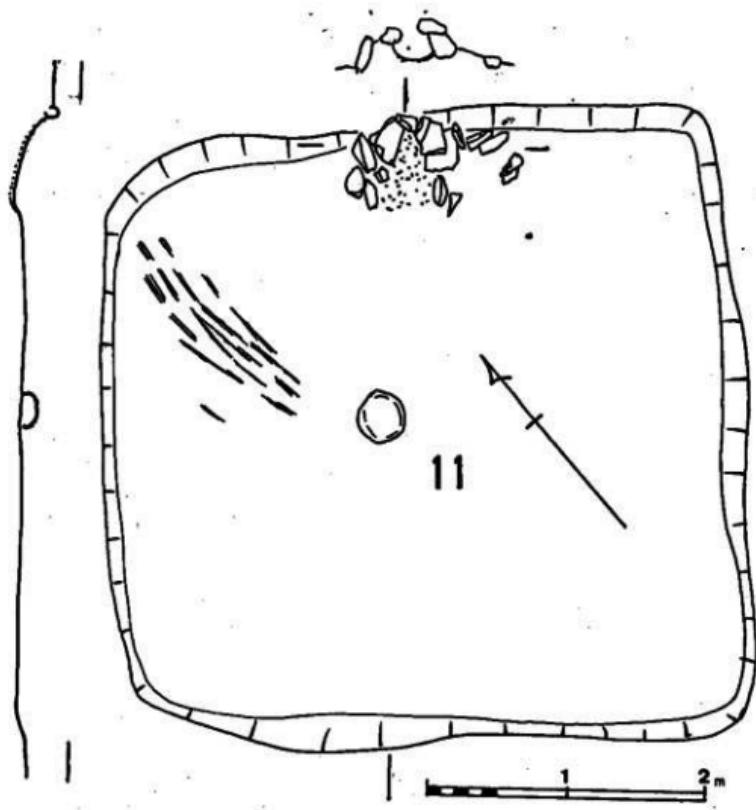
36図 10号住居址土器 (1)



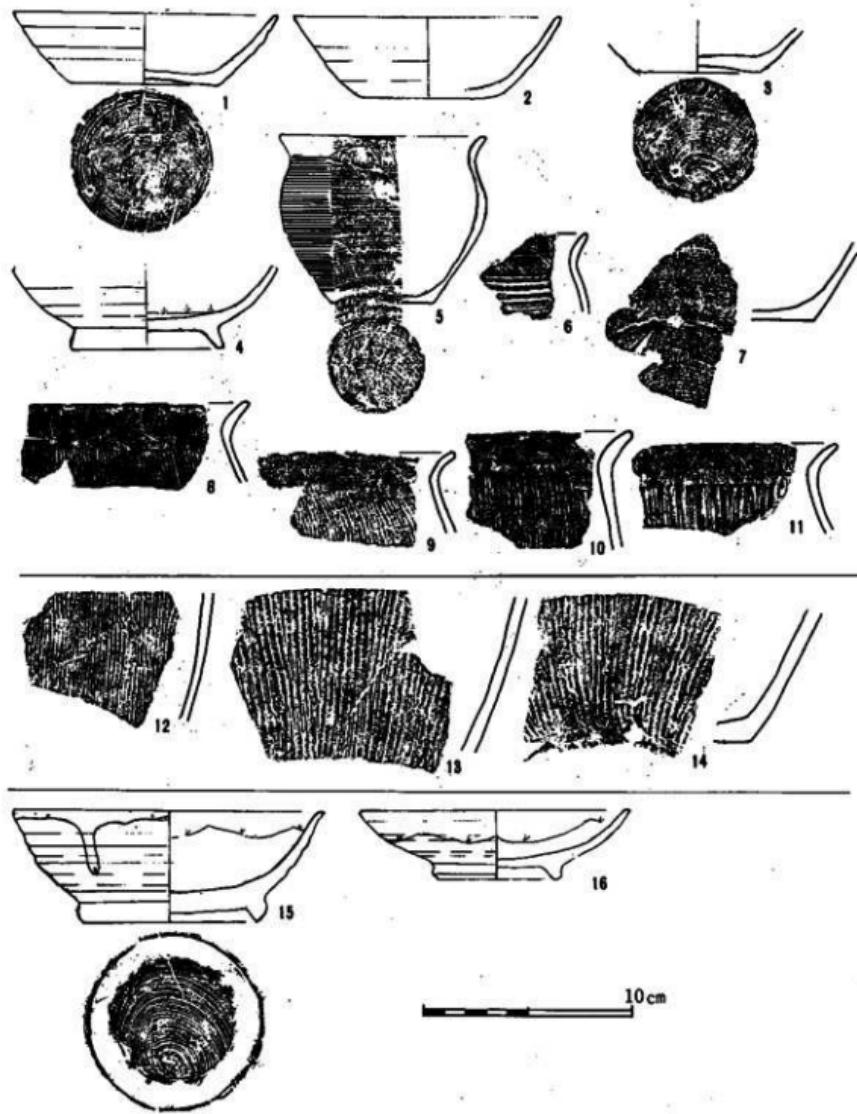
37図 10号住居址土器 (2)



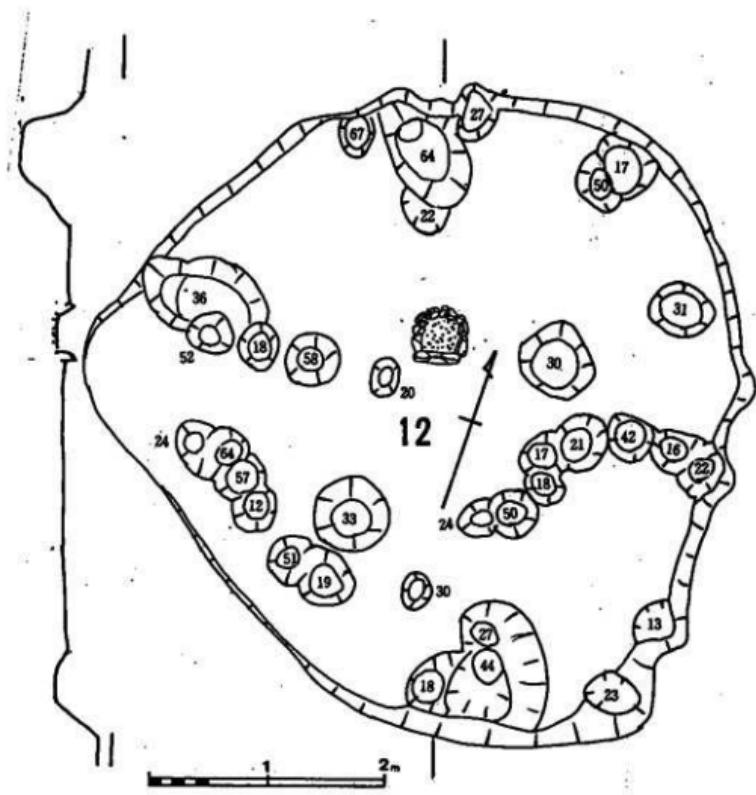
38図 10号住居址石器



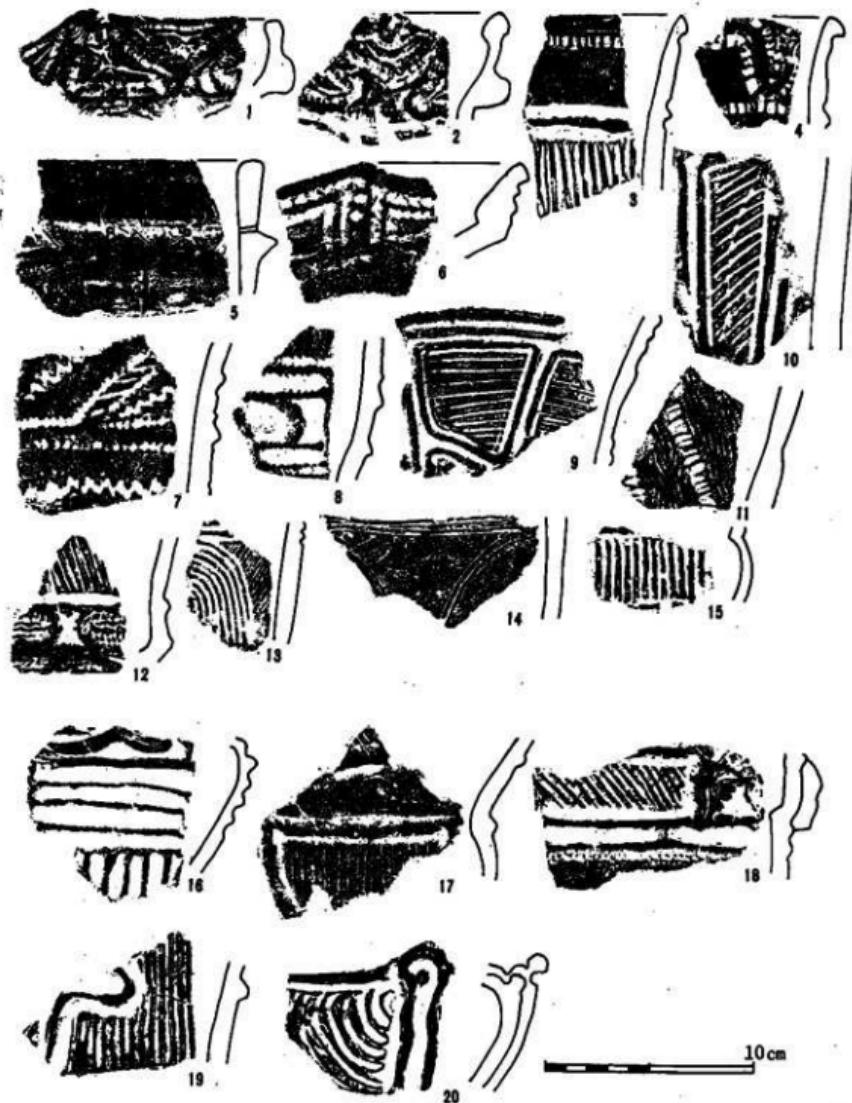
39図 11号住居址



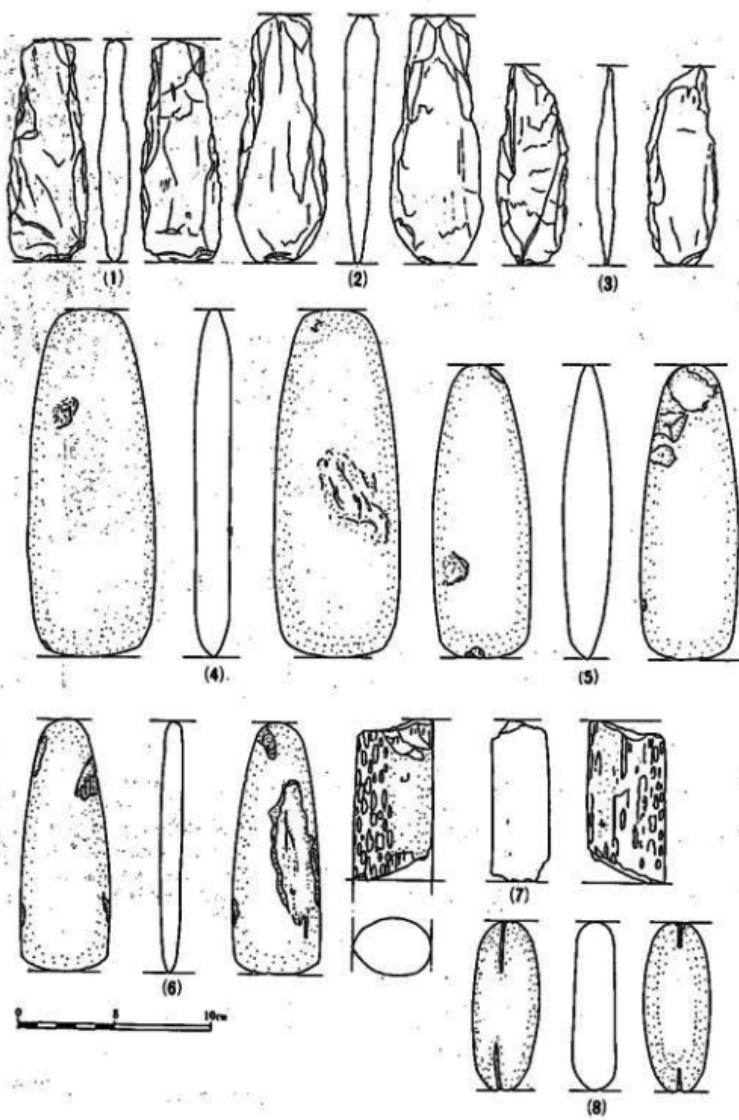
40図 11・16・38号住居址土器 (11住居址 1~11、16住居址12~14、38住居址15・16)



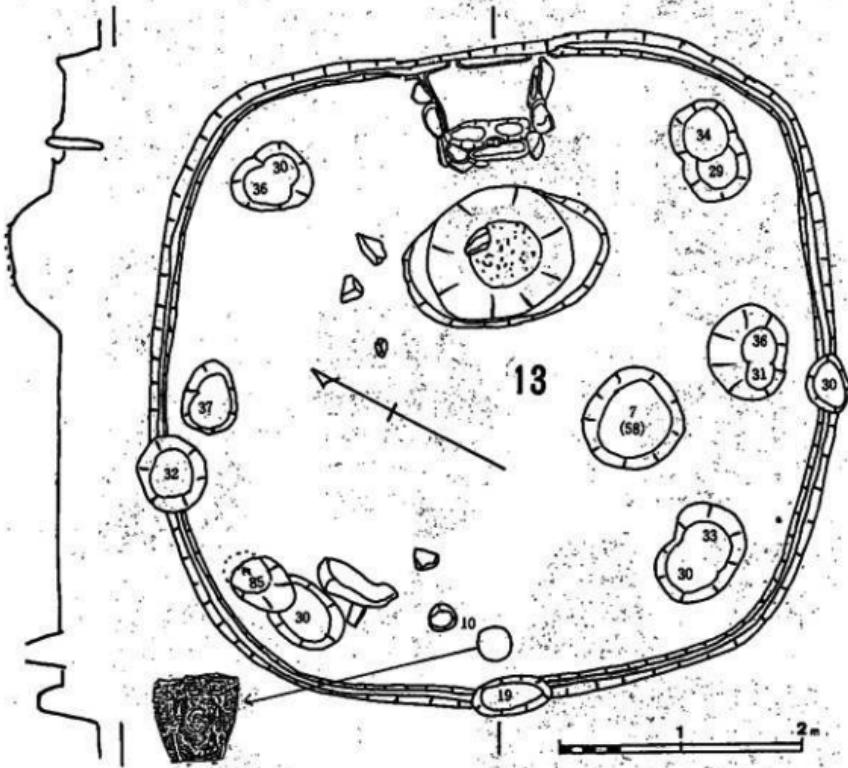
41図 12号住居址



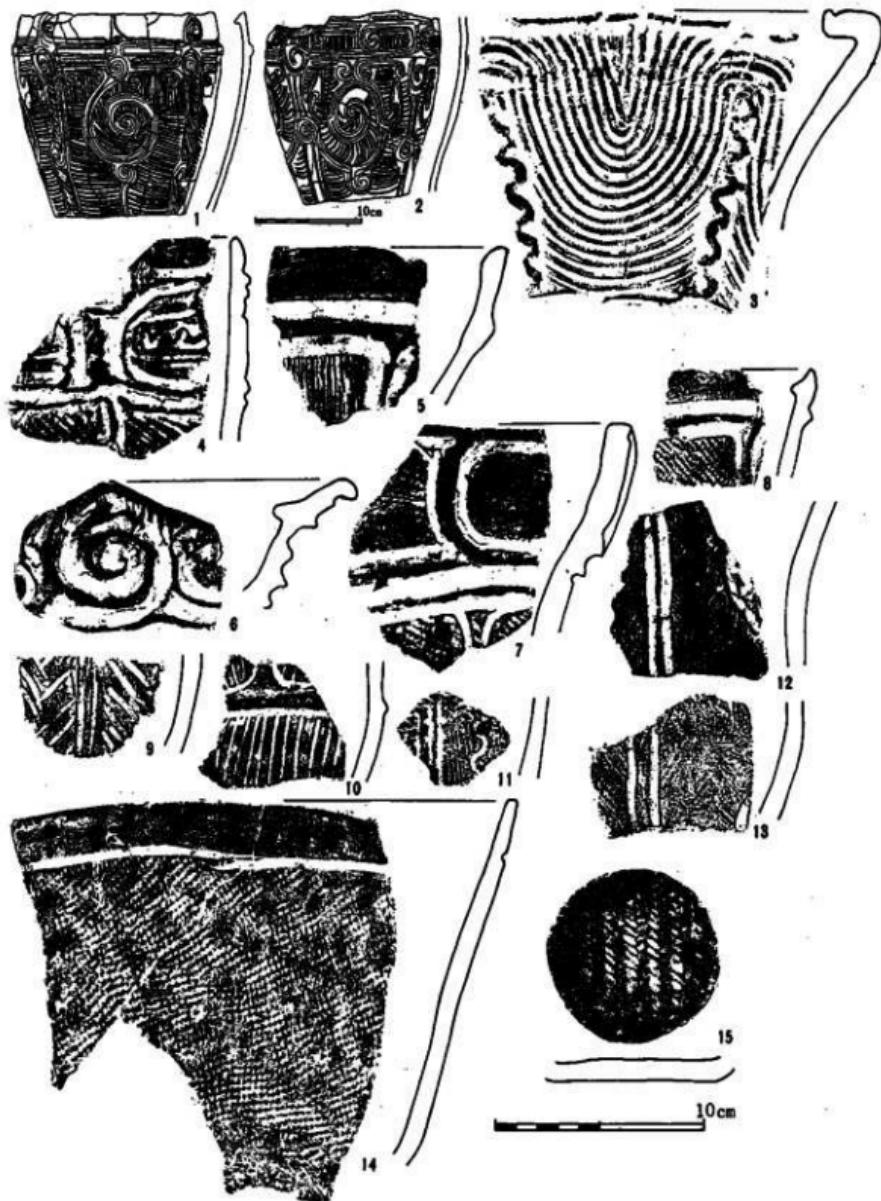
42圖 12号住居址土器



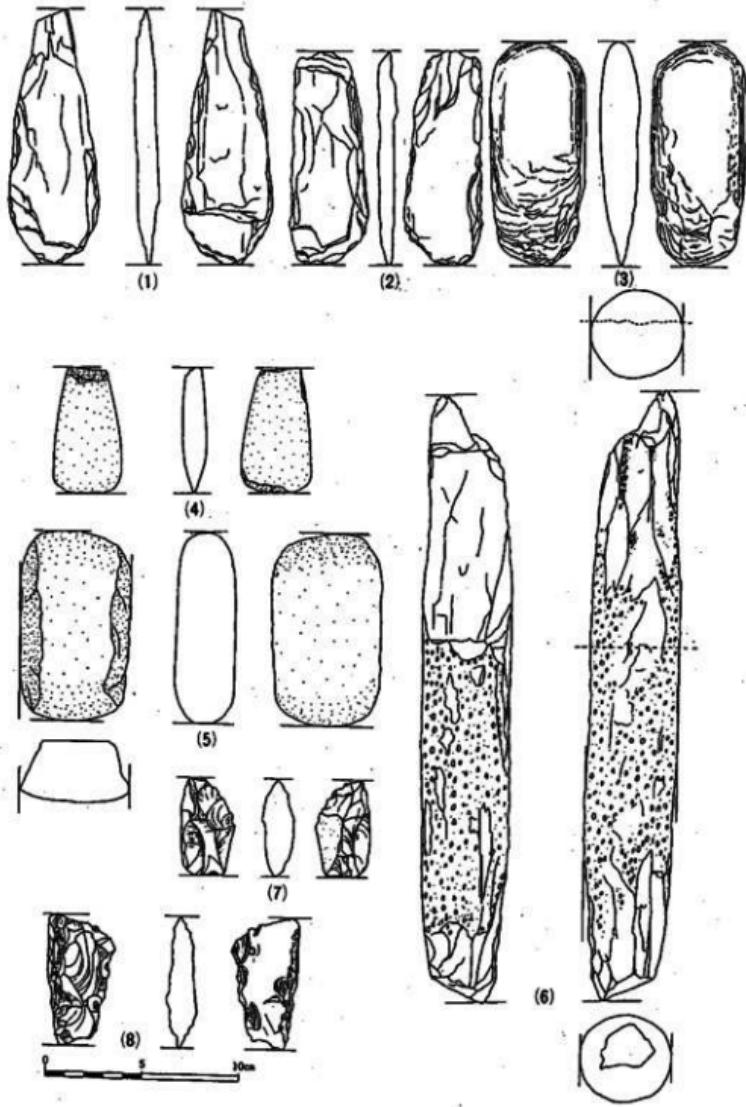
43図 12号住居址石器



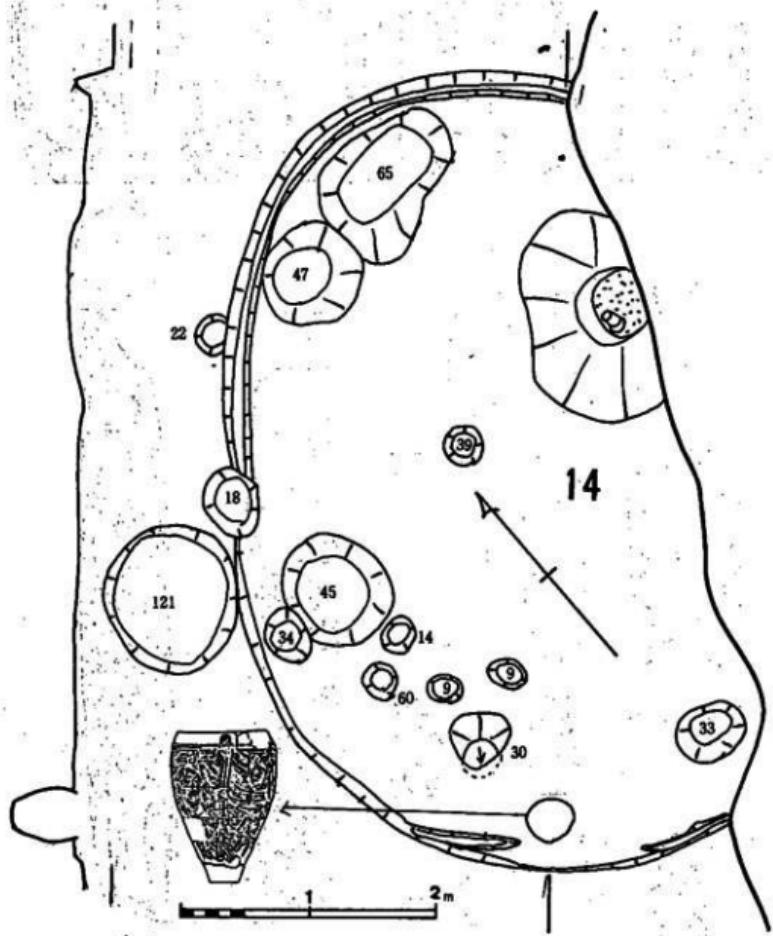
44図 13号住居址



45図 13号住居址土器



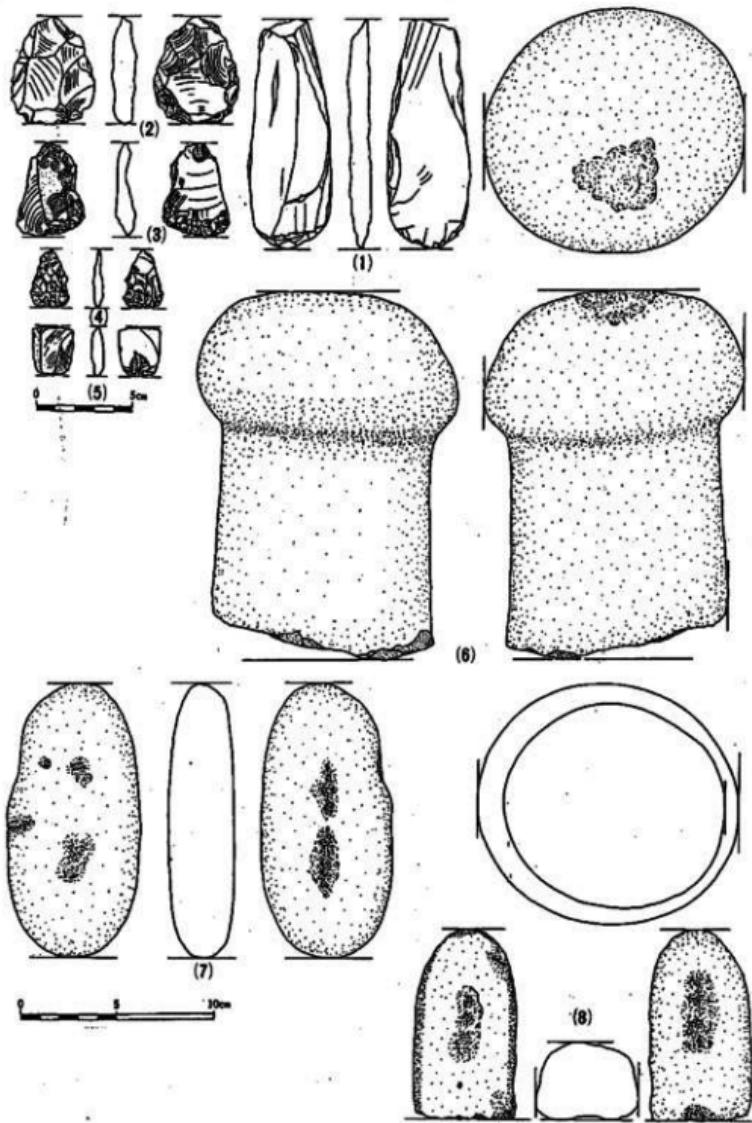
46図 13号住居址石器



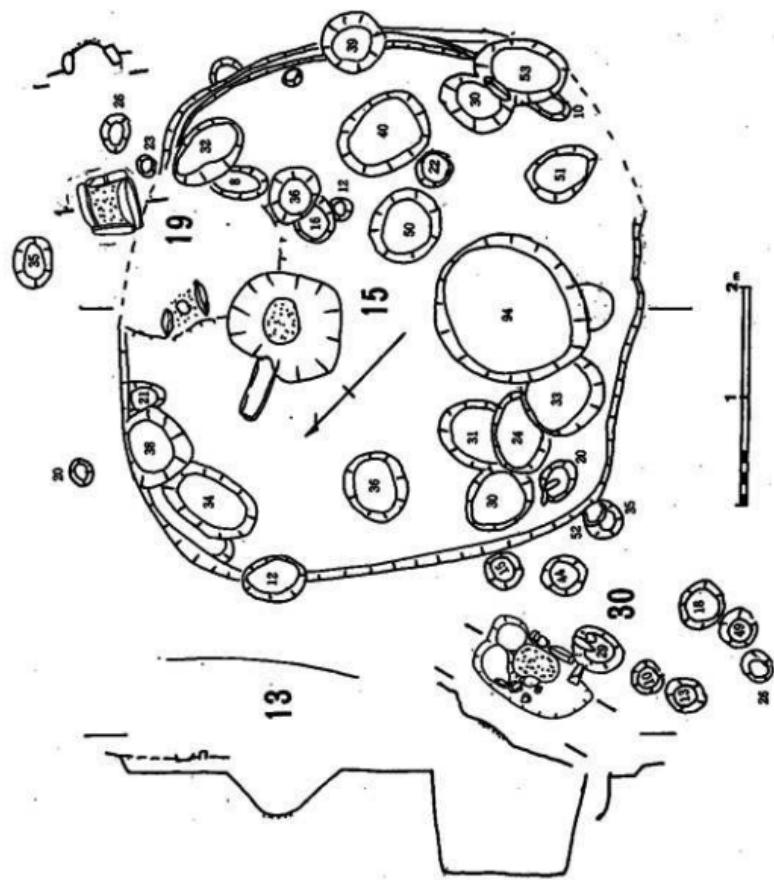
47図 14号住居址



48图 14号住居址土器



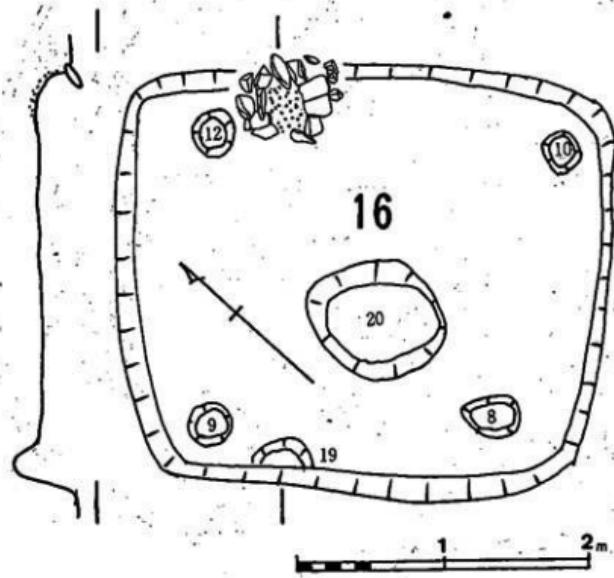
49図 14号住居址石器



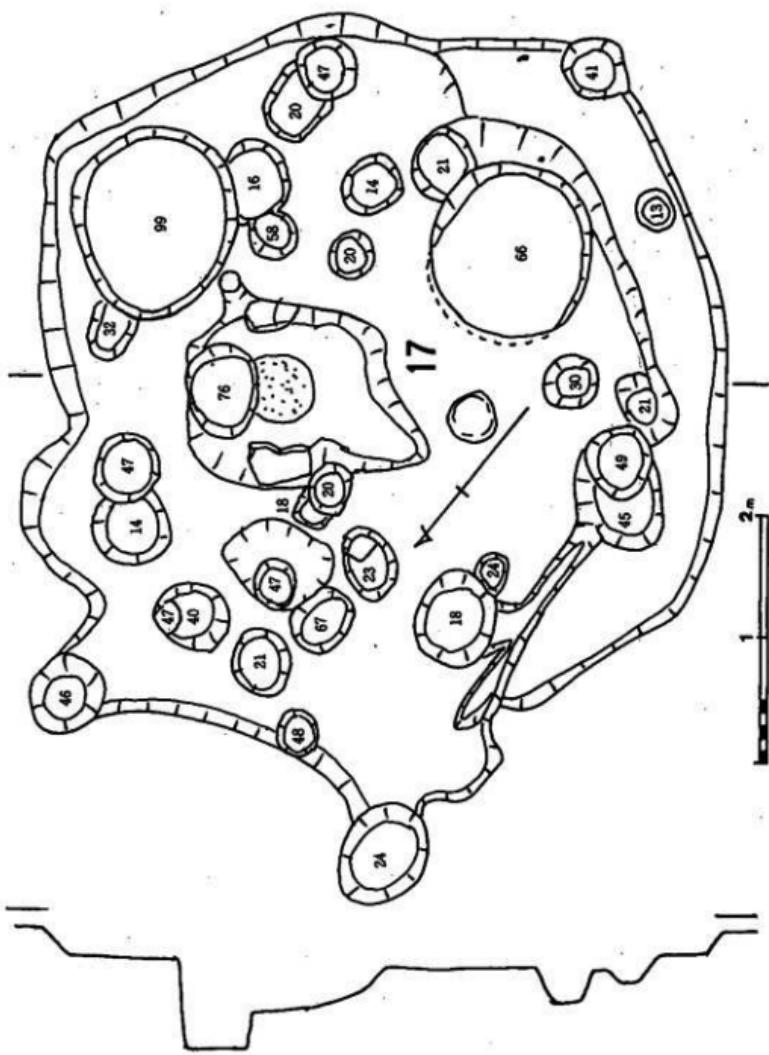
50圖 15・19・30号住居址



51図 15号住居址土器



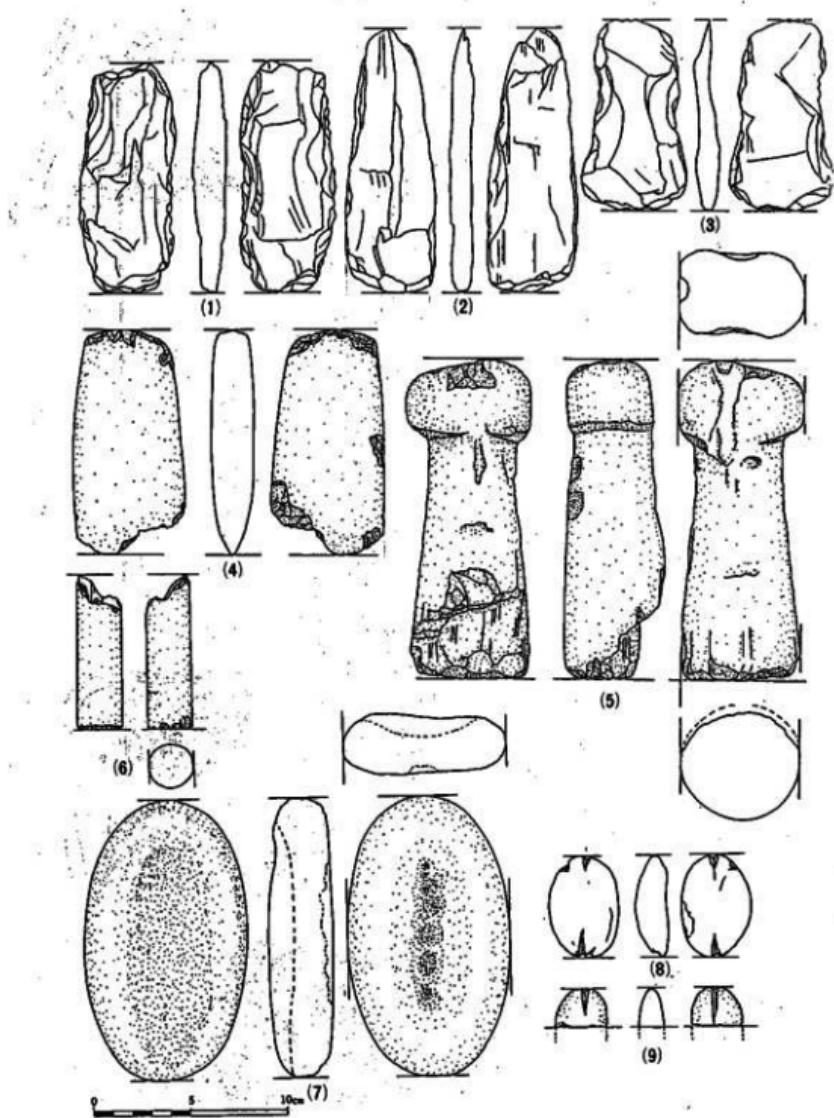
52図 16号住居址



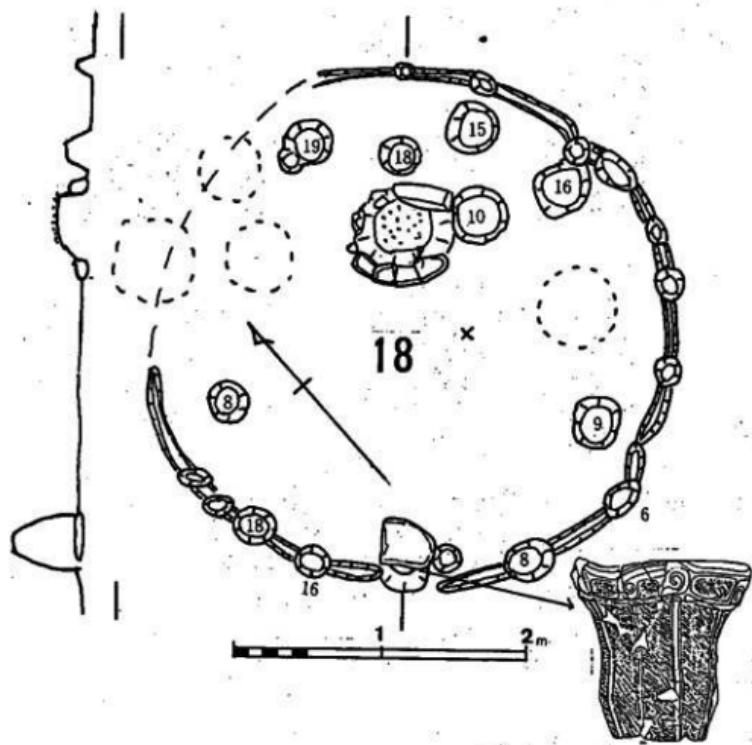
53図 17号住居址



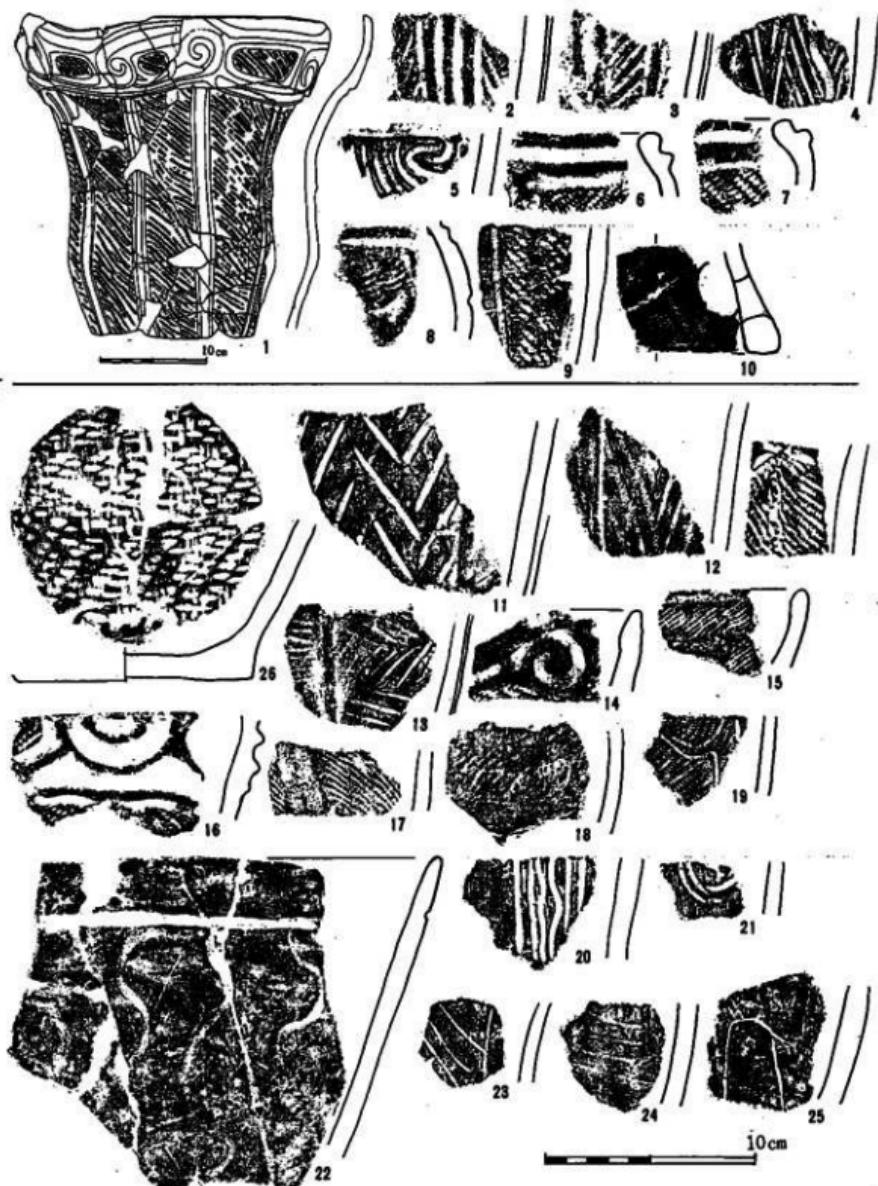
54図 17号住居址土器



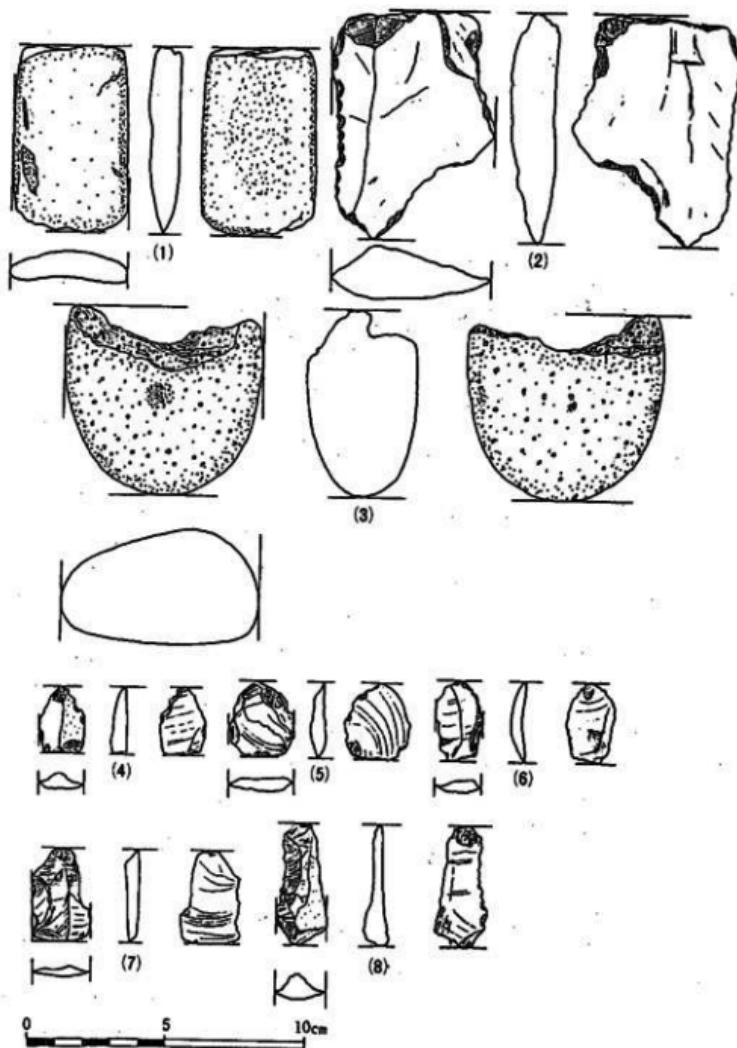
55図 17号住居址石器



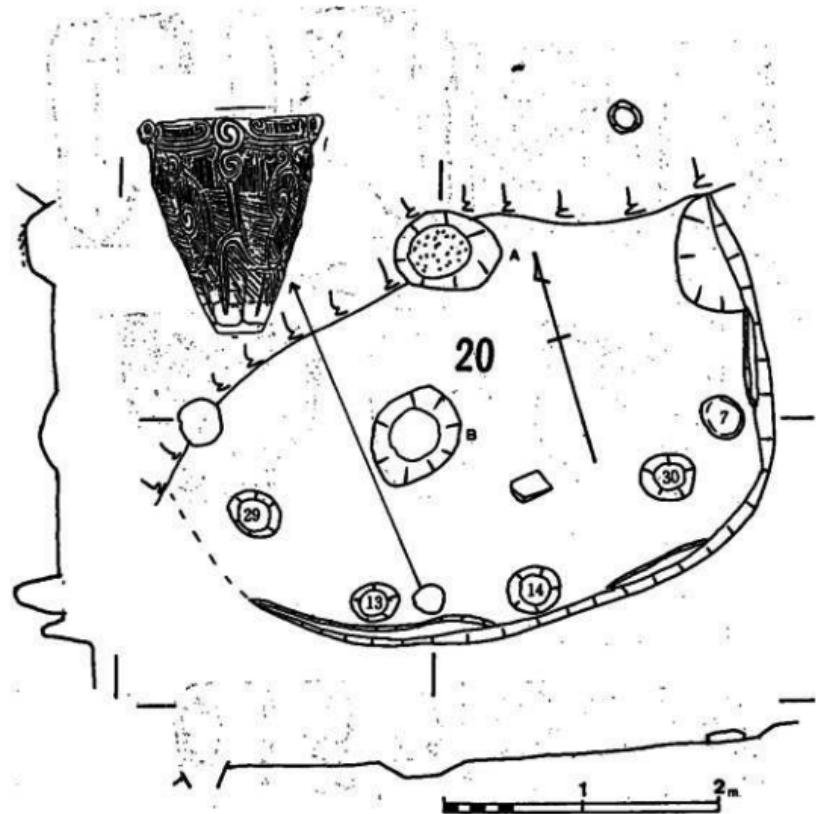
56図 18号住居址



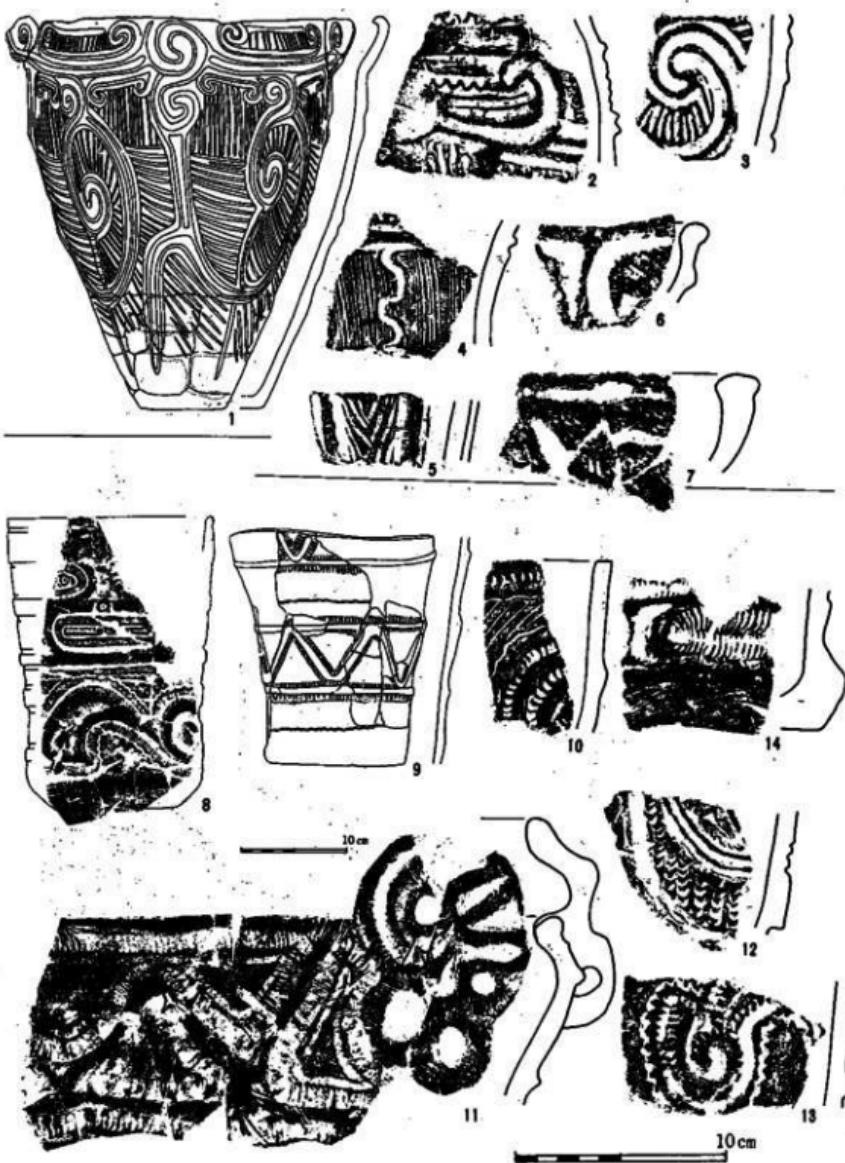
57図 18・19号住居址土器 (18号住居址1~10、19号住居址11~26)



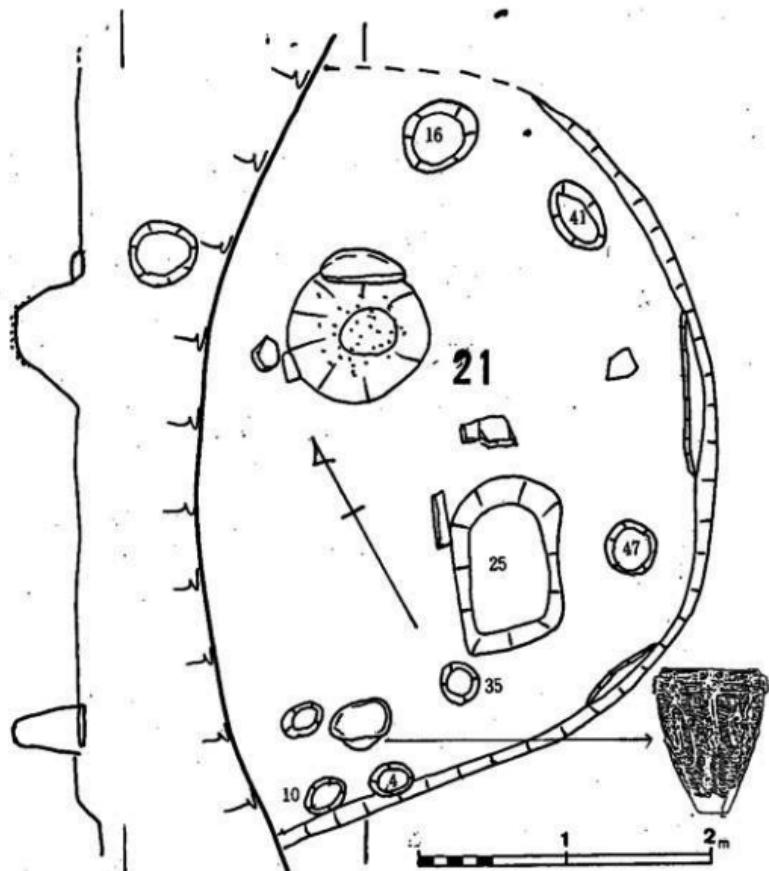
58图 18号住居址石器



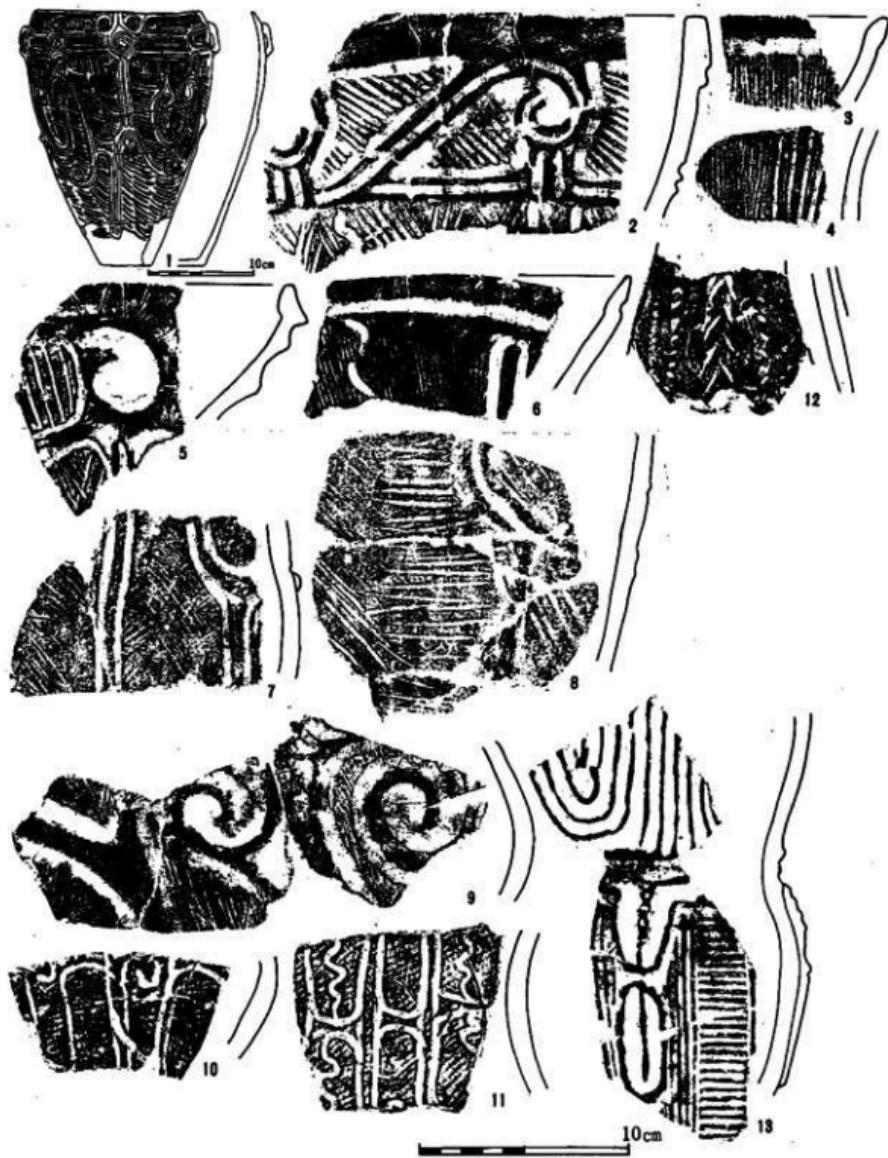
59図 20号住居址



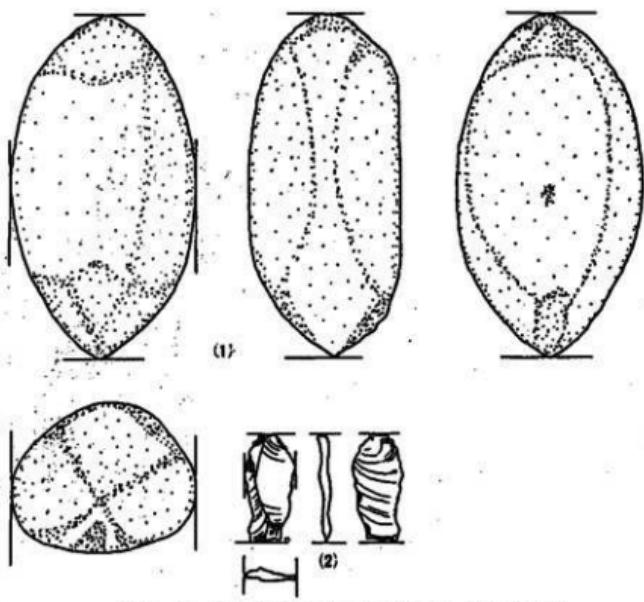
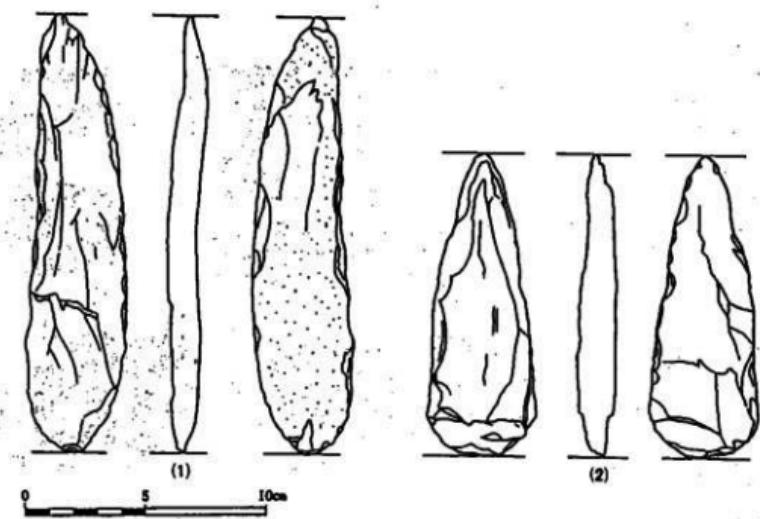
60図 20・22号住居址土器 (20住居址 1～7、22住居址 8～14)



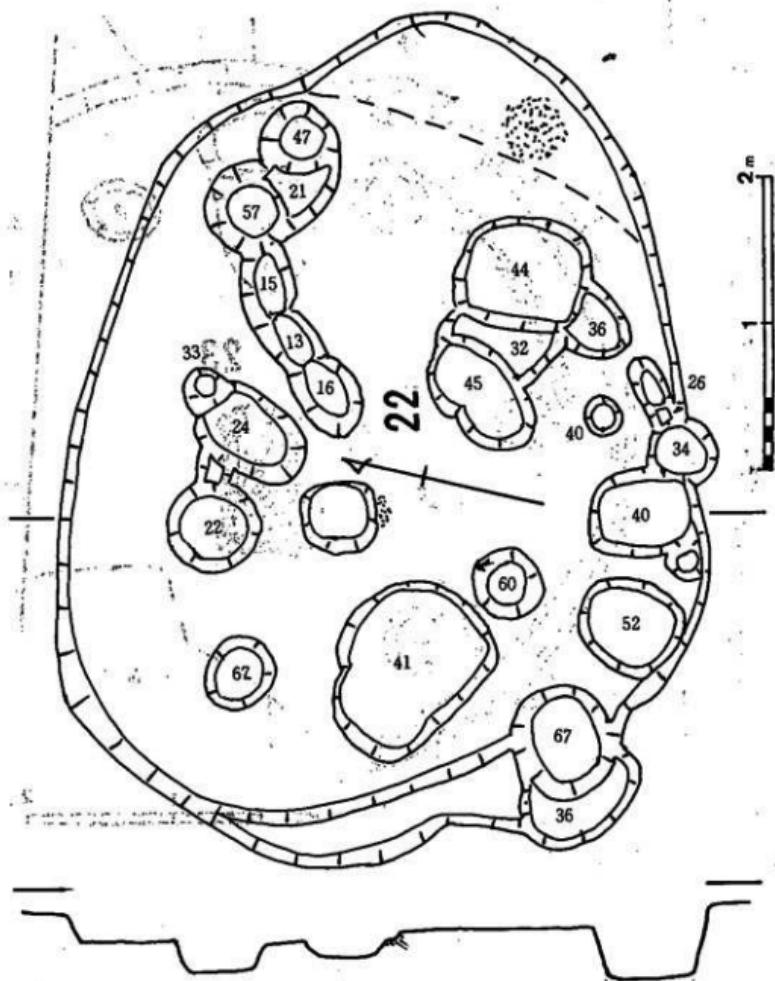
61図 21号住居址



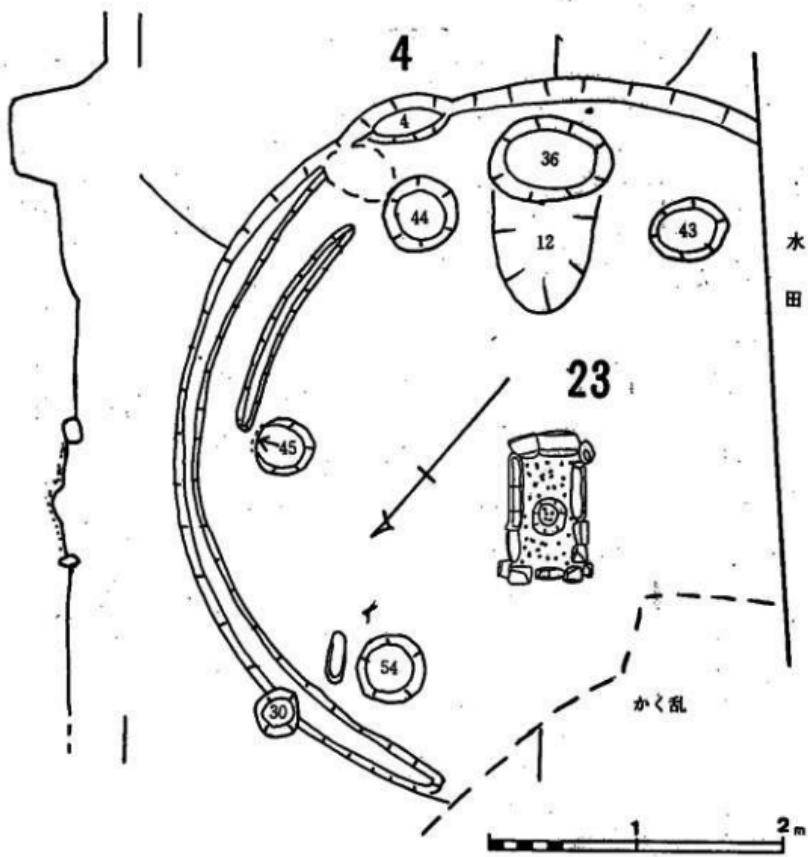
62図 21号住居址土器



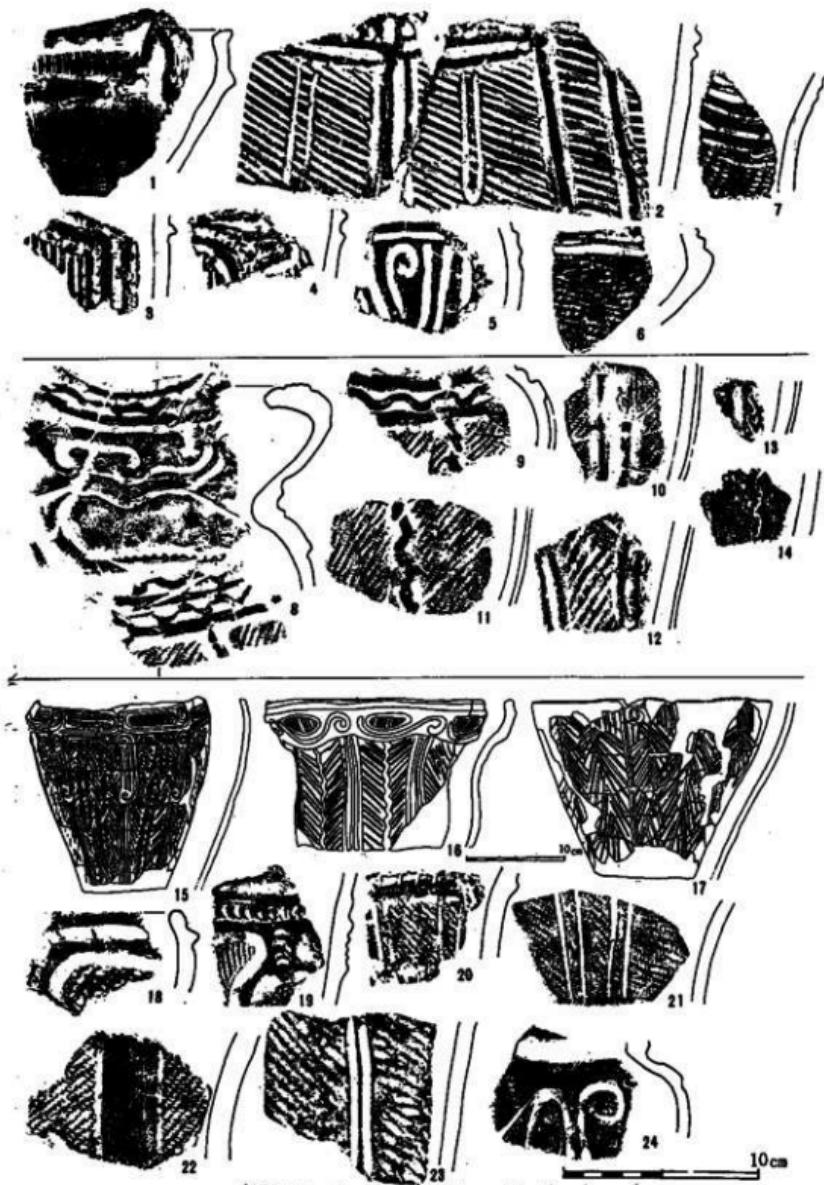
63圖 21・25號住居址石器（上21號居址、下25號居址）



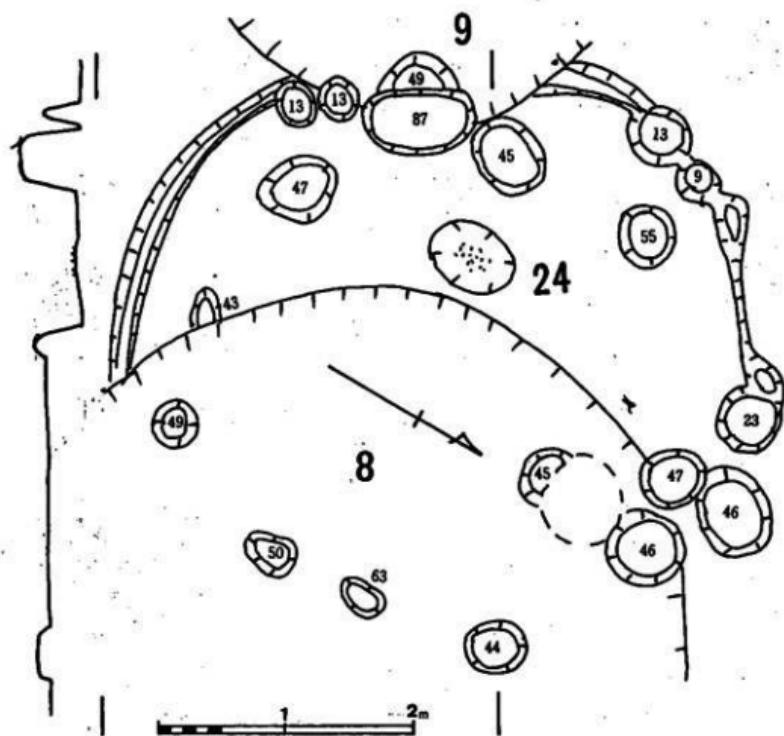
64図 22号住居図



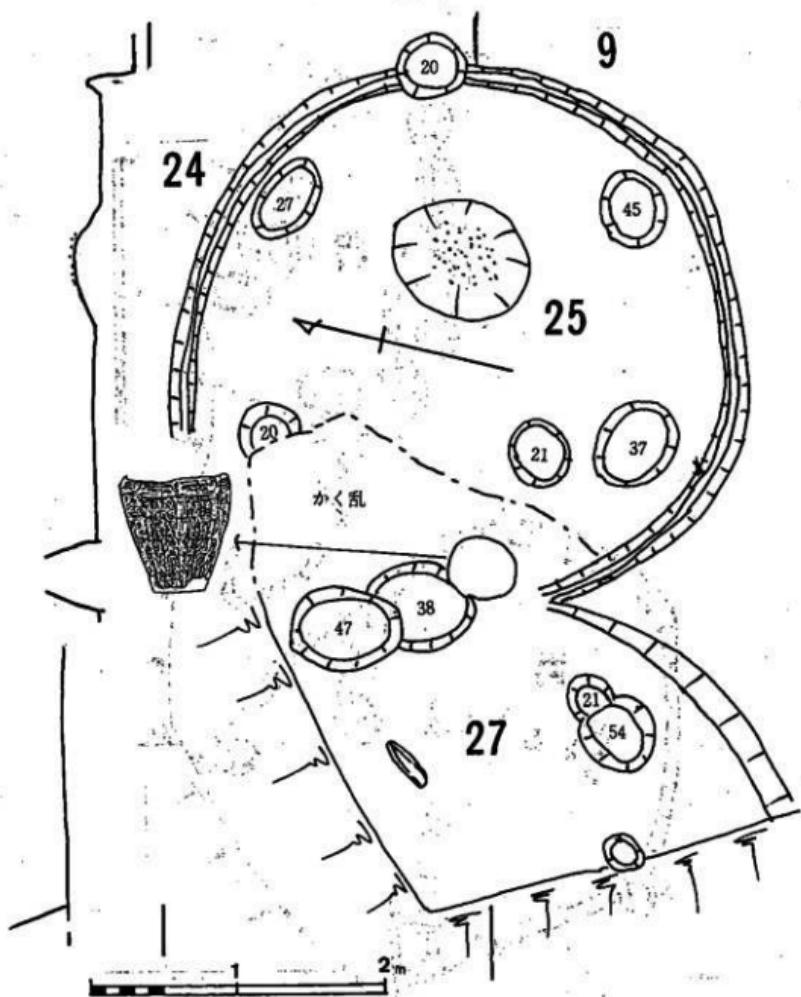
65図 23号住居址



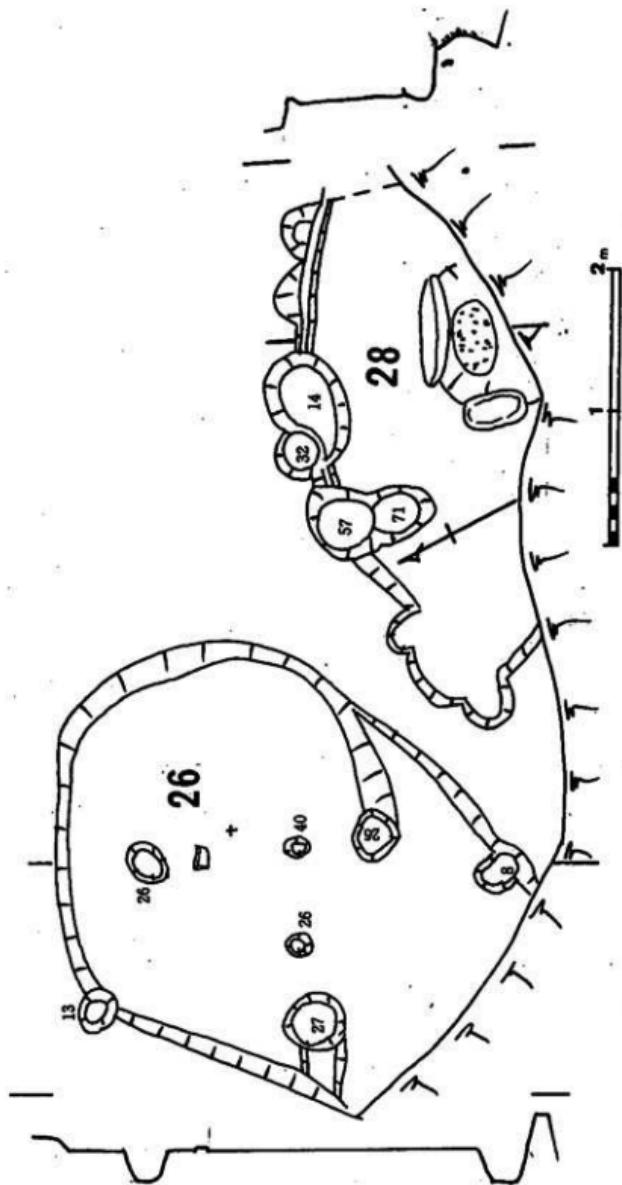
66図 23・24・25号住居址土器 (23住居址 1～7、24住居址 8～14、25住居址15～24)



67図 24号住居址



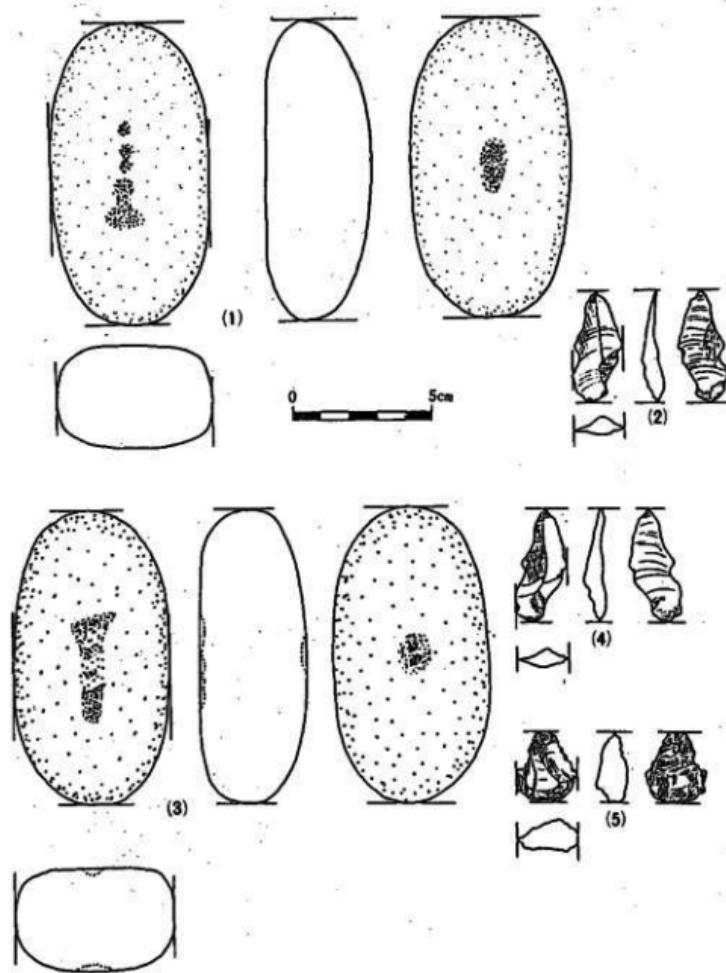
68図・25・27号住居址



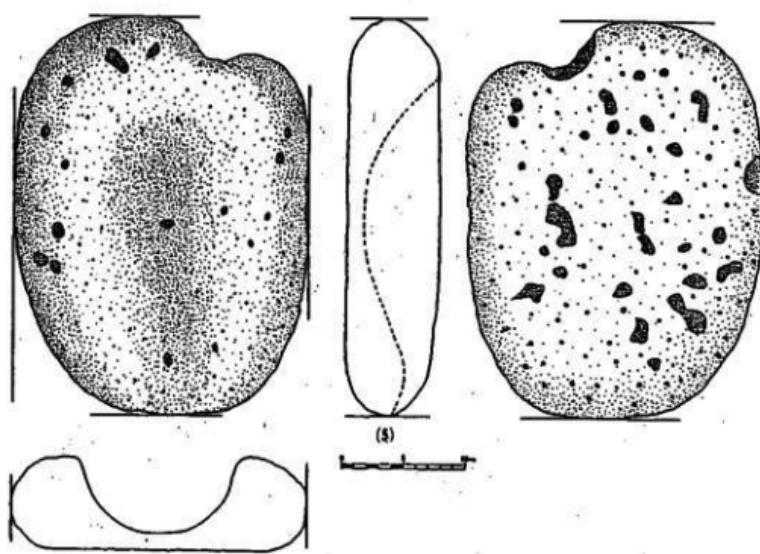
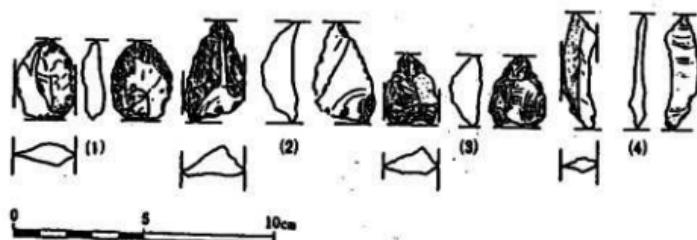
69图 26·28号住居址



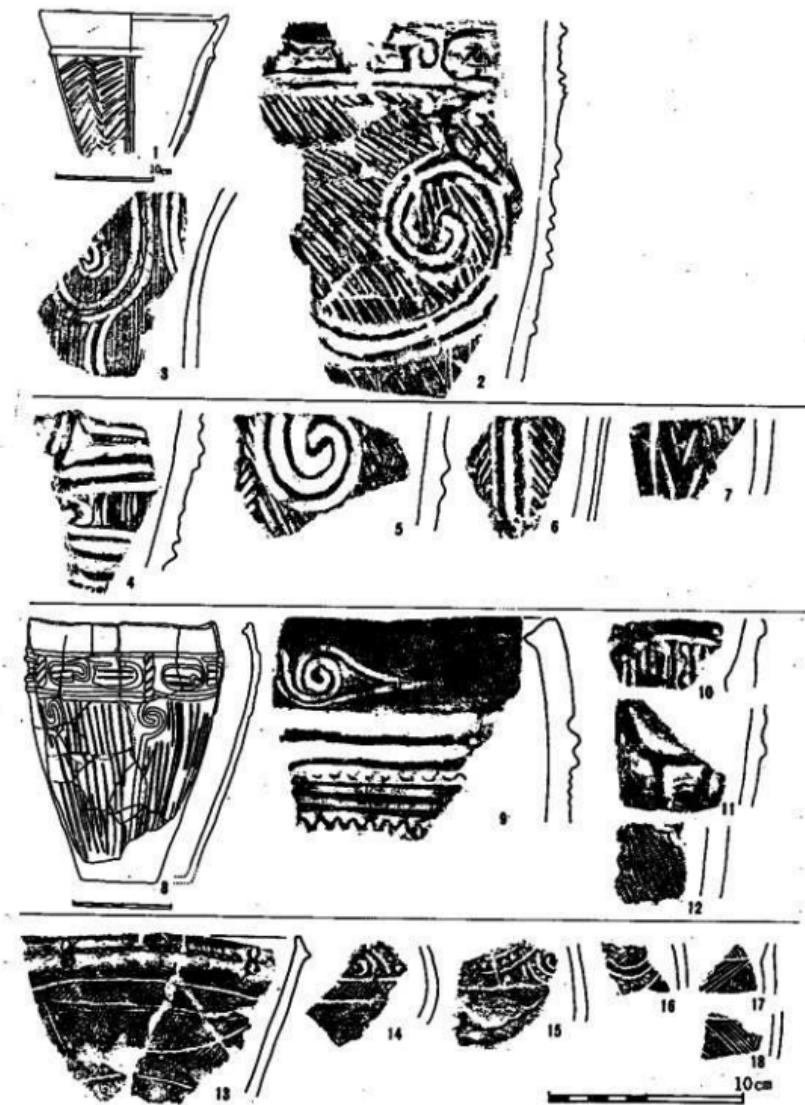
70図 26・27号住居址土器 (26住居址 1~6、27住居址 7~10)



71図 26号住居址石器

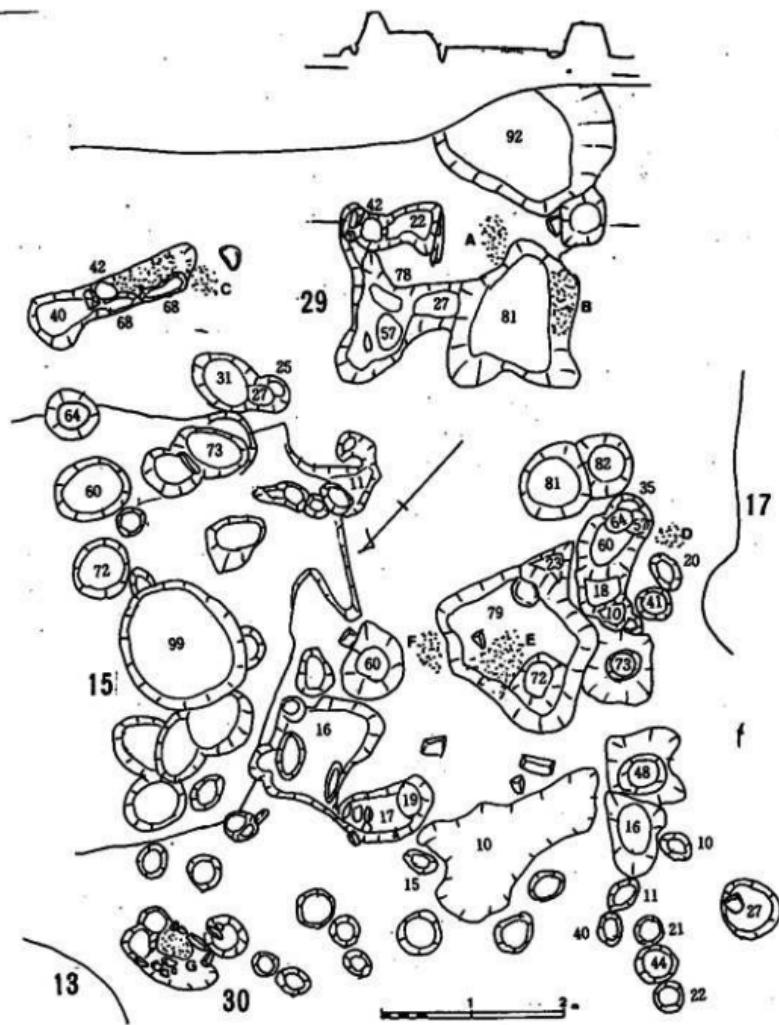


72図 27号住居址石器

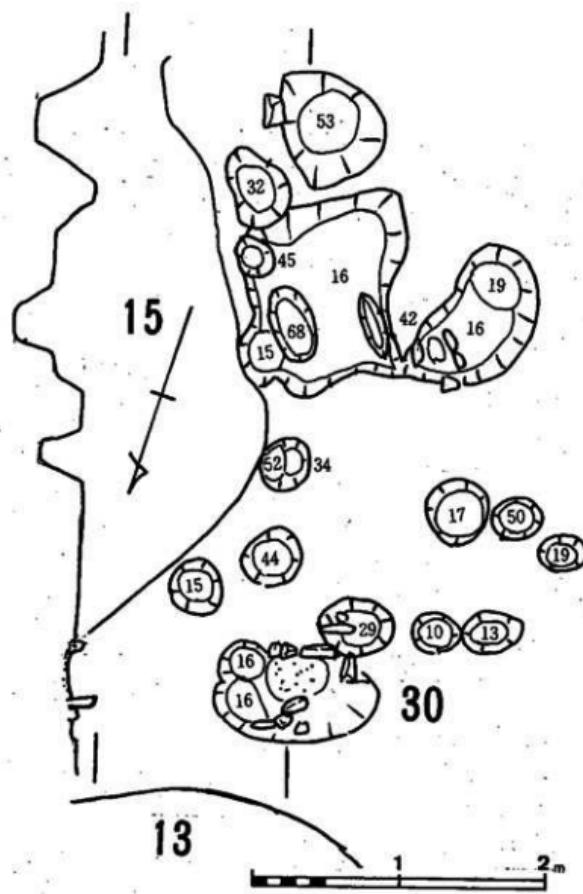


73図 28・29・35・36号住居址土器

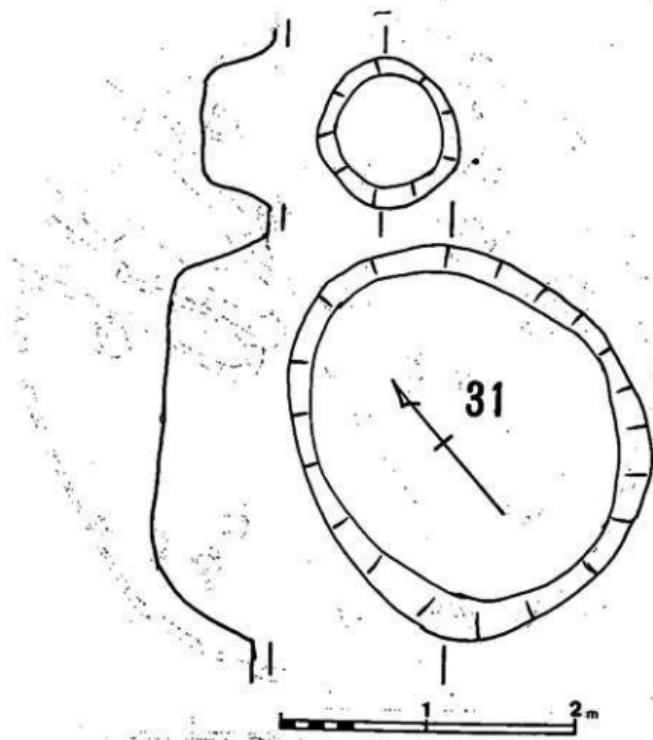
(28住居址 1~3、29住居址 4~7、35住居址 8~12、36住居址 13~18)



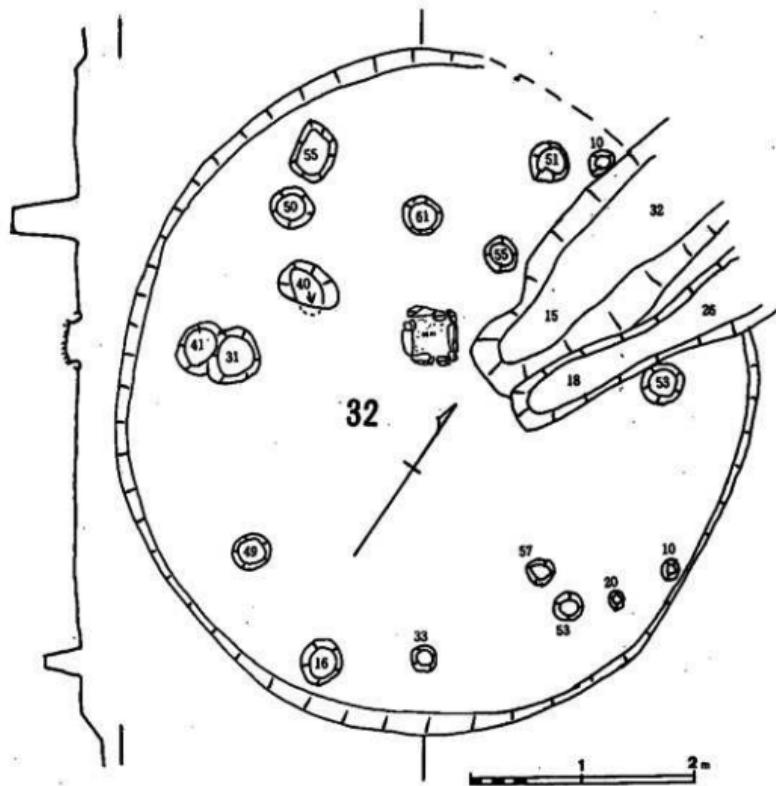
74図 29号住居址・焼土群



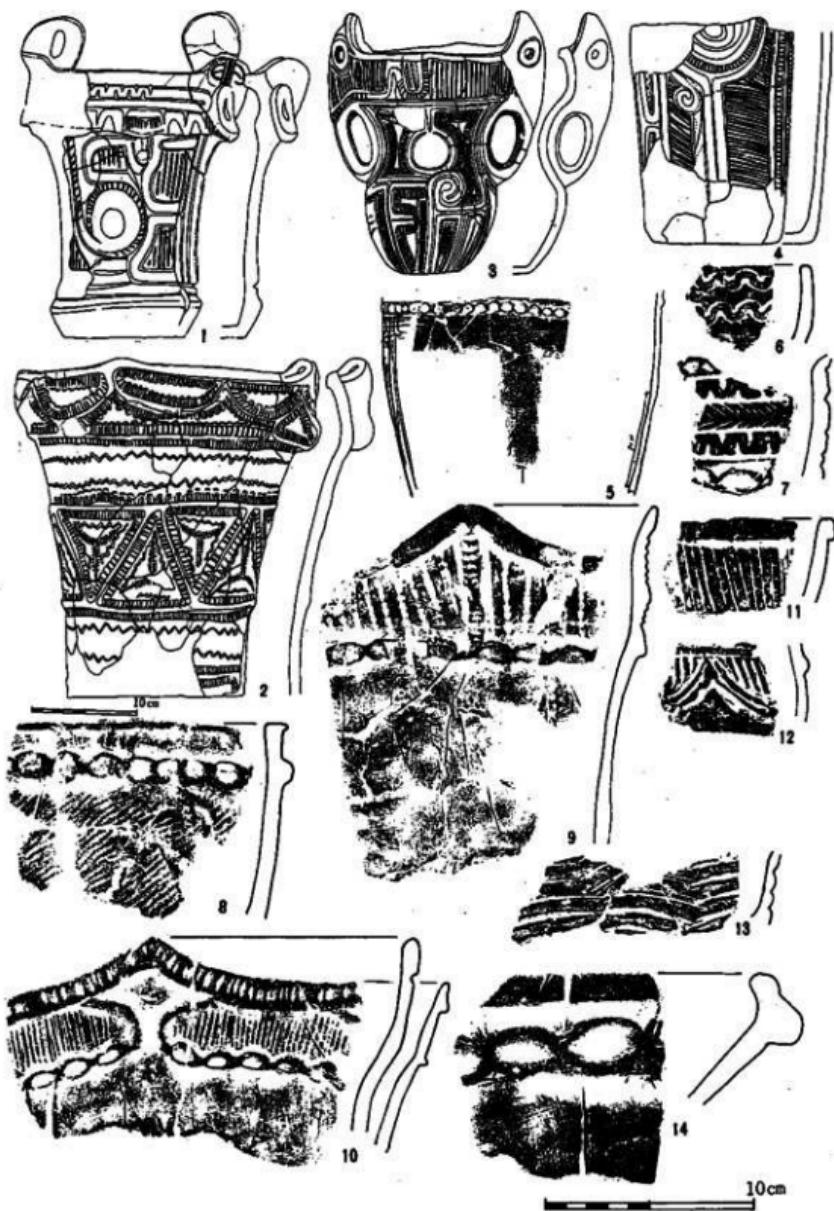
75図 30号住居址



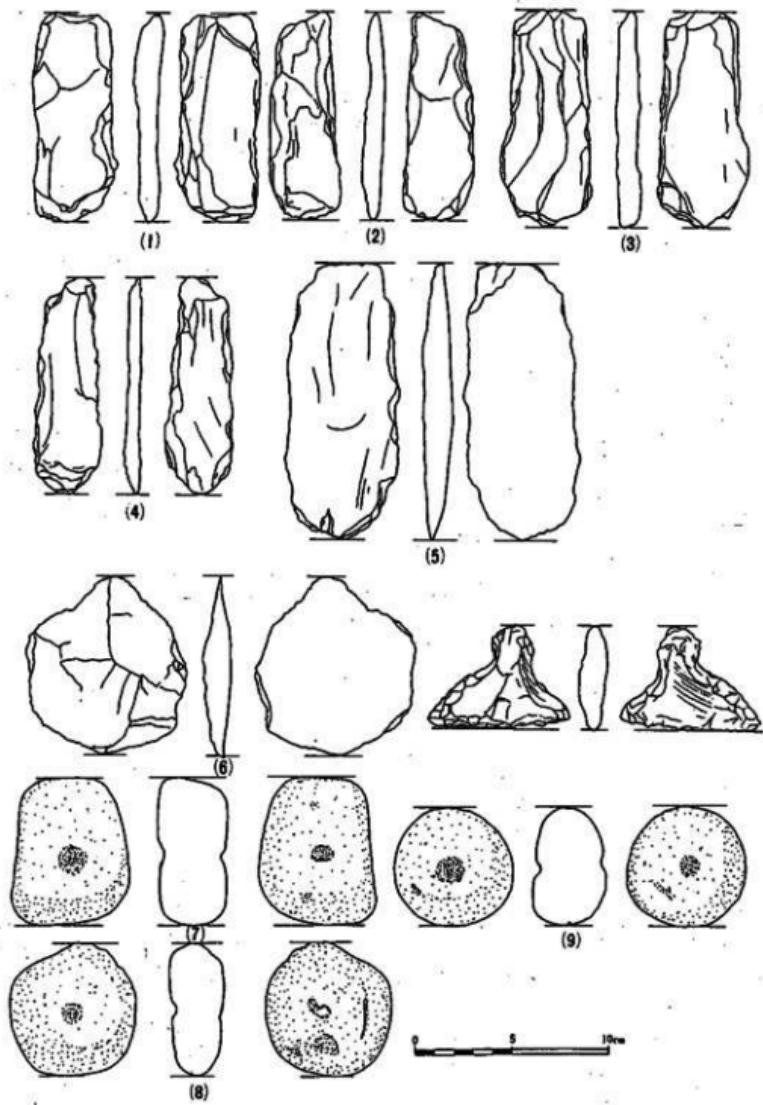
76図 31号住居址



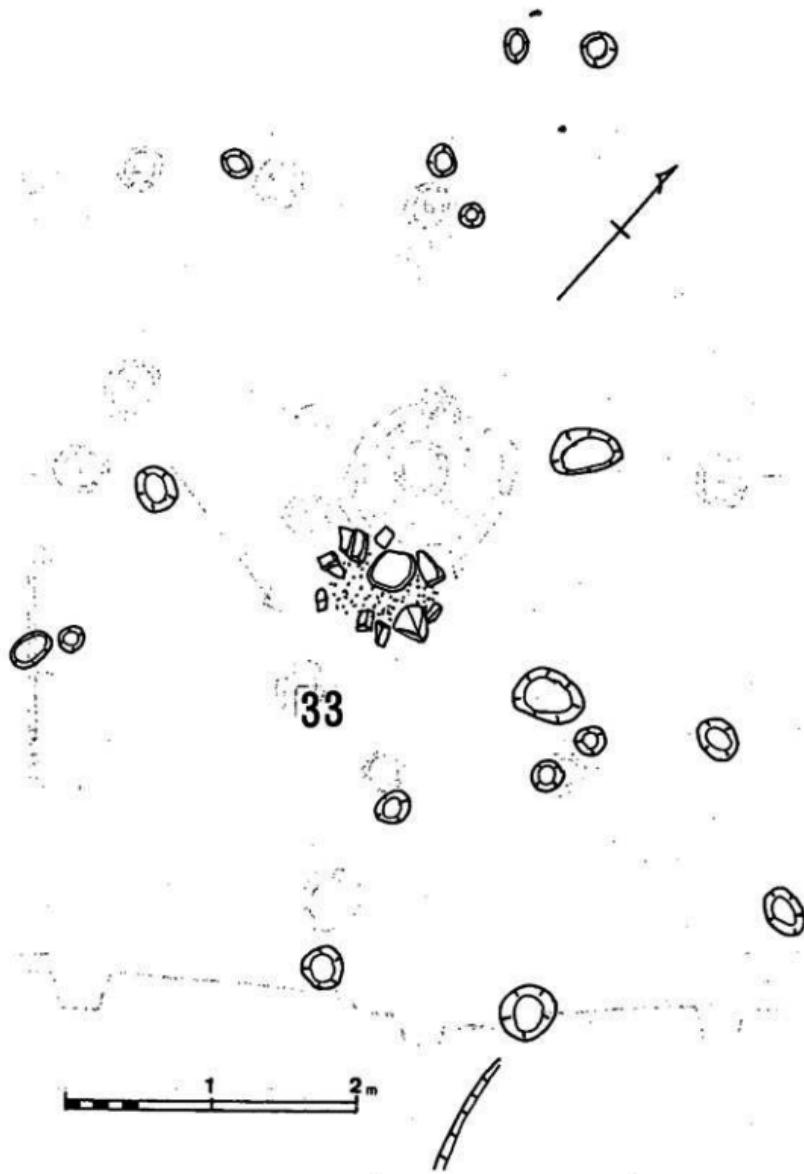
77图 32号住居址



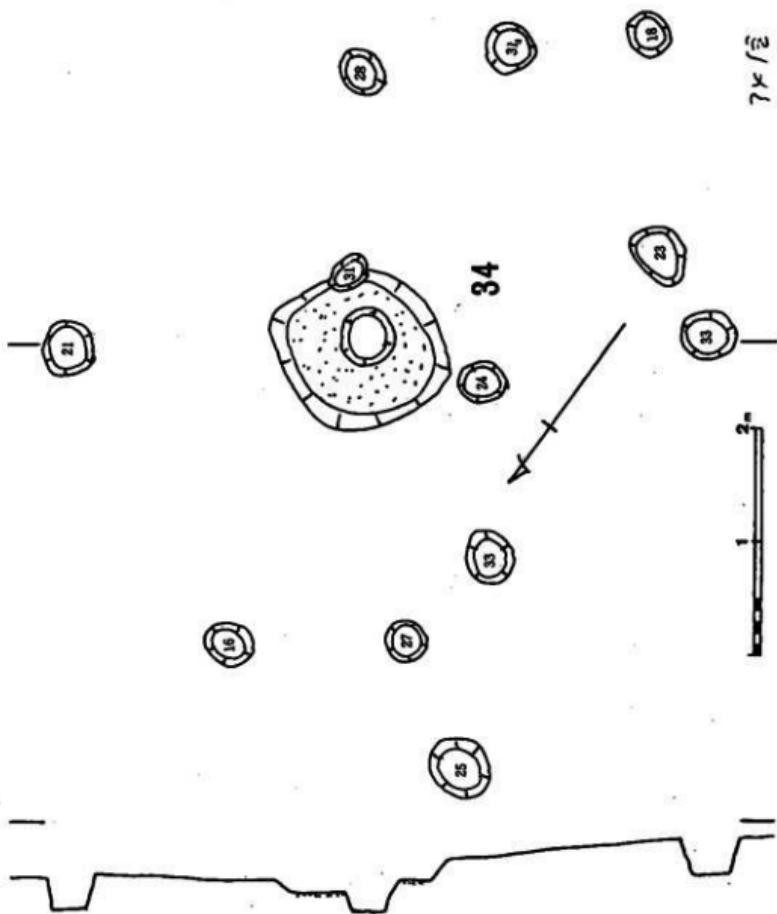
78図 32号住居址土器



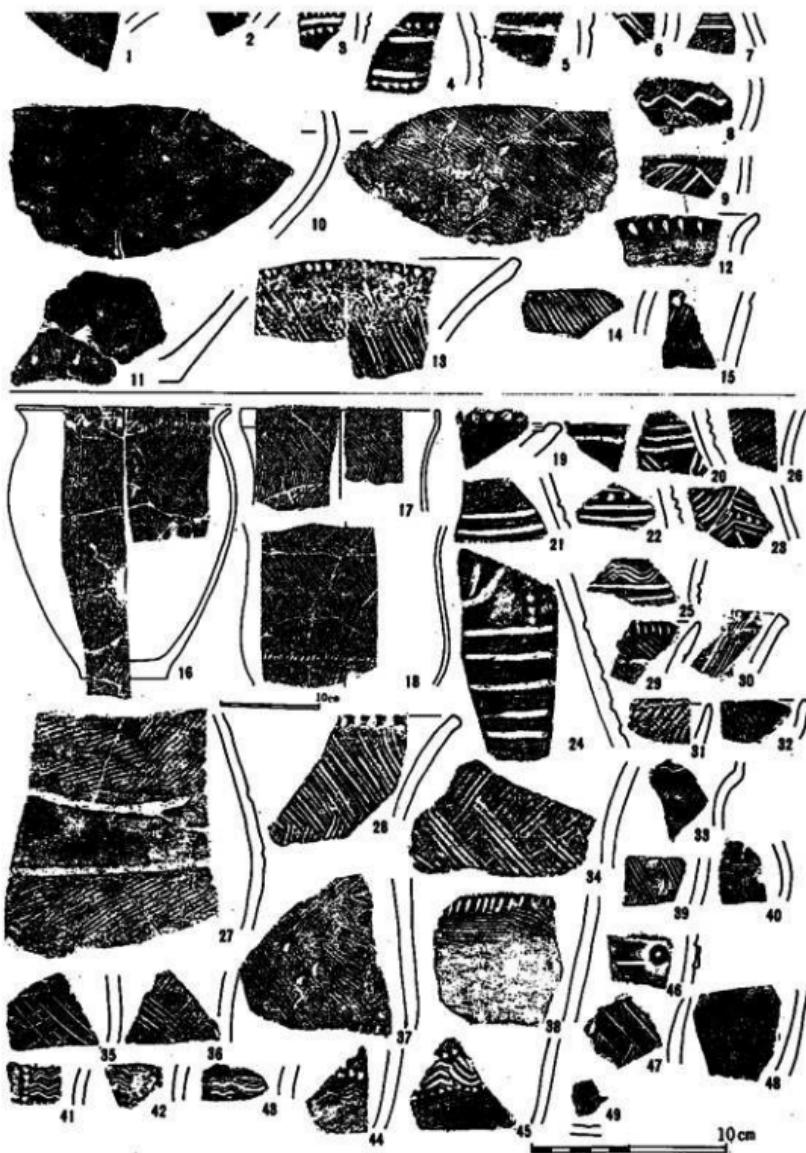
79図 32号住居址石器



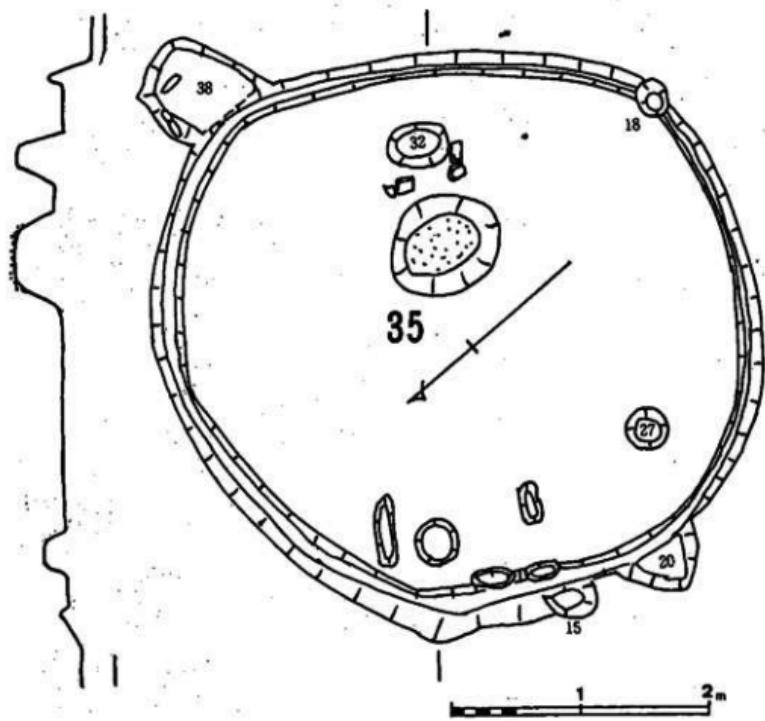
80図 33号住居址



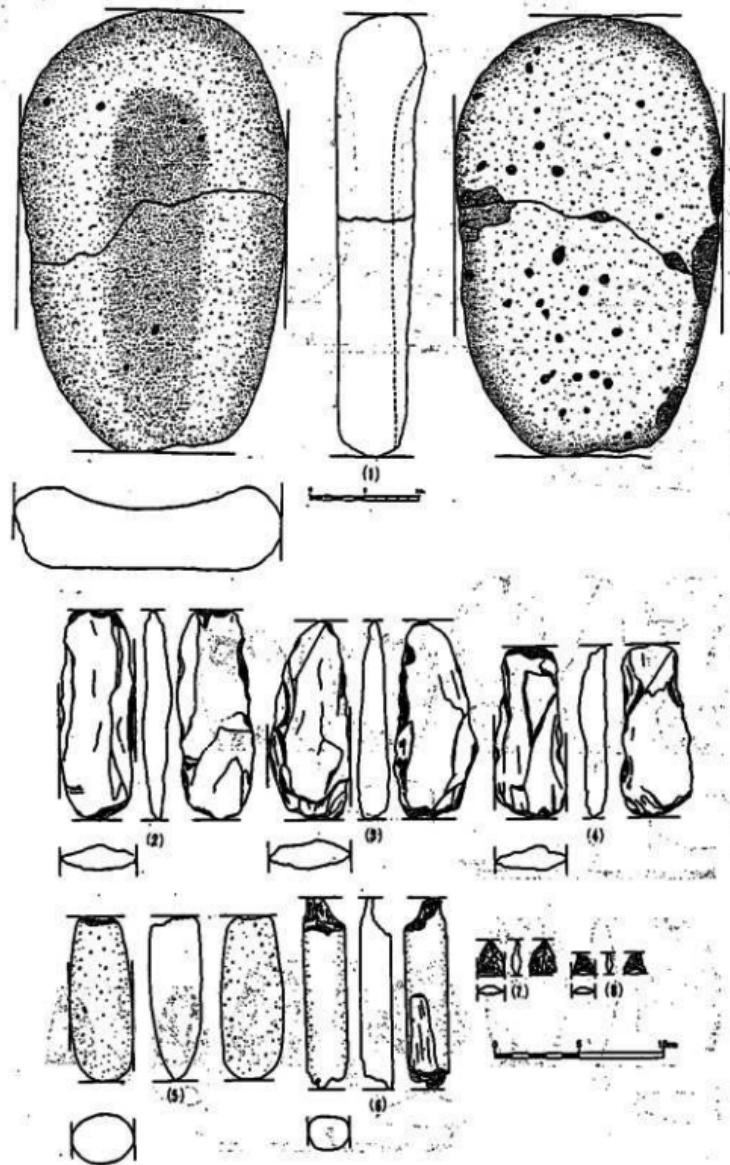
81図 34号住居址



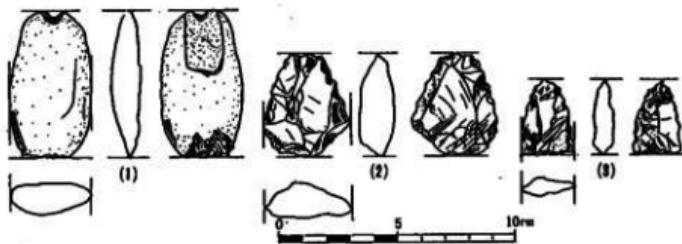
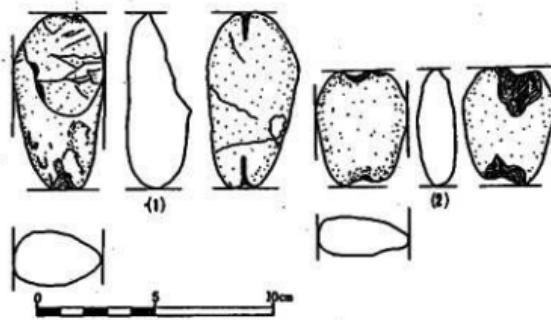
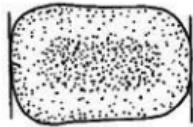
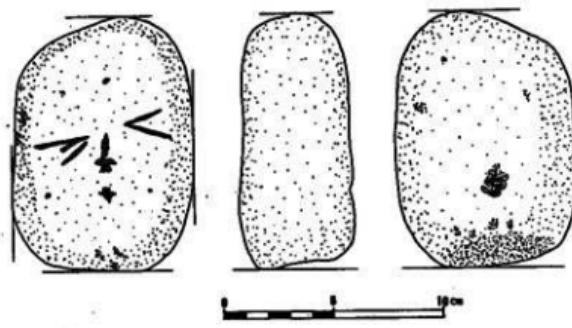
82图 34·37号住居址土器 (34住居址 1~15、37住居址16~49)



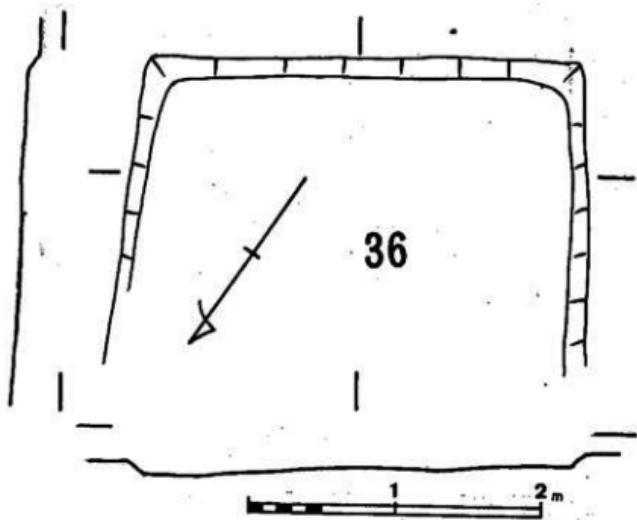
83図 35号住居址



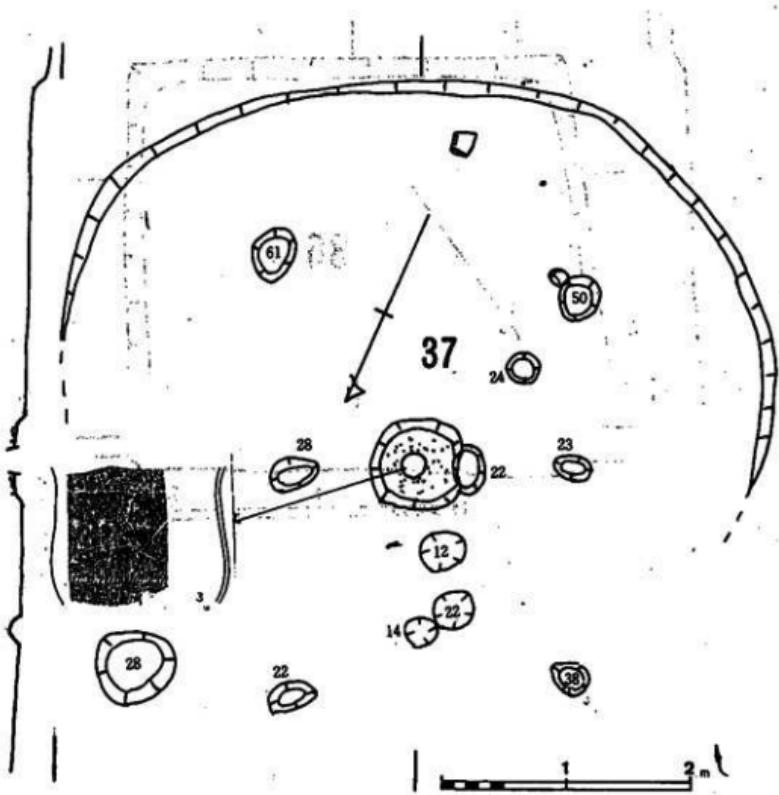
84圖 35號住居址石器



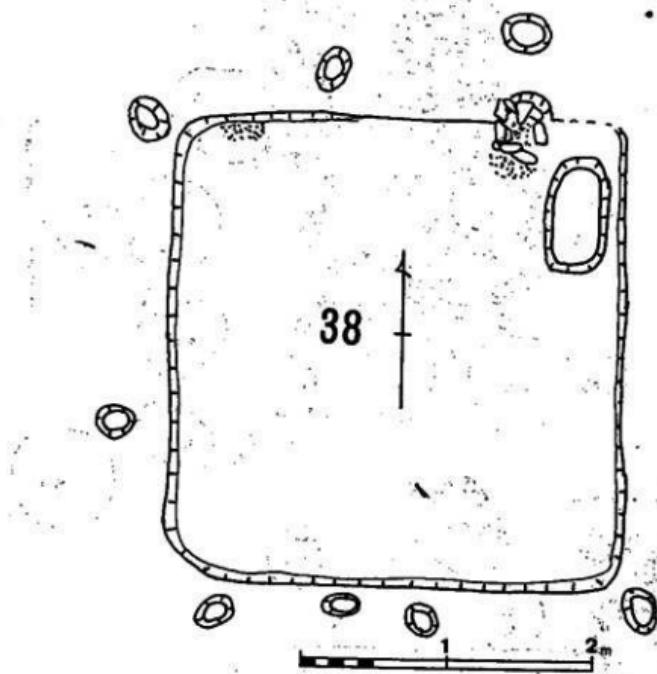
85図 35・36号住居址石器（上35住居址、下36住居址）



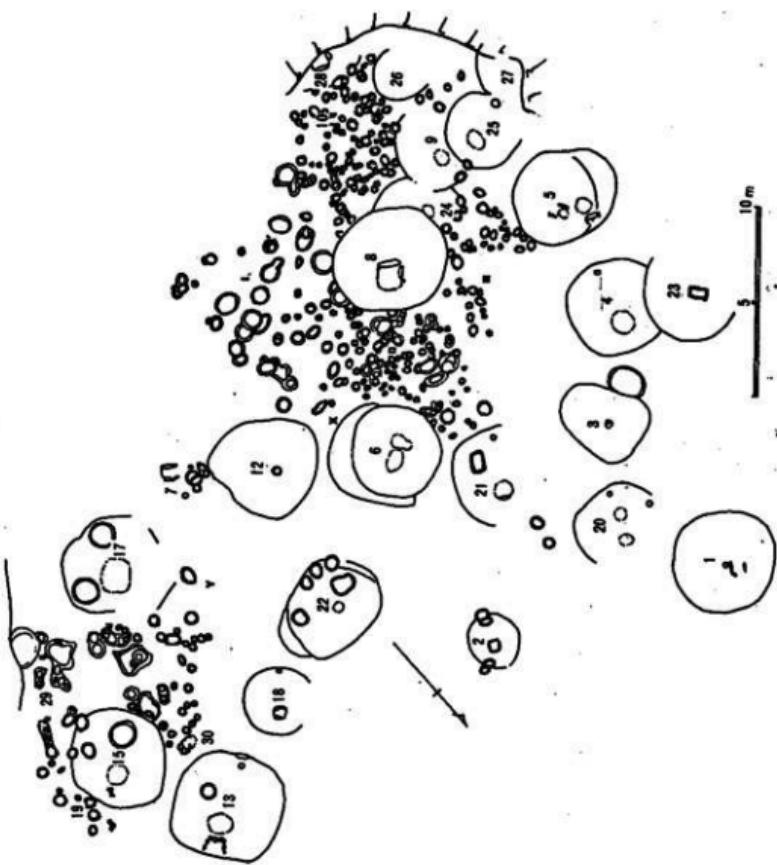
86図 36号住居址



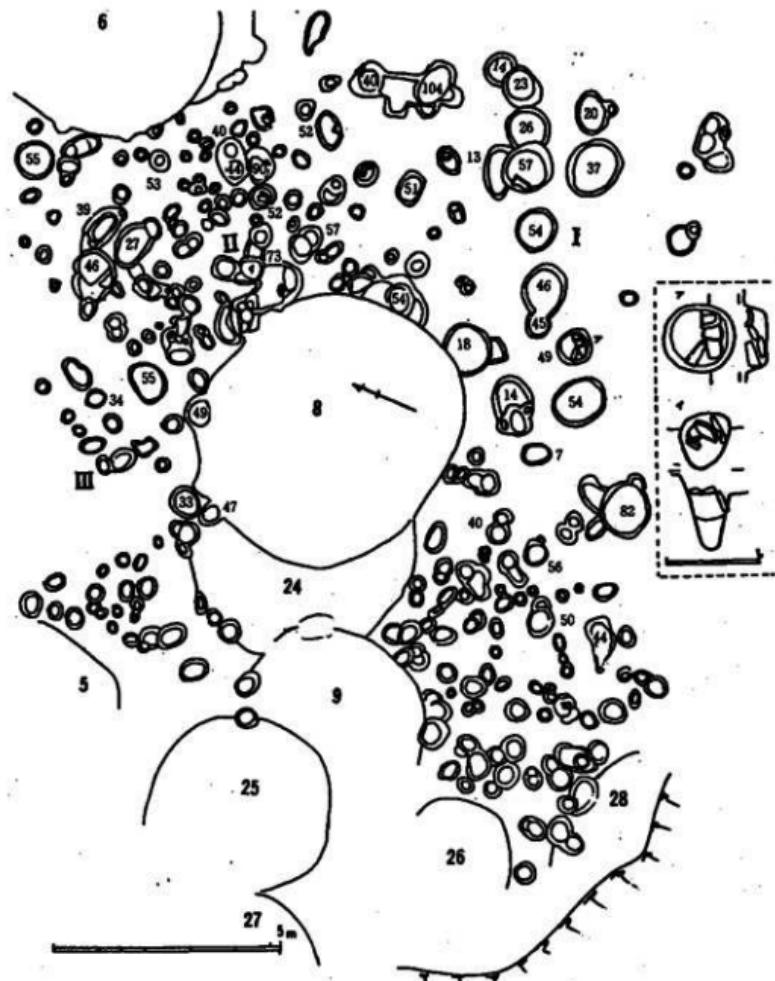
87図 37号住居址



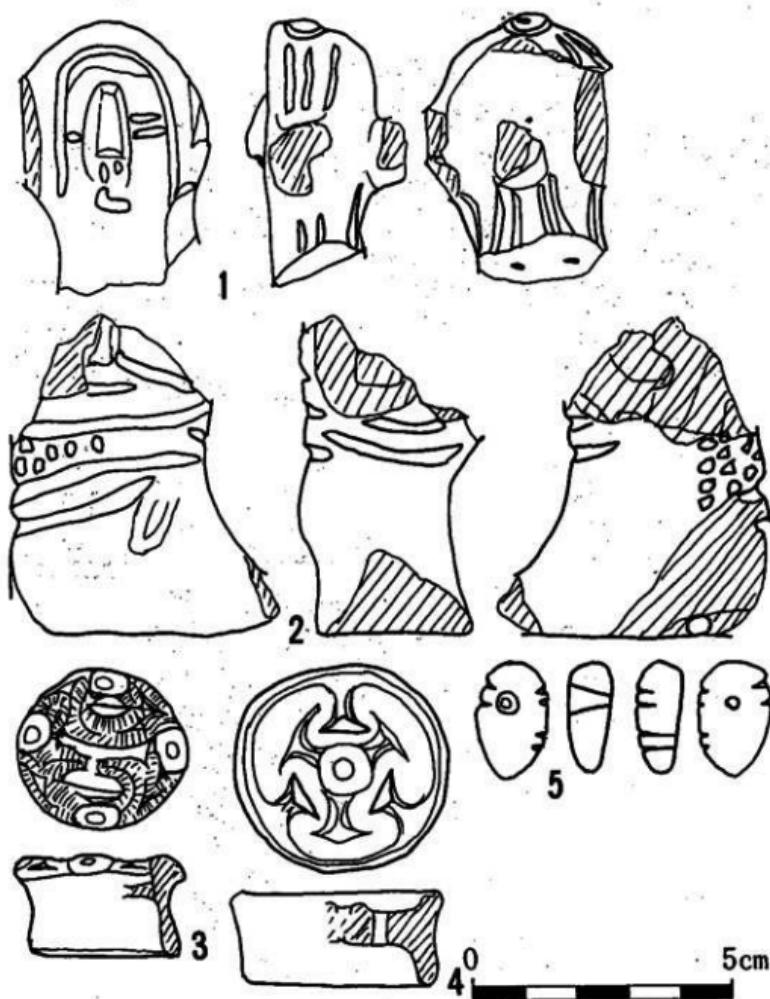
88图 38号住居址



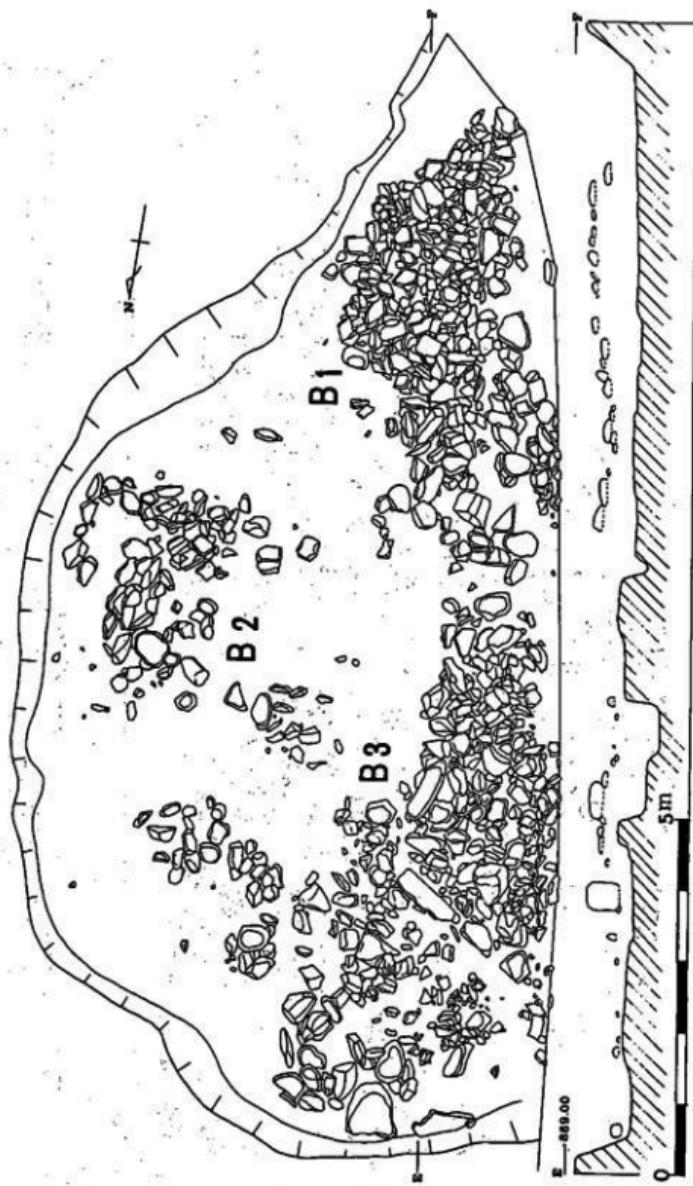
89図 A地区土塗群



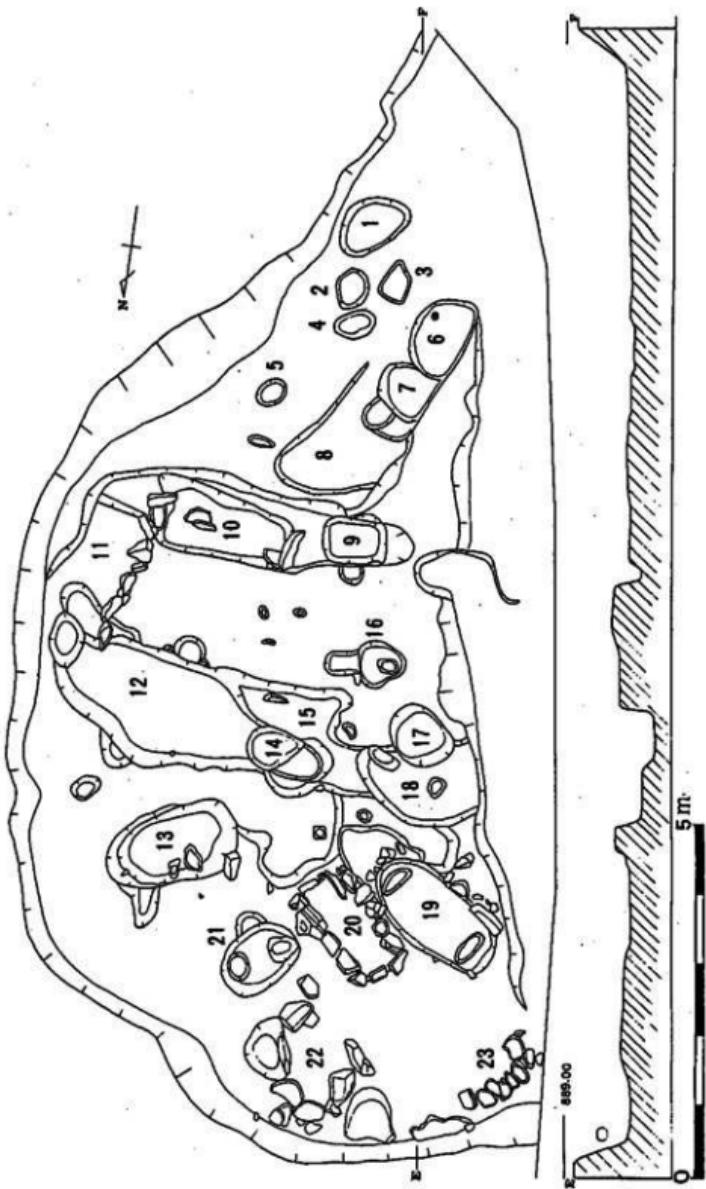
90図 土坑群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ



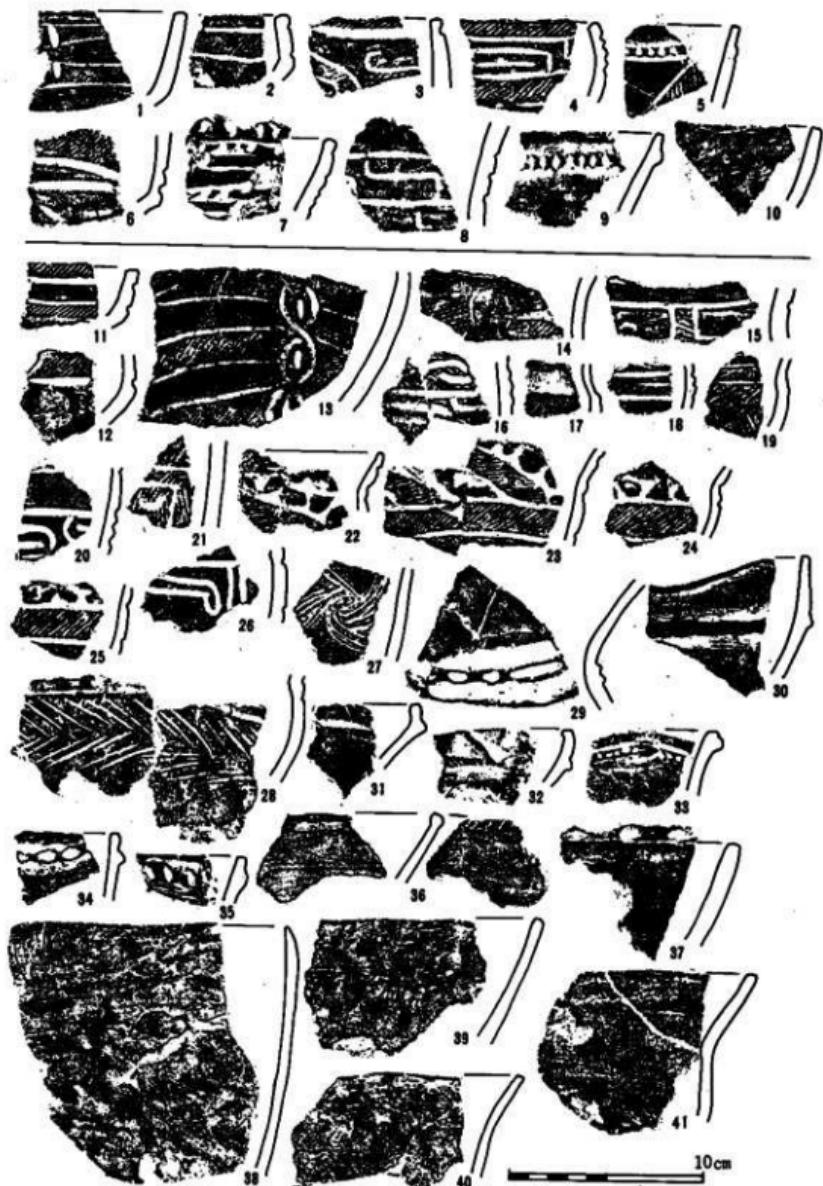
91図 土偶・耳飾・玉（1-9住居址、2-4住居址、3・4-B2、5-B1）



92図 B地区集石墓坑上部集石



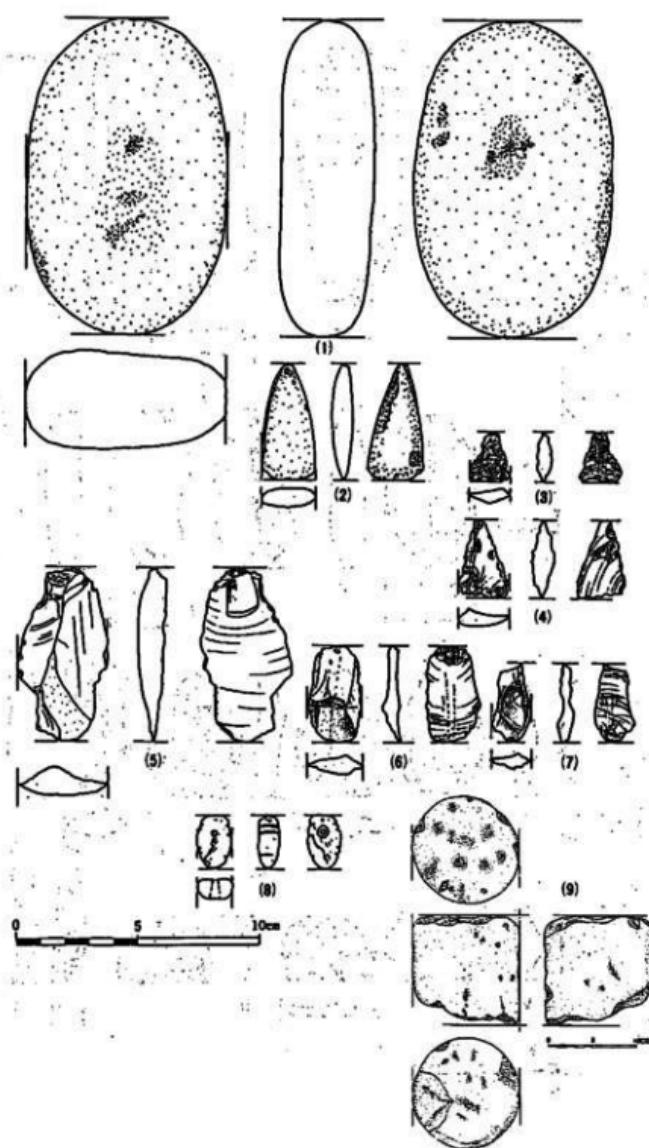
93图 B地区集石墓下部墓室



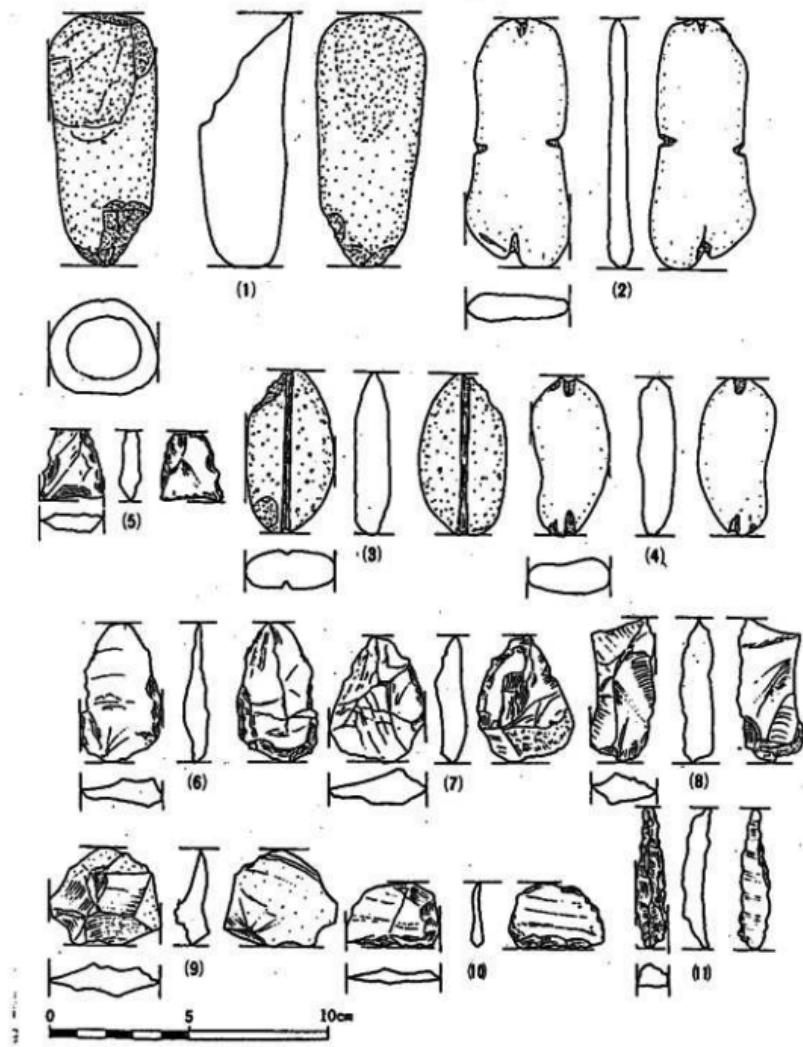
94図 B1・B2出土土器 (B1・1~10、B2・11~41)



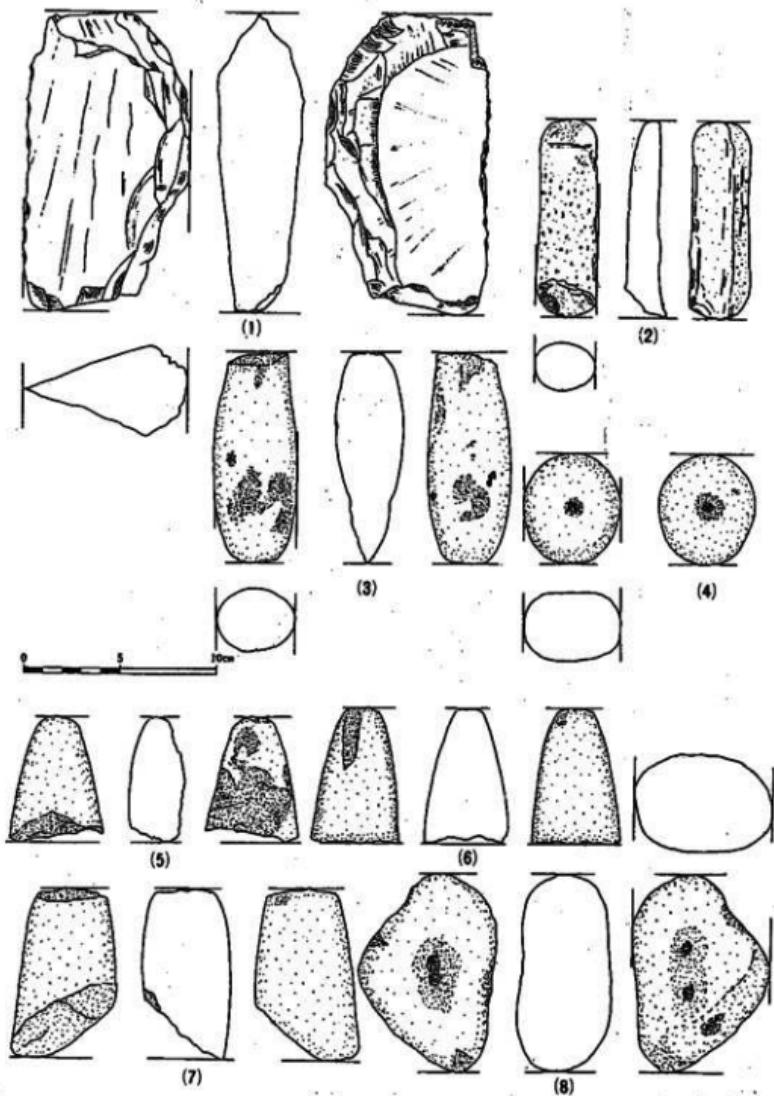
95圖 B.3 出土土器



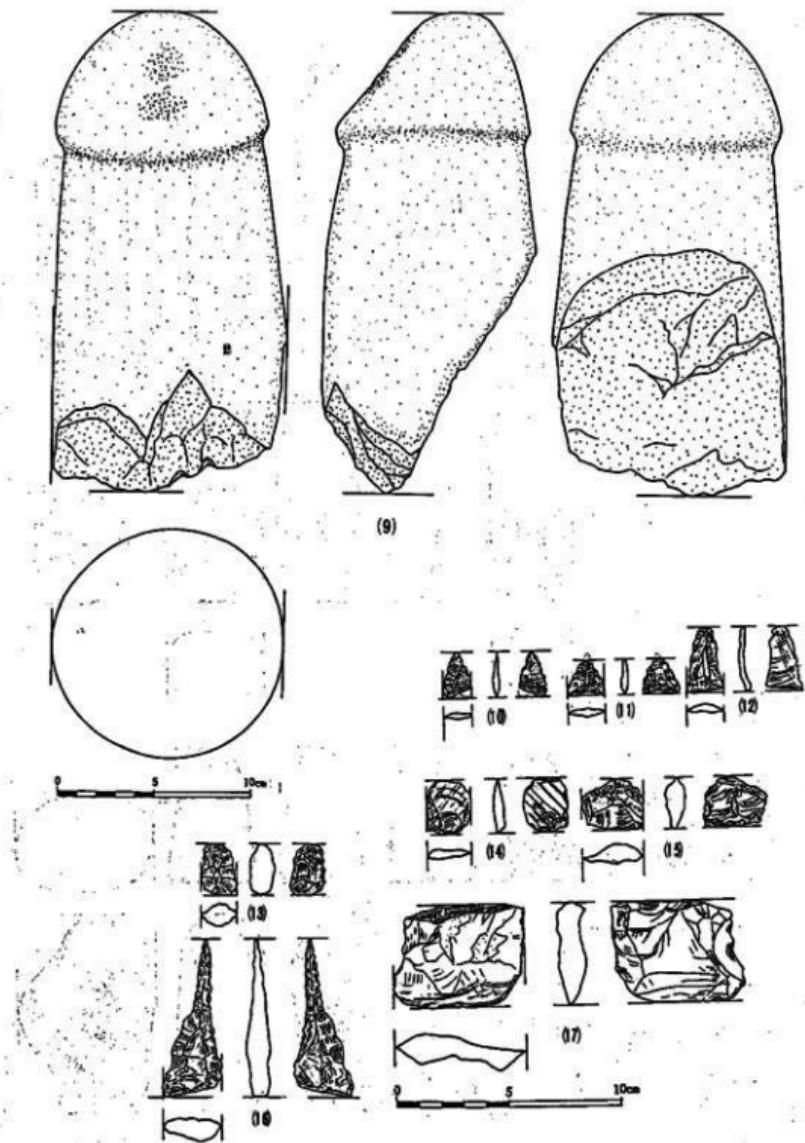
96図 B 1 出土石器



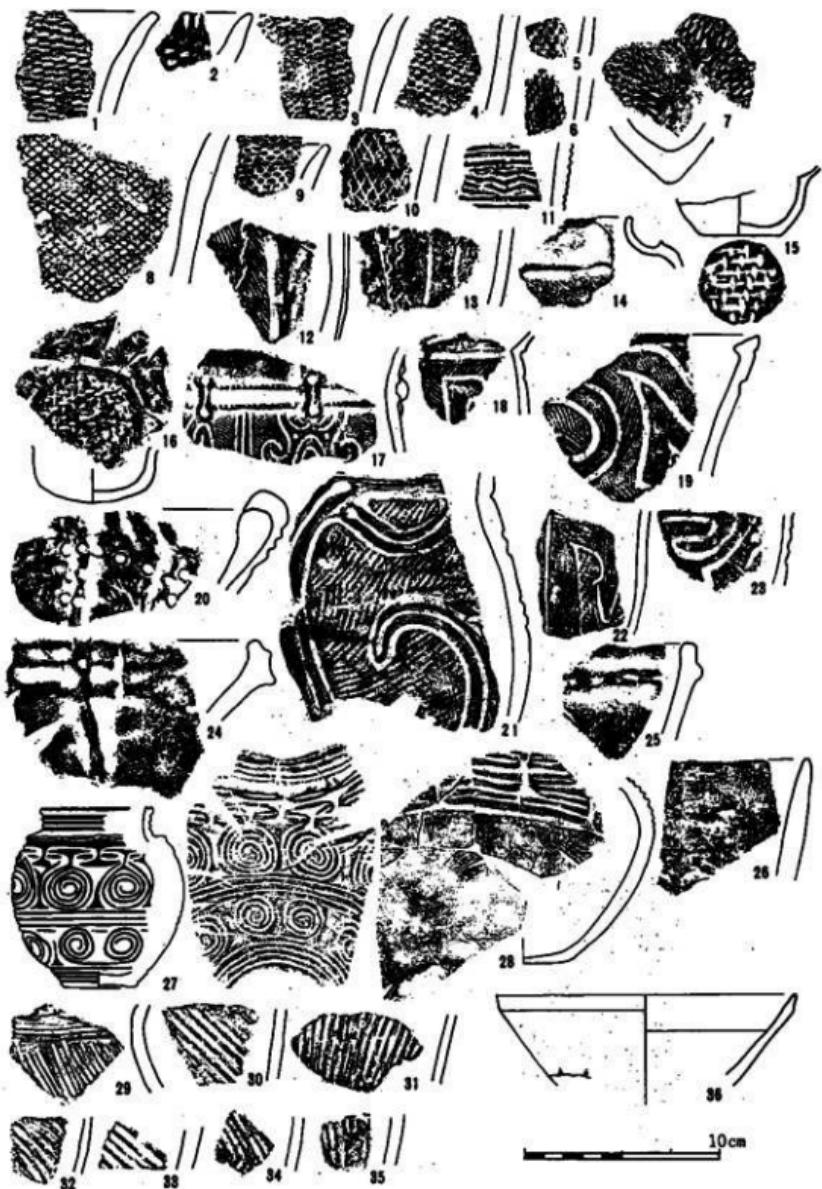
97図 B2出土石器



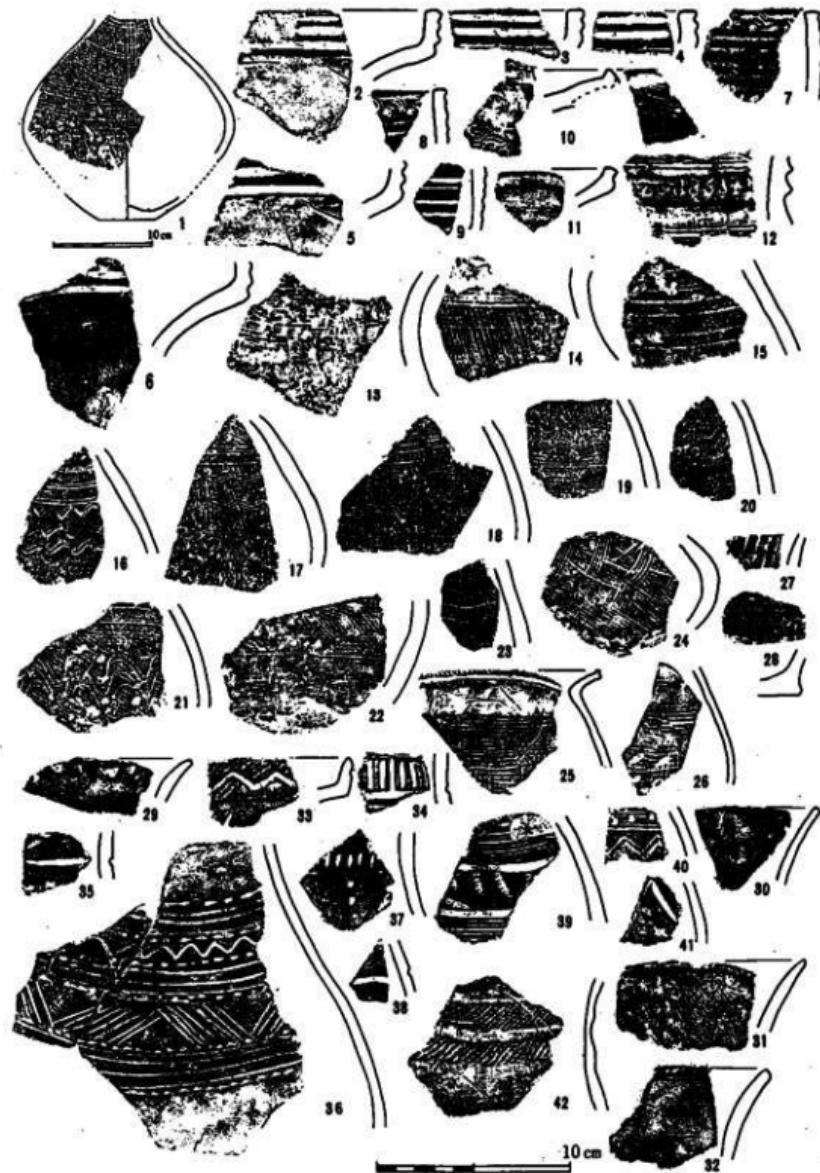
98図 B3出土石器(1)



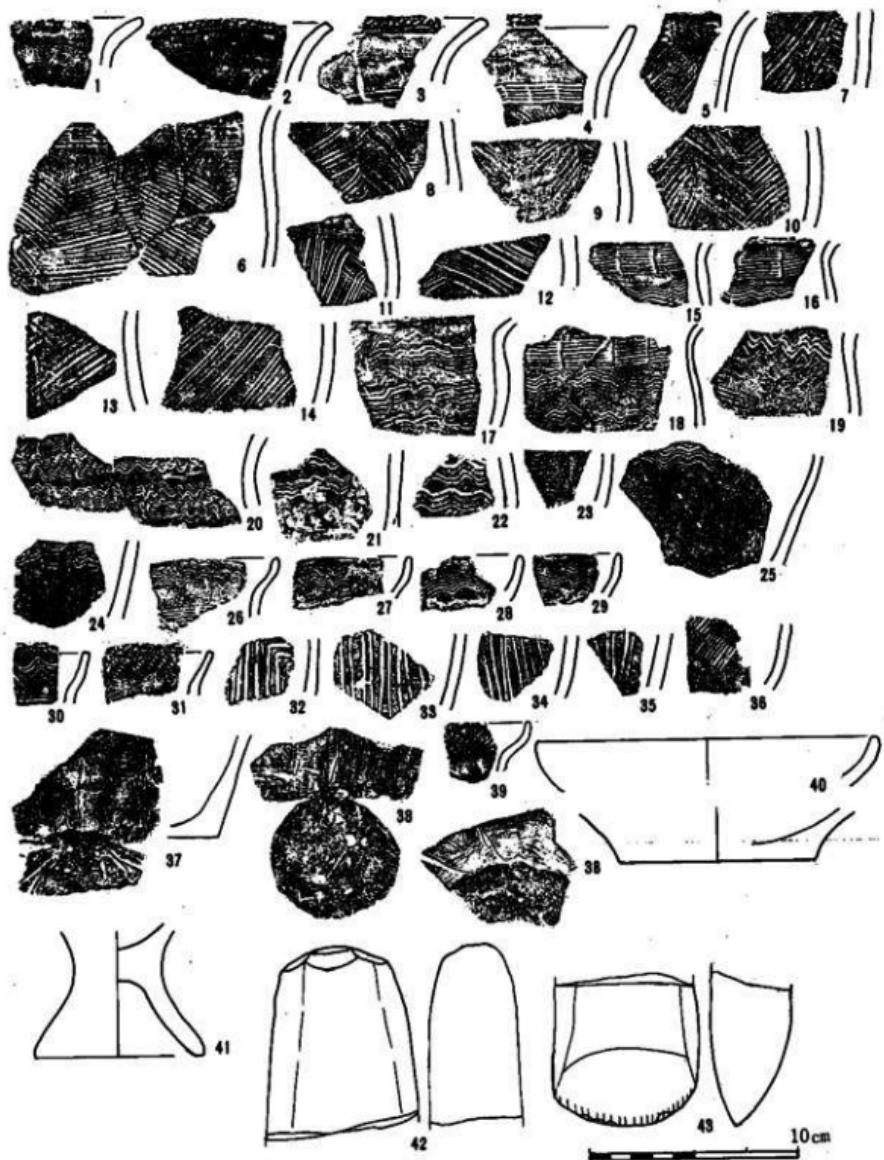
99図 B-3 出土石器 (2)



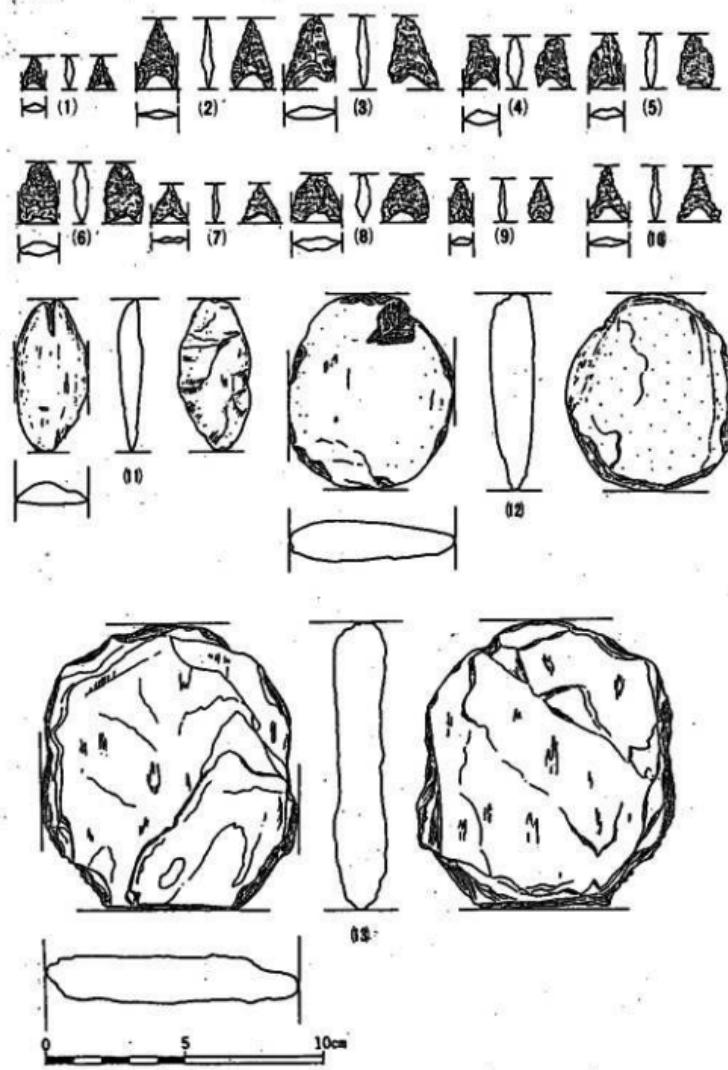
100図 A地区出土土器 (1)



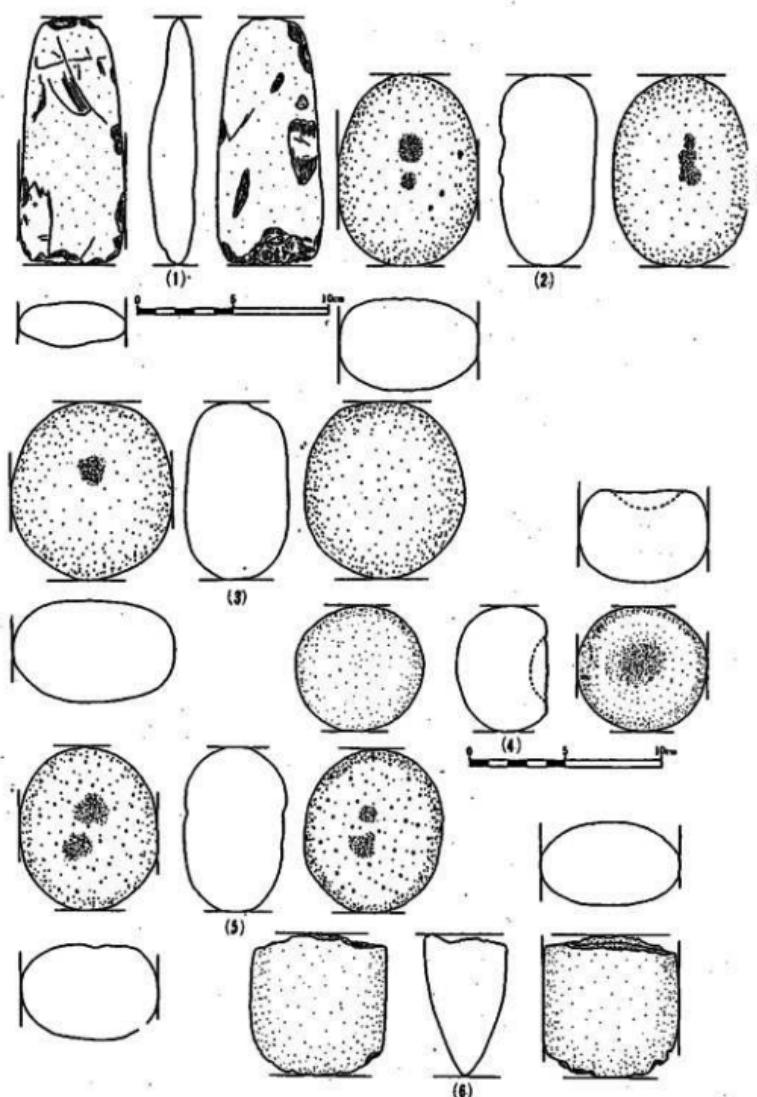
101図 A地区出土土器(2)



102図 A地区出土土器(3)



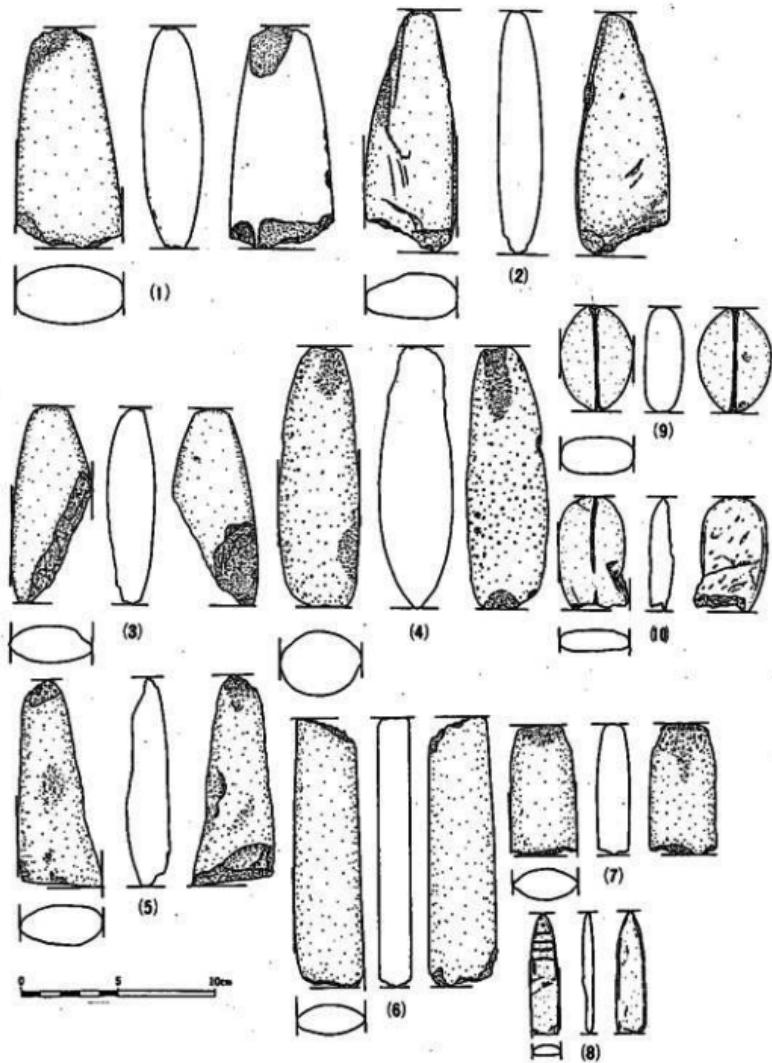
103図 A地区出土石器 (1)



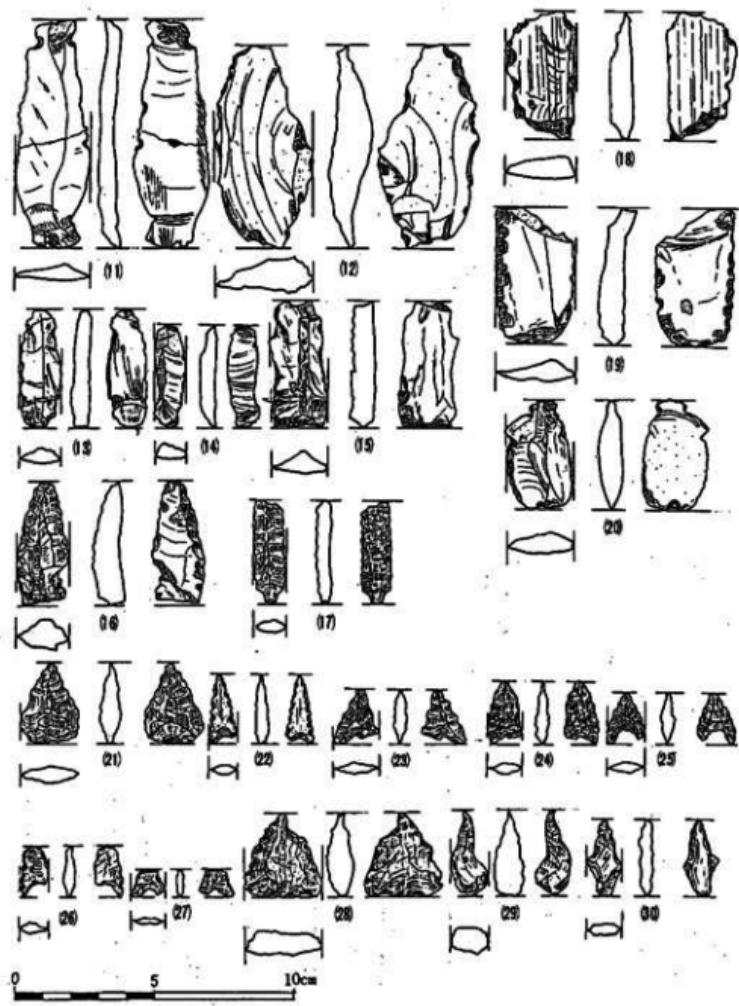
104図 A地区出土石器(2)



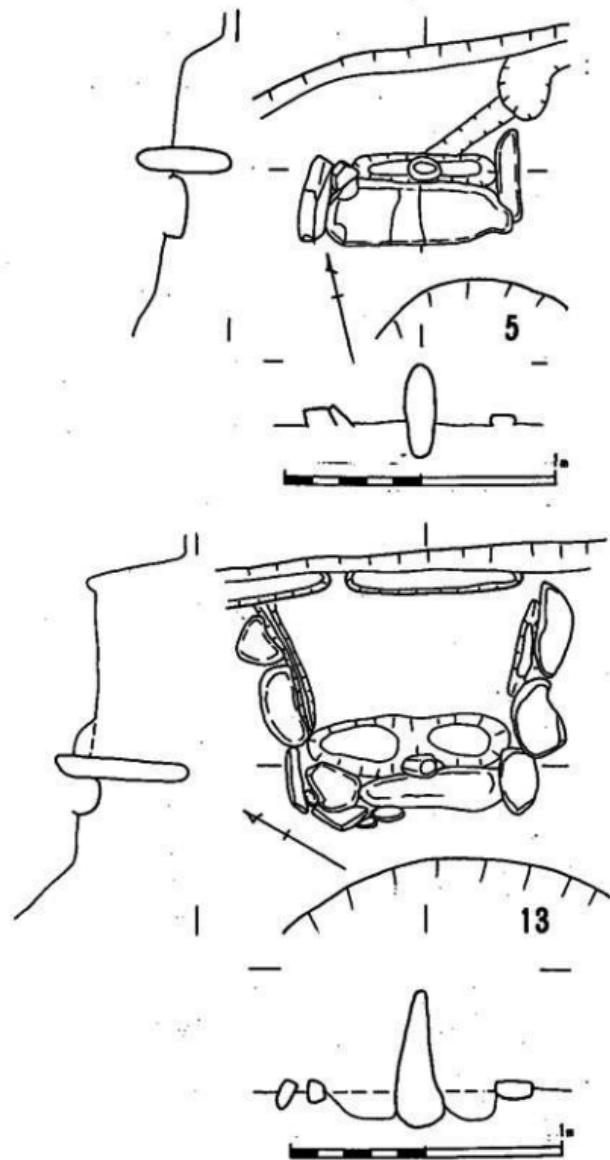
105図 B地区出土土器



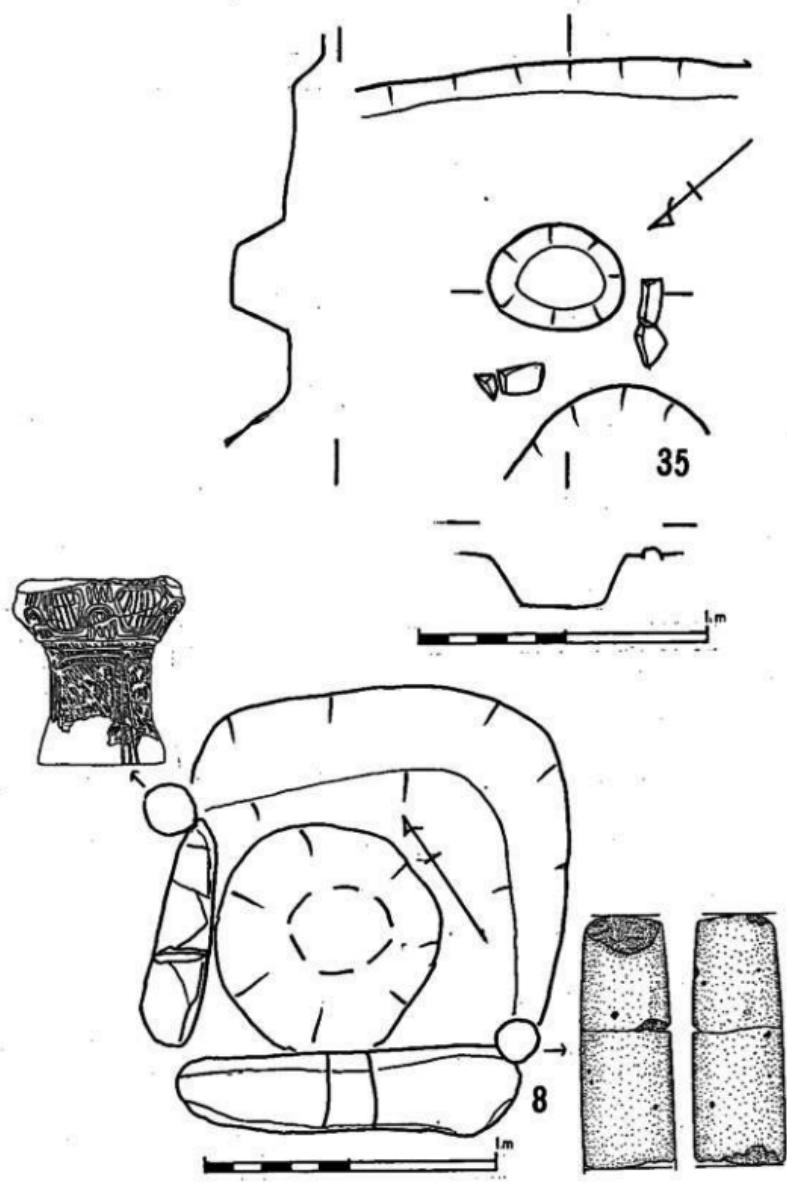
106図 B地区出土石器 (1)



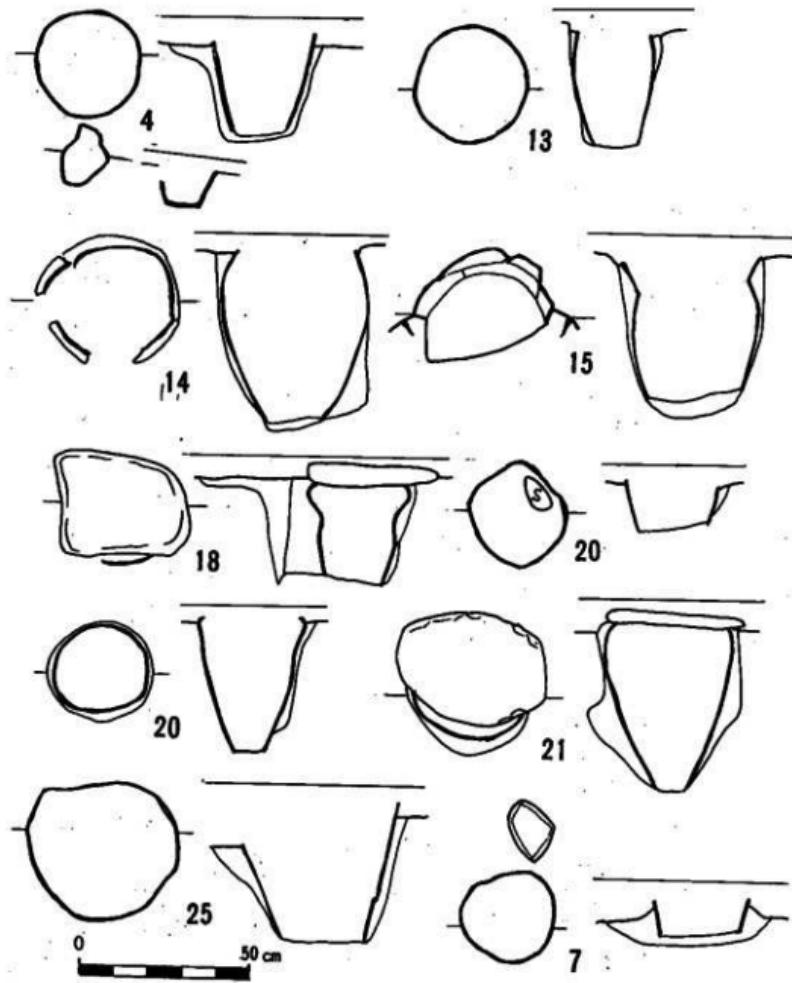
107図 B地区出土石器(2)



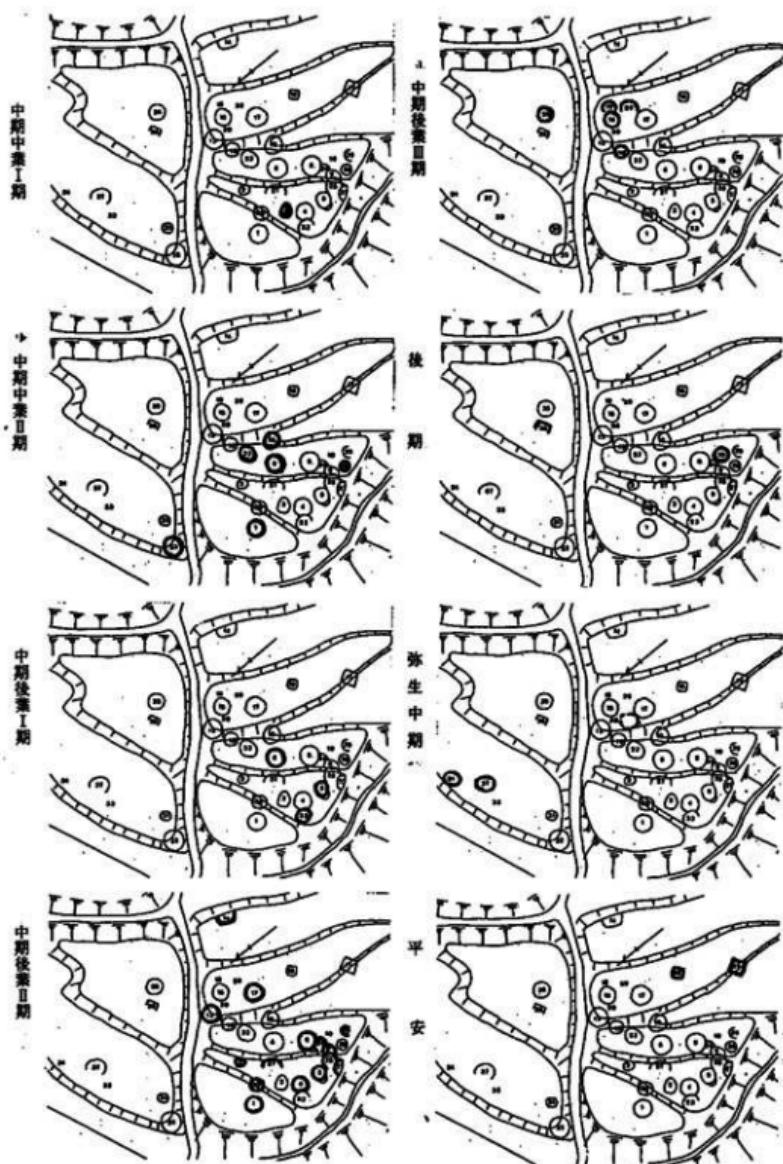
108図 石柱石壇遺構（5、13住居址）



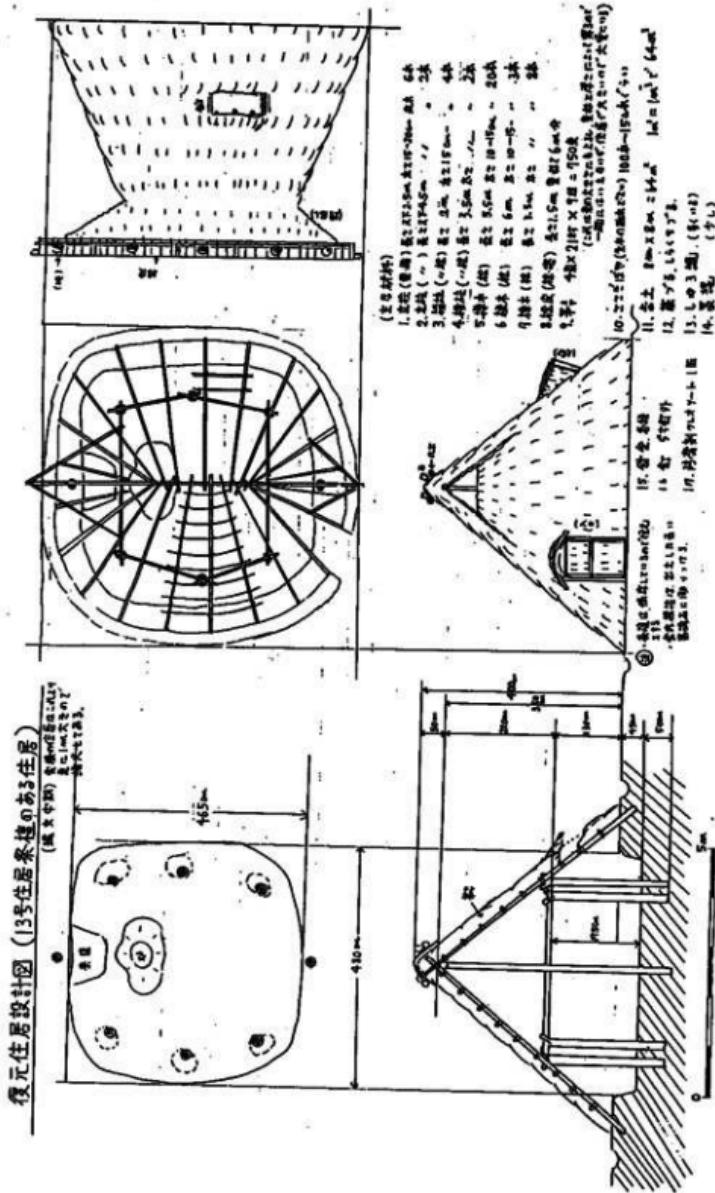
109図 石壇遺構・炉縁石棒樹立 (35・8住居址)



110图 埋甕平面·断面图



111図 集落の移り変り



112図 復元住居設計図（山下生六）





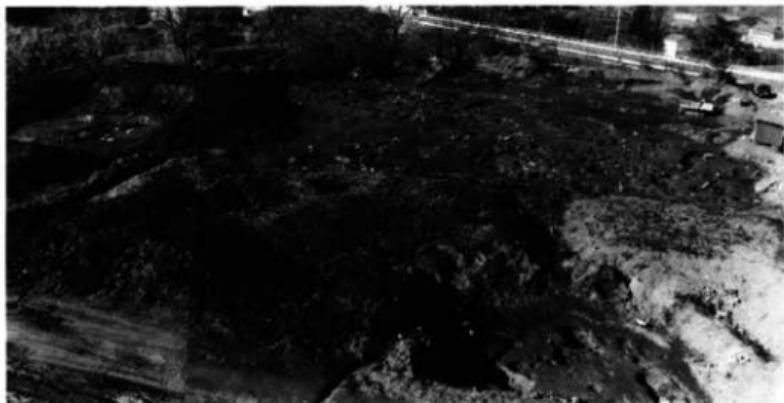
段丘部を北より、(○印マツバリ遺跡)



西よりマツバリ遺跡(○)を



東上空より遺跡を



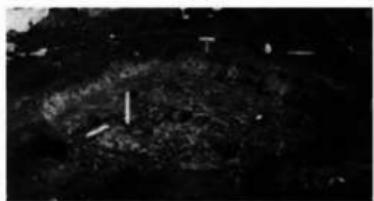
A地区全景



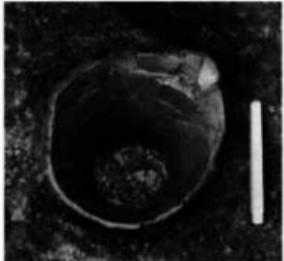
1号住居址全景と炉

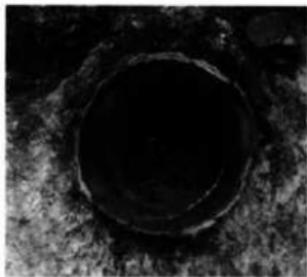
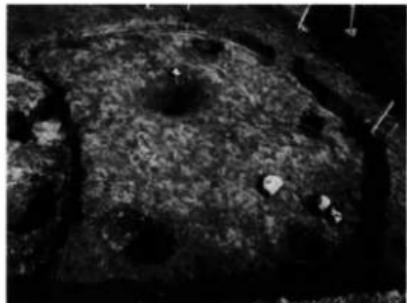


2号住居址と炉

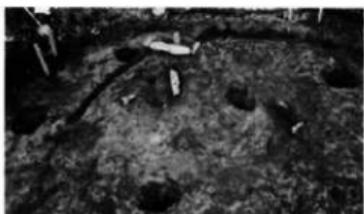


3号住居址と炉

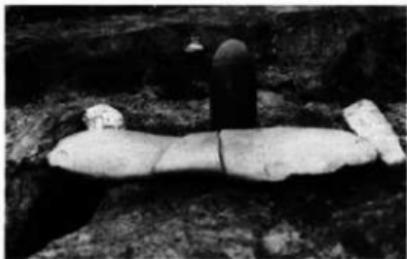




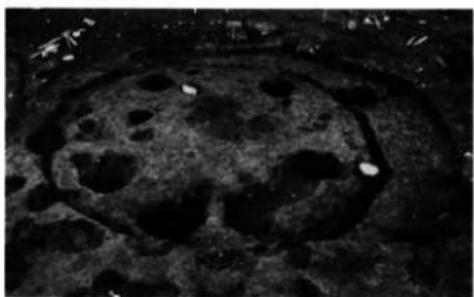
4号住居址と埋甌



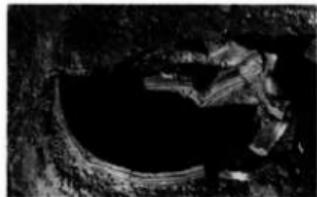
5号住居址



5号住居址の石柱石壇



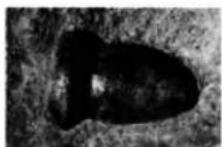
6号住居址

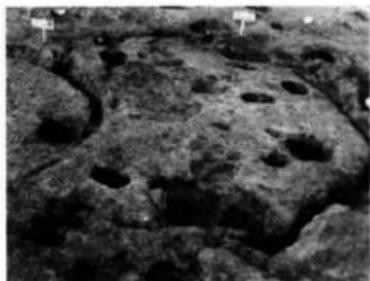


8号住居址と土器出土状態

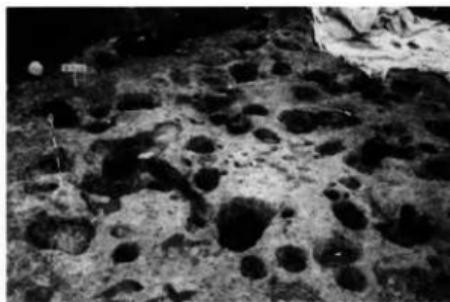


炉縁に埋められた土器





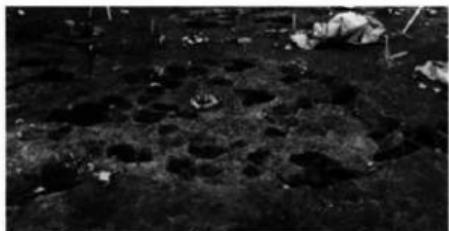
9号住居址と有孔ツバ付土器と土偶



10号住居址と土器出土状況



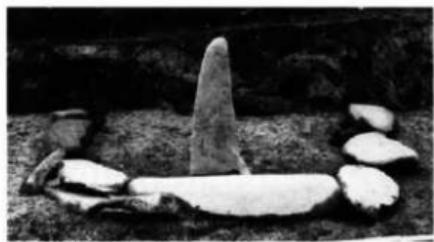
11号住居址と住居内集石



12号住居址と炉

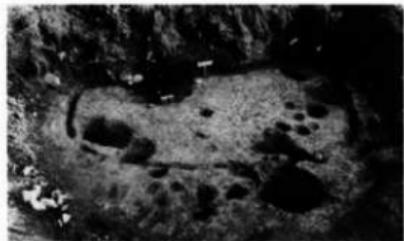


13号住居址と埋甕



13号住居址の石柱石壇





14号住居址と埋壳



15号住居址と上にのる19号住居址

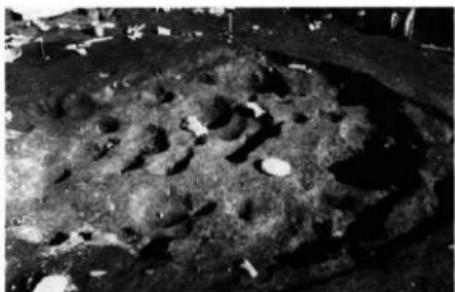


15号住居址の埋壳



16号住居址と石組カマド

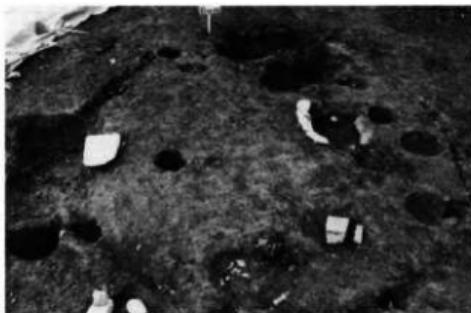




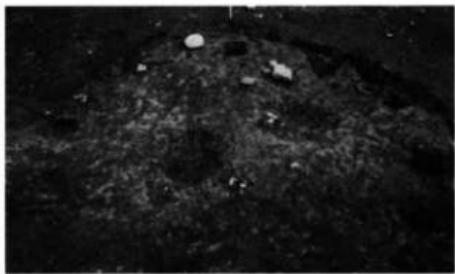
17号住居址



19号住居址炉

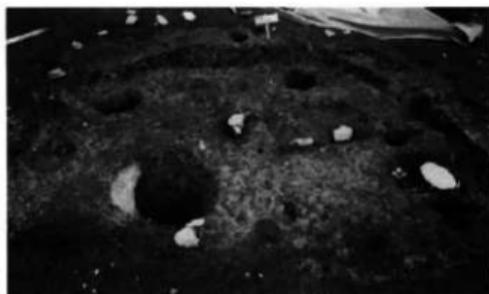


18号住居址と埋甕

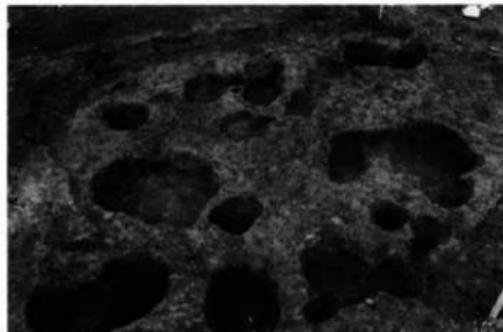


20号住居址と埋甕





21号住居址と埋甕



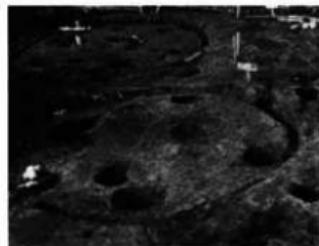
22号住居址



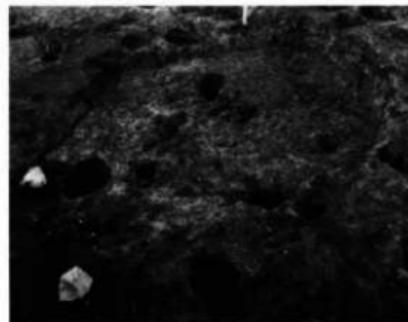
23号住居址



24号 住居址

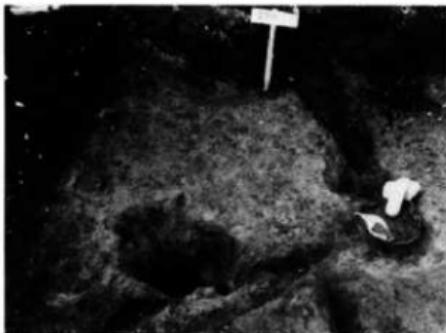


25号 住居址と埋甕



26号 住居址





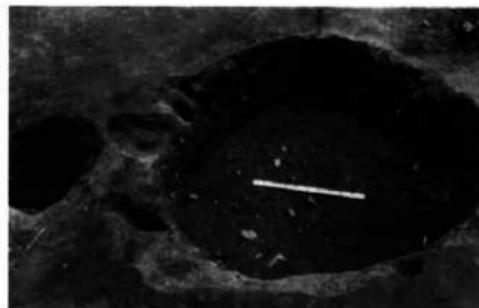
27号住居址



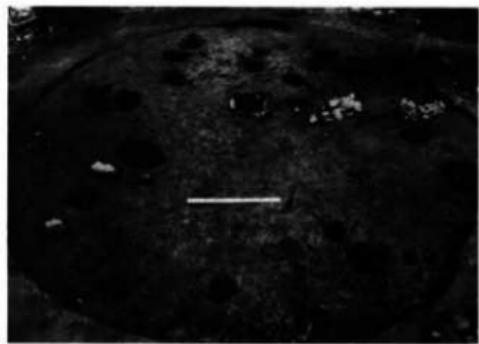
28号住居址



29号住居址



31号住居址

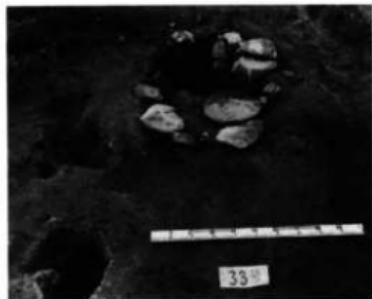


32号住居址



同住居の  
土器出土状況

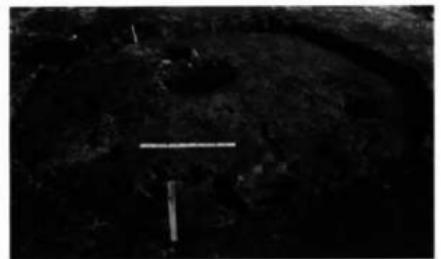




33号住居址

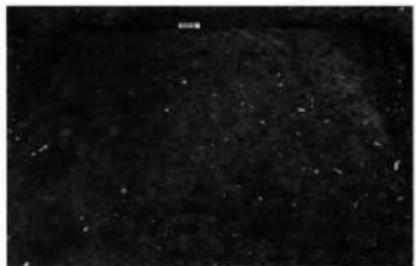


34号住居址と炉

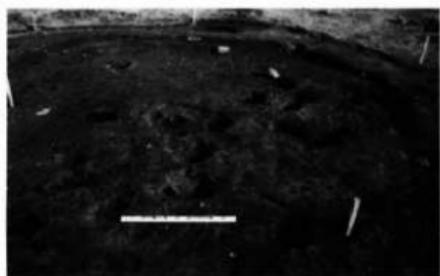


35号住居址と石壙

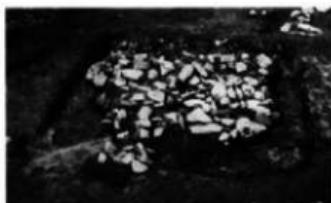
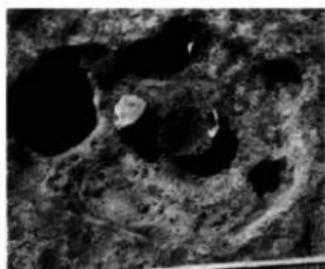




36号住居址



37号住居址と炉



38号住居址と住居内集石と石組カマド





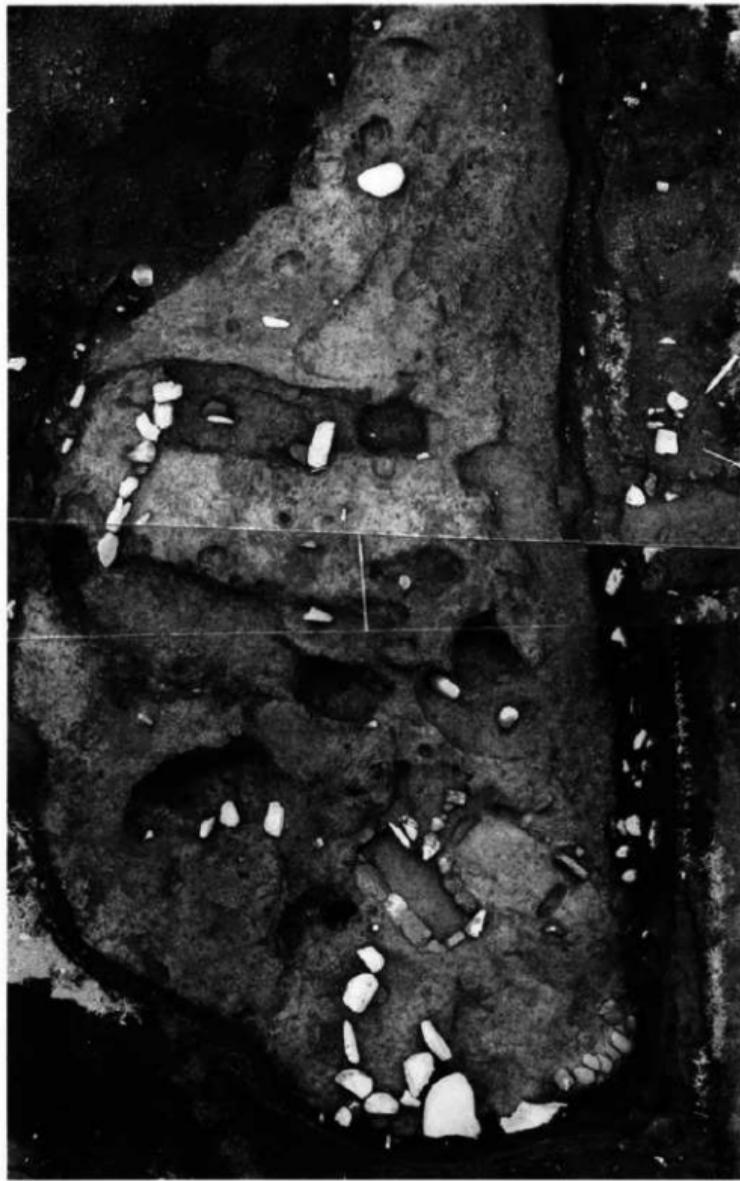
土 拓 群 II



19号住居址附近土拓群



B地区集石墓地北部上部集石



B 地區集石墓址下部墓坑

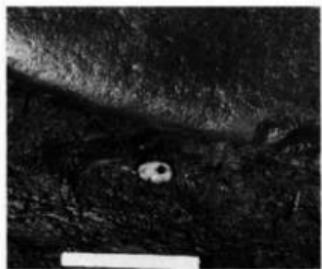
墓塚19・  
20号



墓塚19号上部の石柱  
(?)



石棒・ヒスイ玉出土





3号住居址



32号住居址



8号住居址



13号住居址



8号住居址

第二十二圖版  
遺物(3)



21号住居址



18号住居址



6号住居址



5号住居址



9号住居址

第二十三図版 遺物(4)



20号住居址



14号住居址



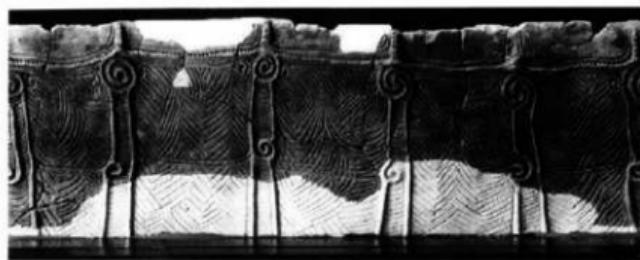
第二十四圖版  
遺物(5)



13号住居址



11号住居址



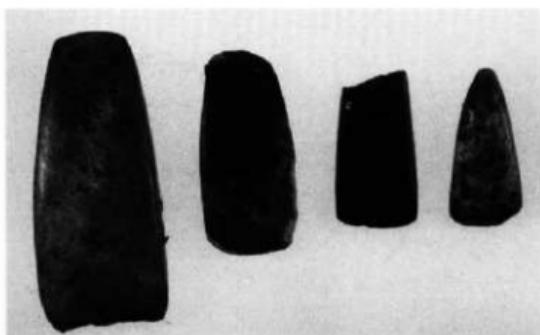
25号住居址



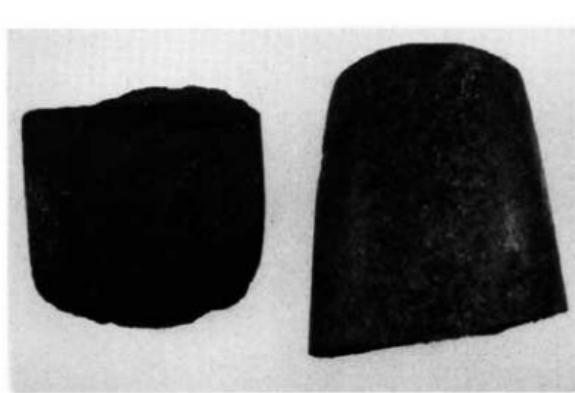
25号住居址



35号住居址



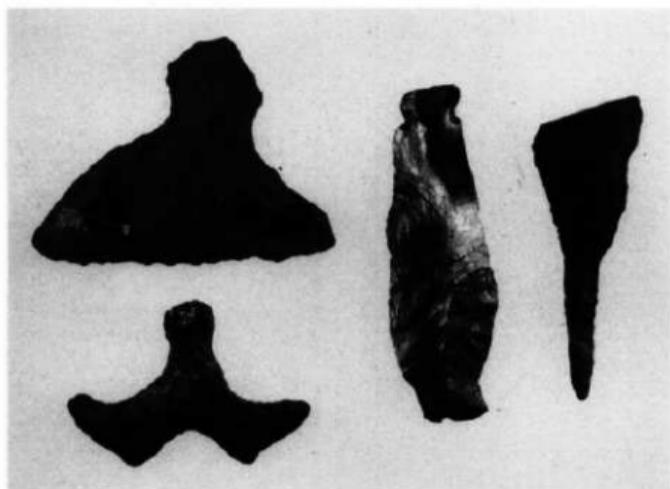
繩文中期定角式磨石斧



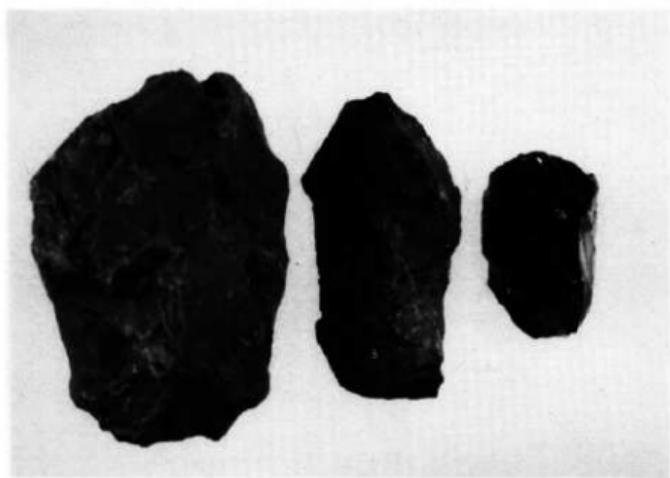
弥生中期太形蛤刃石斧



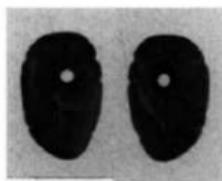
繩文後期磨石斧



石匕、石錐

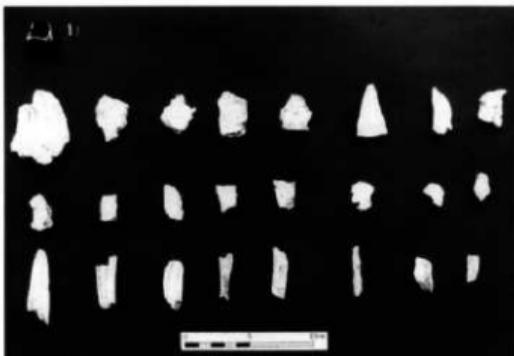


原材石核(チャート、下呂石、黒曜石)



土偶（9号住居址、4号住居址）

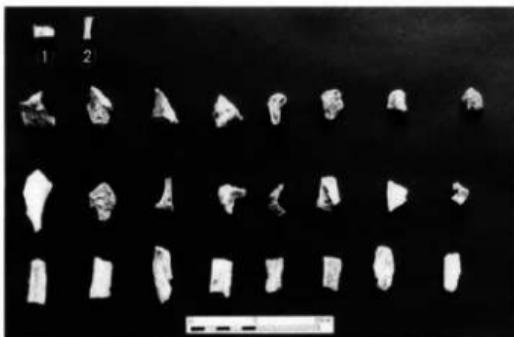
ヒスイ玉



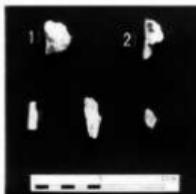
10号住居址（人骨他）



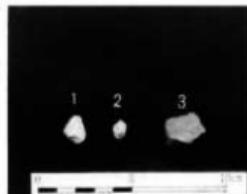
10号住居址（動物類）



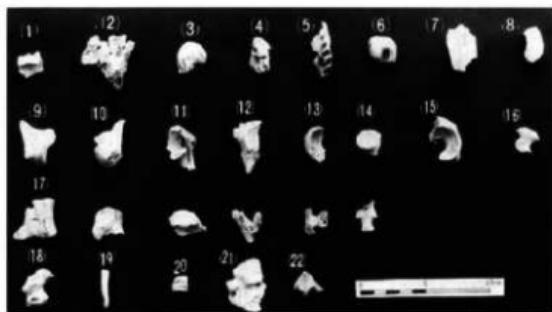
17号住居址（鹿・猿骨）



(左) 5号住居址  
(猪・猪骨)



(右) 18号住居址  
(埋め甕中出土  
人骨片?)



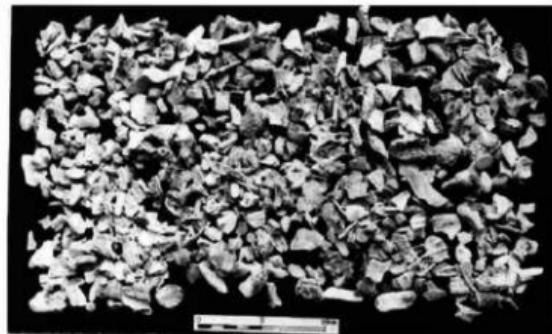
29号住居址横ピット  
(猪の骨)



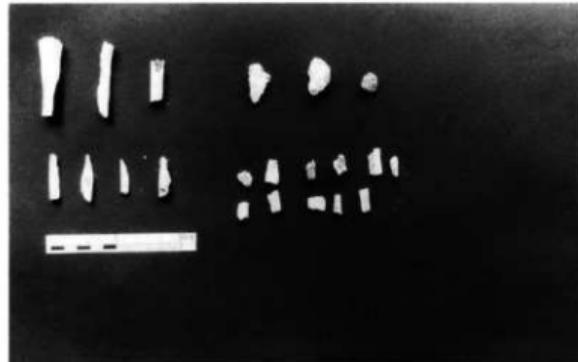
29号住居址横ピット  
(日本鹿の骨)



29号住居址横ピット  
(月の輪熊の骨)

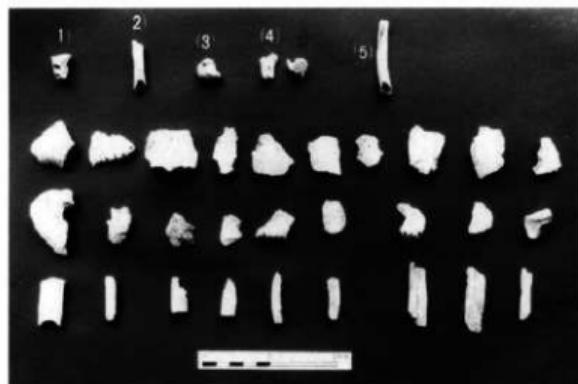


29号住居址横ピット  
(焼けて風化している  
骨片)



B 1 墓構

(人骨他)



B 2 墓構

(犬・鹿・鳥・他、  
人骨)



B 3 墓構

(鹿・山鳥他人骨)



B 3 墓構  
腕骨・脛骨類



B 3 墓構  
焼けて風化している骨片



(左) D地点鹿の角  
上・下  
(右) 炉中より出土  
細骨片



遺跡より木曾駒ヶ岳を  
撮る



第1次調査関係者



現地説明会



第2次調査関係者

日義中学生の見学



日義村の文化財（調査報告書）

- 1 「御靈森遺跡発掘調査報告書」（昭和51年3月）  
(日義学校配水池築造に伴う緊急発掘調査報告書)
- 2 「長野県木曾郡お玉の森遺跡—平安時代後半の集落」（昭和52年3月）  
(日義中学校体育館・駐車場建設に伴う緊急発掘調査報告書)
- 3 「上の原遺跡」（昭和53年2月）  
(通常砂防事業取付道路に伴う緊急発掘調査報告書)
- 4 「上の原遺跡—平安時代小鍛冶住居址」（昭和54年3月）  
(中部電力電柱置場造成に伴う緊急発掘調査報告書)
- 5 「長野県木曾郡お玉の森遺跡—平安時代後半の集落」（昭和56年3月）  
(日義小学校給食施設建設に伴う緊急発掘調査報告書)
- 6 「長野県木曾郡お玉の森遺跡—平安時代後半の集落」（昭和58年8月）  
(日義村庭球場建設に伴う緊急発掘調査報告書)
- 7 「長野県木曾郡宮の原（元原）遺跡—中世遺跡」（昭和61年3月）  
(工場用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告書)
- 8 「日義村の石造文化財」（平成元年3月）
- 9 「長野県木曾郡お玉の森遺跡（第8次調査）」（平成3年3月）  
(建設省除雪センター建設に伴う緊急発掘調査報告書)
- 10 「元原遺跡—室町期富裕農民屋敷跡」（平成6年9月）  
(木曾農協原野出張所建設に伴う緊急発掘調査報告書)
- 11 「マツバリ遺跡—木曾谷の绳文中期拠点集落」  
(日義村在家地区圃場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書)

---

日義村の文化財 11

## マツバリ遺跡

---

発行日 平成 7年 3月 30日

発行者 日義村教育委員会  
長野県木曾郡日義村1600-1

印刷所 トキワ印刷株式会社  
電(0264)22-2228

---

